

环A72

百家說林

卷二

兩憲用話



115511

序

友人小林德方袖兩窓閑話一帙來示。且請
知何人所著。而其語則時無古今。事無巨細。皆有評論。而
其言公正。其意切實。以寓鑑戒。有裨益乎士人不為少也。
宋王文正有筆錄一焉。雜記舊聞。不擇巨細。立意正確。要
歸鑑戒。後人以爲多裨益。夫文正正色立朝。維持風采。以
爲天下之率。其德其業。赫奕一代。若夫筆錄者。固其緒餘
耳。然亦有因此可以見其抱負之大者。則豈可以小著輕
視之乎哉。今此書雖事有東西異。文有倭漢之別。然以其
命意言之。其亦文正筆錄之亞乎。廼因其書以求其人。則
其抱負之大。或可推也。惜乎不記其姓名也。夫水有源而

後有混々之流。故觀水者必於其瀾。此書也其或水之瀾乎。焉知其源之不遠大耶。乃書以爲序
 嘉永四年孟夏

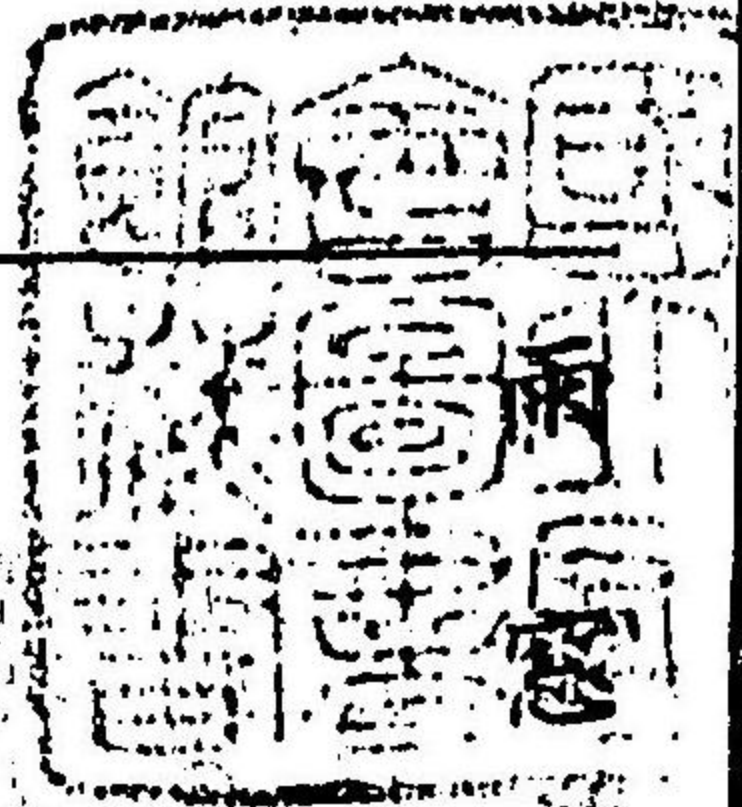
屏浦居士河田興撰并書

雨窓閑話目錄

一織田信長各番の事并印陣打の事	一頁	一一里塚始の事	廿三頁
附神君御代駿河よて御儉約の事		并五左衛門井戸の事附名君教諭の事	
一太閤秀吉與方素性	四頁	一觀世一代能の事并木賊川の事	廿五頁
并明智次左衛門の事		一太閤刻齋召し上がるゝ事	廿八頁
一佐川田喜六名歌の事并評論	七頁	并利休教訓の事	
附名君臣下へ教諭深切の事		一吉村又右衛門の事	三十頁
一加藤清正心入の事	十頁	并可兒才藏の事	
并庄林隼人分家米出米助の事		一細川侯和歌の事	卅四頁
一荒木又右衛門幼少の事	十三頁	并かしく坊の事	
并血氣勇者の事		一桑名屋徳藏の事	卅六頁
一堀秀政の家士泣面の事	十六頁	并妖怪と答話の事	
并武田家臣大藏左衛門の事		一薩摩の野郎の事	卅八頁
一岩瀬郡の老人物語	十八頁	并北村季吟が子を呵る事	
并戦國の時乃齋の事		一曾呂利の事	四十一頁
一本多風襲并家風定まる事	廿一頁	并阿部侯伴大膳等の事	

一 松平信綱侯の事	四十四頁	一 感情の發句の事	五十九頁
并大石良雄が評の事		并盜賊句を感ずる事	
一 進喜太郎が僕才六が事	四十五頁	一 賢女物語の事	六十二頁
并桶屋物語の事		并山ある深の事	
一 興州泉領孝子の事	四十七頁	一 國府寺筋并島左近が事	六十七頁
并名君行狀の事		一 謙信侯毘沙門の事	六十八頁
一 古代質素并小倉色紙の事	五十頁	并三淵大和守が事	
一 小野木妻女の事	五十二頁	一 名君節儉の事	七十頁
并かちん乃事		并喜多見某が事	
一 蒲生家の士喧嘩の事	五十四頁	一 岡本半助が事	七十三頁
并同家由緒の事		并茶亭の切の事	
一 少年敵討の事	五十六頁	一 名君夜話の事并仁心は事	七十六頁
并雲州の士詞乃助太刀の事			

雨窓閑話目録終



閑話

著者不詳

織田信長公各番并印陣打の事

一 織田上總介信長公の各番第一の人なり。角力を好みてとらせらるる。三番勝する者へは。焼きたる粟三つづつ。褒美にあたへ給ふ。至りてしる事これよてしるべし。然れども其器量よないて。中々凡人の及ぶ所もあらむ。幼年の時。尾州清須在所の寺へ手習へ行かれける。相第子の寺子共四五十人も有りけるが。五月五日の日。休の事をなれば。印地打を遊びとなま。此印地打。古きたねむれよして。頼朝時代より有りとぞ。たとへば。其遊び。子供東西よ立ちあかれ。石蹴を以て。打ち合ひ勝負を争ふ。五月五日を印地打の遊びの日とす。印陣打と雙方の手負死人多きよ因りて。或は怨を含み。憤恨を夾むもの少からむ。毎年一其戦ひ大よなりて。偏は劍を用ひざる軍も同じ。此故に。御三代目。將軍家の御時。寛永十二年印地打の儀嚴敷御制禁を仰せ出だされける。信長幼少の時。深く此遊びを好みて。五月五日の日。いつも御母公より紙筆墨のたぐひ。

飯米三斗。永樂錢一貫文づゝをへておこせられけるを。信長其錢をば子供にあたへ。印地打をさせらる。其鳥目をもらひたるもの。勸拔群なり。叔又。高名より褒美として。恩賞の鳥目を與ふ。終一錢も貯へずして。皆子供らよわかち與へけり。其心入れの程。日頃の吝嗇とい。格別にて。心有る者。此童子末々の。名將となりなんとて。舌を巻きて。感ぜしとかや。果して其ごとくなり。

某の人曰く。此漸を誠銘々の身より引き競ふべき事なり。今日の儉約。此心持てする時の。間違ふこと有るまじ。信長公名高き吝嗇人なれ共。其人をして。其志を見るといふが如くして。印地打鳥目をしまさる所。誠感敷たへたり。昔。神君御代。駿河にて二三年の間。御儉約の事有りて。本多佐渡守正信命を蒙りて。奉行しける。其年の門松。例より大にして。又正月三日御講初の節。門ごと燈す蠟燭。例年より格別又大なり。神君正信を召して。かねて儉約の義。申付けたる處。門松の大なる。蠟燭の大なるといかよう。御尋ね有りし。佐渡守畏りて申す様。かゝる御規式の事を。りつむし仕らんとて。かねての儉約仕候也と申し上げられしかば。御機嫌不斜とぞ。此佐渡守兩三年の御儉約中。金銀米穀軍用等の手宛。澤山持らへ置さし。

元和五年。天下困窮。及びし節。其時。御救ひ下されし由。佐渡守が功。爰かいて。顯れたり。天下の儉約。天下の爲也。國家の儉約。國家の爲なれば。別餘計の湧き出づるもあらざれば。たゞおのれが身を詰め。まさかの時。用立てんとする。儉約。ししくなし。能く此事心得べしと也。しかれば。儉約。隨分心をちいさく持つをいふかと思へば。左よあらむ。既信長かほどまで吝嗇大將なれ共。人は國所など與へらる。何とも思われず。柴田勝家。北國越後。柴田といふ所あれば。其方は宛て行ふ。依りて。切り取りよせよとて。北陸道七箇國。七拾萬石をたまひ。瀧川左近將監一益。八幡太郎義家が郎等。伴介兼が子孫なれば。關東をほしく思ふべしとて。上州をたまひ。關東八州の管領職をゆるさる。其外。明智光秀。日向國。羽柴秀吉。筑前國。川尻鎮吉。肥前國。佐々成政。陸奥國を賜はんとて。日向守。筑前守。肥前守。陸奥守など。號す。心の廣き事かくの如し。角力の遊興のものなれば。僅焼栗三つを以て褒美とし。天下を治めんと思ふ時。不惜して。大國を與ふ。實物の差別。かくありたきものなりとぞ。

太閤秀吉公與方素性并明智次左衛門が事

一太閤秀吉公の御簾中の。杉原入道といふものゝ娘也。彼杉原の娘。幼年の時。おまんと
いひて。尾州にて。信長の家中奉公を勤め居る。杉原も信長の足輕也。爰に又信長の馬
廻。伊藤右近といふもの有り。おまん出生の時より。此右近方にて世話いたし遣しけ
る故。始終右近が世話にて。彼方こなたを勤め居けるが。信長の十人衆目付役の内。岩卷
一若といふものゝ方。勤め居けるが。其頃。木下藤吉の。いまだ足輕にてうごき長屋と
いふ所。居れり。妻よりこぎ垣有りて。内は長屋有り。一間は仕切て。足輕住
居る所あり。勤の際々うごきをつみて賣りけるとぞ。妻を離別して。後妻なけれ
ば難澁。及びける故。何とぞ。岩卷が方。居るおまんとを。妻女。求め度くいひ入れける
。おまんの早速。返事もせむして。先伊藤右近が方へ行き。相談。及びける。右近申す
。彼藤吉といふ。名高き發明なる者なれば。随分相談して。末々の爲も宜しかるべ
し。支度の我方にていたし遣すべき間。夜着ふとん。鏡。箆。筥までも遣すべし。されども。
知らるゝ通りの困窮なれば。錢金の世話の出来まじ。其方の伯父。淺野彌兵衛へ参りて。
借り申すべし。渠の勝手能く暮すなれば。恥敷とも無心を申すべし。とて淺野方へ遣し。
彌兵衛の舞士也。彼淺野彌正
大將長政と云ふに此人あり。金子一兩と。木綿一反。こな紙三折を貰ひて来れり。右近大に歡び

夜着蒲團などせんたくいたし。其外。當分入用の道具ども取り揃へ。きくと申す下女も
同道させ。日柄を撰び。藤吉が方へ遣し。婚姻いたさせけり。然るも。藤吉段々立身出世
有りて。終に太閤秀吉公と仰がれまじくける。折しも彼右近が事を思ひ出だされ。天
下へ觸を廻して尋ねられける。右近の。所々隠れ忍び。名をかくし在りしが。困窮堪
へがたく。うゑ及ぶより。甲州の加藤駿河守方へ。客分。来り居るよし聞召れ。右
近。其時は。清右
衛門と改む。夫婦共。大坂の城へ呼ばせ給ひ。御懇の御意を蒙り。昔の事共言ひ出だし給
ひ。落涙を催され。縞子の夜着ふとん。白銀五十枚。鶴の香合と云ふ名器を簾中の。手
づから清右衛門夫婦。下し給ふ。其時夫婦が側より。てふくめ。木綿わた入
の事なり。この外も
よごれたり。昔の禮。我等洗濯して参らすべし。脱きてゆかれよとて。別。着類をたま
ふ。清右衛門夫婦。古綿入脱ぎ置きて。下されたる着類を着て退出しける。十日ほど有り
て。先日のおせんたく出来あがりしとして。御城へ召され。御簾中直。下し給ひぬ。其後。清
右衛門。七百石たまひ。七手頭中村式部少輔組。し給ひ。大祿をもたまふと有りし
かども。清右衛門望申さむして。大坂落去の後。清右衛門本多美濃守忠政へ。二百五十石
にて有附き。今。相續して。太閤より拜領の品を什物となすとぞ。

某の人のいづく。此断を近頃ある人より聞きたるが。誠におまんの御方。以前を忘れ給はざる處。感じても猶餘り有り。昔に輕々しきものも。段々立身出世して。なりあがる時。必。昔の顔をばせぬこそ人情なれ。それより引き替へ。太閤御夫婦。思召の程のさ。ら也。誠におまんの御方。四海を治め給ふ位。の至り給ふまじ。むかし明智日向守光秀。丹州福智山に在りて。父の三十三回忌を弔ひける。四十萬石の大名なれば。家老年寄奉行頭人等も。規式の装束して。さも嚴重なる體也。焼香の。一番日向守。二番左馬介。三番次左衛門也。時次左衛門はるかこなたの屏風の陰にて。脇差を取り。おづ／＼這出て焼香す。事終り。皆人怪しむ。光秀感じ云。世はあらんもの。次左衛門がごとき心を忘るべからず。彼の我父の代より。明智近在の百姓なりしを。召し抱へて。足輕として。我代に成りてこそ。段々取立て今家老の其一人よつらなり。明智の苗字を與ふ。昔をわすれざる所の禮讓感ざる堪へたりとて。日向守ことの外感に申されし由。是等こそよき世の教なれば。深く思ひ遠くはかりて。慎しむべきありとぞ。

佐川田喜六名歌并評論の事

一思ふ念力岩をも通すといふ鼓むべなる哉。何よても。一心不乱の心ざして。とゞかぬといふ事なし。いよしへ永井信濃守尚政の家老佐川田喜六。元越後中納言景勝の家臣木戸玄齋はらのが兒性也。信州の父右近大夫尚勝召し抱へて。家老とす。文武兩道の達者なり。和歌を好みて。名歌をば讀み出でんと心懸ける。或時主人信濃守佐川田を呼びて申されける。今日登城いたしたる所。近代の名歌の由にて。禁裏より下し置かれし扇なりとて。今日御所様より賜りぬ。汝の風流は志厚きは依りて見せんとして。佐川田は扇をわたし給へば。ひらき見る。いよし野山花まつ頃朝ふく心よりくは峯のまら雲。喜六涙を流して申しける。恐ながら此歌の愚詠にて御座候を。上方へさしのはせん秀逸の由にて。御賞美にあづかり候を。勿體なくもか様御手ふれさせ給へる難有さよと申しければ。尚政も大に驚き且感じて。即登營して。委細の趣言上有りしかば。將軍も御感不斜じて。佐川田を召されて。あつく物たまひて。大切よすべき由。信濃守へ上意有りしとぞ。

其の侯仰。此漸普く世に傳ふる所にして。其道の妙感に至ると云ふべし。能々我身
にたくらべて。思ひ入れなば。何れの事よても。妙所に至らぬといふ事有りべき。佐
川田の歌を骨髓に入れて。あられ秀逸をよみ出ださんと思ふ事。眞實にして。其心入
れ並々ならぬ故。終に朝あくの名歌をよみ出だして。天子を感動せしめ。將軍の
恩賞を蒙り。主人の外聞。おのれが名譽。いん方なし。和歌の道よてさへ。此のどと
し。いんや。今日聖人賢人の道を思ひ入りて行いんよ。是非極上の位に至らぬとい
ふ事や有るべき。むかし唐土に念佛の行者ありて。明暮念佛を申す事。いさゝか怠慢
なし。時よかねて鸚鵡の鳥を愛して。籠をかたけら置き。明暮念佛して有りしよ。
彼あふむ死しける故。かねて寵愛の鳥なれば。土中を葬りて。寸草を盡しける。其墳
より青蓮花一もと生ひ出でたるかや。心なき鳥類也といへども。其妙なる事得も
いられぬ。まして人間の習ひたふとき五體をぞなへるながら。それなり死ぬると
いふ。残念の事也。人の人たる道を知りて。よく道を行ひ得たるなら。佐川田が
朝あくの歌の如く。規模を得ん事うたがひあるべからむ。たとひ素性いやむきを
どして。わざよかまひがたしなむと云ひて。おのれざりにゆるして置くまじ。太閤秀

吉公元より卑賤なり。美濃齋藤道三。西の京の庄九郎と云ふ油賣なり。まかれども。
天下を取り國家を取りて。歴々の家筋の人々の器量よも勝れたりとす。只。其所は
至りて。素性賤しきかたち見よくさなと云ふ了簡。更よあるまじ。人を見下す事。
元よりあるまじ。人を助け。己をかへりみて。心一萬と徹するやうは分別あるべ
しと也。此漸の趣ども。ありがたき事なれば。心易きものへも漸聞せても苦しからむ
やと申したりしよ。其の侯仰うちつともくるしかるまじ。我不器量不才のものとより
しれし事なれば。何しよ是をかくすべきや。心易きものどもへも。又々他家の人々へ
も遠慮なくはなすべし。唐土よて。時の政の得失。役人の善惡邪正までも書は作り
歌よつくりなどする事。聞き及びたり。元よりかくす事あるや。おのれが心は僻事有
る故の事なるべし。天の道に隨ひ。人の道を行ひて。直く正しくしてあるなら。まじ
いかあしざま言ひ残し。書きも残すべき。我今邪曲なれば。家中一統は邪曲なり。正道
なれば。皆正道なり。まかれば。只上一人の心よて。下萬人までも推し及ぼして届くべ
き事。人の君たるもの心よあるべし。我等事年若といひ。諸事足らぬ其なれば。其方
まじ。老人の事別して。幼年より勤め居るなれば。以来他事なく叱り吳申すべしと

命ありしかば。其もの聞きて。落涙をのどひもあへどぞ

十

加藤清正心入并庄林家米出米助が事

一いよしへ戦國の折しも諸士をいつくしみ愛せぬ人の稀也。其中にも。福島左衛門大夫正則。加藤故肥後守清正など。殊の外家士をのぐまれき。蒲生氏郷。宇喜田秀家など。つらくあたられし故。家中は騷動起りなどし。其家を亂せり。秀吉公。羽柴筑前守時代。家中の侍暇を願へば。暇乞を致さん。明朝館へ出でられ候へとして呼ばれ。自身茶をたて。饗應し。其上は。腰物を引き出せられ。何方へ行かれ候ても。思ひしくなく。またり歸り来り候へ。いつても抱へ可進とて。懇に被申て彼者暇を賜りける。ど。扱。世上へ有り付きかねし者として。一度立ち歸れば。本知を與へ。元の如く召仕られし也。是を學びて。藤堂和泉守高虎其通致されける。又加藤肥後守も。高虎の如く致されける。又清正肥後の國は在城の時。夜陰の事にてありし。雪隠へ行かれ。小姓共二三人附き添ひ行きて。手水所へ待ち居る。清正は。いつも廁へ入る。不淨をよくみ。足の高さ一尺計の足駄をはきてはひられける。今宵は頻に足駄にてどん／＼と踏みならし

給ふ故。小姓の者共。驚き戸外より窺ひ見る。清正の曰。さればの事。今急と思ひ出だしたる事あり。庄林事人分を呼ぶべしといわれける故。庄林へ使をたてらる。も。や夜半過の事にてあり。庄林も此程。風邪にて平卧してありければ。とるものも取りあへず。亂髪にて登城しけるを。清正は。元米痔疾を煩ひて。長雪隠にてありしかば。いまだ雪隠より出でも。り給ひぬ所へ。事人分參上仕れりと申す。清正雪隠の内より申されける。汝を呼び寄する事。別儀はあらむ。其方が家米年のころ。二十計の若者。いつも蓆の袖なしの單羽織を着たるあり。彼が名の何と申すやと尋ねられしかば。庄林答へて。出米助と申して。尾州の産にて候。生付沓芥の者にて。心もさかしく候故。草履取に申し付け候が。中々働あるものにて候と申す。其時。清正さればとよ其事也。い。つぞや川尻肥後の内。熊本より三里程。清正領分也。芝居能あり。見物に行きし時。其方も供に召し連れしが。彼草履取の出米助が。小便をするをみる。肌はまんぢうくさりの事なり。かたびらを着し。脚伴をくべき處を。脇當をしたり。今天下漸く治まりて。皆人平服となり。兵具の用意など。そこくなる事にてある中。かれが心懸下郎。珍敷者也と思ひしまゝ。て。要用はかまけ。打ち忘れぬたる所。只今ふと此間所にておもひ出だし。かれが事を思ひやれ

は。中々尺寸の間も捨て置くべき事よあらむ。かれらよ夜美してこそ。武の本意なれと存じ詰めしより。熟思ふよ。人の死生。世の治亂。身の盛衰。天地の變はかりがたし。斯おもひ居るうち。我死ぬるか。汝死ぬるか。彼死ぬるかならむ。一人かけても。その志無しならん事。残念千萬也と思ふより。深更ながら。時と人をまたぬ理。延引すべきよあらざる故。呼び寄せたる事也。早々歸りて。出来助を申し聞かせ。早速よとりたて遣すべし。まかし。傍輩のそねみもあるなれば。高知の無用たるべし。其方家内の者も。嚙氣遣すべき間。早々歸るべし。乍去風邪と見ゆる間。酒を吞むべしとて。麥のひしほを着として。酒をのませらる。庄林涙よむせかへり。とかうの返答もそこよ。ありがたさはも銘じ。殿よも先御休み候へと申しければ。清正の帳臺へ入り給ひぬ。其跡よて。庄林近習の小性等よ。御前よ。長雪隠を遊ばされたるまよ。御風を召さぬやうよ。皆々心を付けて給り候へと云ひ捨て。宅よ歸り。出来助を呼び出だし。段々清正の懇志の事ども申し聞かせしうへ。六十石よ取り立て。近習よ申し付けしかば。出来助もありがたき事。骨髓よ徹し。是より彌忠勤を勵み。度々比類なき高名を顯ししけるとぞ。其の人曰く。此斷は。江村老人と云ふ醫師。永録年中の生れよて。加藤清正森美作守等

よ仕へ。京都よゐて。百歳の壽を保ち。寛文の頃死去せり。かれが物語のよし。先年聞き置けり。誠よ人の君たるもの。人を見。人を仕ふ事。清正が如くしたきもの也。彼出来助。加藤清正の直參よもあらむ。庄林が下人よて。至りて軽きもの也。それが所作さへ。心を附けて見る事。尤名君の實慮嚴然言語よ絶えたり。人の君として。たとひ下々末葉の奴隷たりとも。凡よ見るべきよあらむ。此段清正の事。いふよ及ばむ。庄林が退出の時。近習のものへ。挨拶其深切。言語の外よして。中々言葉よいそれむ。君臣の間をたしく心易き事。是よて思ひ量るべし。

荒木又右衛門幼少の時の事并 血氣勇者の事

一寛文年中。和州郡山城主本多大内記政勝君の家士。劍術の師範よ荒木又右衛門といふ者あり。生得の英雄よて其術よ達せり。幼少の時より藝よ志厚く専ら切瑳琢磨せり。又右衛門十三四歳の時。同傍輩の子。同年頃なると連れ立ち。只兩人鳥籠を持ちて。山へはごをかけよ行く。其日鳥少して。山深く入るよ。日も黄昏よ及びしまよ。兩人とも山を出でんとするよ。其邊は物騒の所なれば。道をかへてゆかんと又右衛門申しけるを。つれ

なる子の。大剛氣者にて。左様なる所こそとほりて面白ければ。いざさせ給へとて。先よ立ちければ。岩之助又右衛門も跡は随ひ行く。是より郡山城下へ。道三里計ありて。一向は人家なし。既一夜なれば。往來も絶え。月影ほのぐらき谷間。樹木茂りたる岩窟の中。人のいびきする聲高らかに聞えたり。連なる子面白き事か。かねて此邊は。山賊ありて。さまざまをなすよし聞き及ぶ。いざや。彼者よ小便をかけたてやらんとて。右の岩穴の上よりまへ引きまくり。用捨もなく小便をまかけたり。盗賊起き上りて見れば。童子二人岩の上あり。盗賊曰。汝らといかなる嗚呼の者なれば。かくの大膽なるぞ。我年頃此所まで。人の物をはぎ取るなれども。おのれが様なる魂のすわりたるものを見む。是より先の道も速し。里まで送りてとらせんとて。兩童の跡は付き行きし。彼小便しかけたる童子。山姥の曲舞を誦ひてゆきける。二口三口にて。吃と文句は語り聲ふるひ。跡より来る山賊。大笑ひて。さてこそばけの皮が願はれたり。おのれらが大膽の。眞實の大膽は非む。附氣質といふもの也。我跡より付け来りし。汝が氣象を見んと。よあらむ。今一人連なる童子が。心のをさまりたるを伺はんとして付け来たれり。天晴なる氣の落ち付きかなとほめしとかや。かの山賊は。後聞けば。由井正雪が反逆は組み

したる。加藤市郎右衛門とかや云ふものよしなり

其の人曰く。此もの語。本多侯の斷也と。又右衛門が器量幼少の時よりかくのごとし。凡物は動するもの勿論取るよたらむ。又生質は請け得ざる所の強氣を出だし。妖怪は近寄り。人を見出だしなどする事。元よりいましむる處にして。又右衛門が山賊は逢ひし時の事。手本は成すべき事也。道をかへよといひたる所。臆したる様は聞ゆれども左よあらむ。速き應といひつべし。かれらの匹夫の惡徒なり。何ぞ彼は出で合ふ事を好むべきや。君子は。危は不近とみえたり。連なる童子。小便を致しける。一は。甚強氣は聞ゆれども。血氣の勇にて。一つも役は立たむ。此故は。後山姥の語の時。行き語り聲もふるへり。先んむる時を人を制じ。後るは時を人制せらる。と云ふ事。金言と云ひつべし。さればこそ。又右衛門後代まで。名をあげ。我妹智因州の渡邊數馬親の敵討つとき。助太刀して。伊賀の上野において。無雙の働をなし。天下のはまれとなる事。頻如鳥の卵の中より其聲諸鳥は勝るといふ事宜なるかな。能く思惟了簡して。又右衛門が幼年の時の事を。心よ思ひ入れて勉むべし。

堀家の士泣面 并武田家士大藏左衛門が事

一堀左衛門督秀政。始久太郎と號す。秀吉公の寵臣にて。越後にて五十五萬石を領す。秀吉公關八州を賜りんと。御内意ありしと云ふ。其内は。左衛門督二十八歳にて早世す。彼堀家の士。さして泣きづらの男あり。平日兩眼より涙を流し。眉をひそめて。其いまたしき事いそんかたなし。秀政の近習等秀政に申して曰。彼男の顔色。不吉千萬にて。見るもうるさし。早く御暇を給られかし。世上とても笑ひ候と申しければ。秀政其事也。まかし法事か。平ひ使者に遣すより無類の者也。大名の家より。色々の者を扶持するものとありしかば。近習の者口をつぐみたりとぞ。又。福島左衛門大夫正則老臣等皆支離也。一老福島丹波の免口也。小關石見のちんぼ。吉村又右衛門のどもり。大崎玄蕃のがんちなれ共。いづれも武道比類なき者どもにて。世上は名高し。正則かれらを奔走する事不料。其外にもかたりにて。武邊の者多し。天文晩年の比。甲州の武田信玄。家来は何某の大藏左衛門といふ者ありけり。生得臆病至極の者にて。いつも合戦ごとより。癩をおこし。眼をまらして。つひは劔戟の中へ交り。血具き事逢ひたる事なし。信玄家臣等の申せり。當時戰國の中にて。一人たりとも武功の者を望む中。彼大藏左衛門が臆病の

至。武家扶持すべきものあらざ。早々暇を給るべしと有りし。信玄宣ふ。彼者いたし方ありとて。信州戸石の合戦の時。勝れたる返物の馬は。大藏左衛門を鞍籠よくかり付け。血氣の若者大勢よりて。馬の尻をたゞり立て。入敵の中へ追ひ込みしが。馬の心乗人の心をするものなれば。大藏左衛門が元來臆病心は引かれて。中戻して。味方の陣へ引返す。か人の通りよし給へども。直らぬ故。信玄思案のうへ。彼者家中の隠目付を申し付けて。都て惡事内密の事共。速應なく直し申し上へべし。若隱し置き露顯し及ばし。死罪に申し付くべき由命せられけり。大藏左衛門元來臆病者なれば。罪はあやふ事恐れて。明白は何事も聞か出ださず。信玄の耳に入れじかば。大は用立ちける也なり。我の身法を尋ねて。上へ登り。彼方の平士其意を尋ね。其意の事其の太曰く。此段老父の斷りて聞え置けり。越前人を遣ふもの堀秀政。福島正則。武田が信玄などの如く有りたるものなり。塵あふた迄も捨つべし。あらず。捨つるは易く。拾ふは難し。用は立つものを用ひ。用はたぐさるもの捨つる人情なれども。今此物一與語の如く有りたる者なり。而も三十一の段に下田守次郎の事あり。其の事

一 奥州岩瀬郡の内。明和元年の頃。歳百三十一の老人。耳目行歩若者の如しとして。白河の城下へ連れ来て。綿銀子等を賜はりし事あり。此翁元は最上殿の浪人にて。羽州の生れなりしが。彼の家退轉して。岩瀬郡へ引き移れり。最上殿代々大身にて。數百年相續きて。羽州六ふるま十八萬石を領す。早世して元和年中家断絶す。事共きまじく尋ね給ひける。彼老人の曰。大坂御陣の時。我等初陣にて。主人より佐竹殿へ見舞の使者を蒙り。始めて上方へ登り。佐竹の家士真壁掃部公の。かねて心易ゆゑ。彼手へ加はり戦場の様子をも見物せ度由望みし所。私より取計ひがたく。御主人へ申し上げねばなりがたしとして。其趣中將殿へ其旨と申す所。若者より赤持也。働かせよと仰せければ。大い歡び。十二月の十九日鴨野の冬陣に出で。首一ツ取りて。其後御和睦の計り。歸國して。主人最上殿へ其由を申し。かね。能くはたしとして。賜差一腰給はりぬ。其時はいまだ老人が親も存生して。五十歳計なりし。彼軍の様子を物語して聞せ申す。親が申す。我々の父八十餘歳にて果てられし。其人申されける。官軍の戦の時分。銘々軍は立つもの。口くせよ。かゝるせつなき海世は生れいで。何を樂しむ。活きたるべき。少じも早く死してたすぬらんと思ふもの計也。此故に軍も手綱てづなし。働

も今の人の及びも付かぬ。我等幼年の頃まで。少も其氣差残り居し。段々袋の口をしむるごとく。世の中靜謐となり。軍數も一ツ減り。二ツ減りして銘々命をかばひて。後を樂むやうになれり。近頃軍はたつ人ごとく申す。家を出づる時。妻子を忘るゝといへり。此詞我等年若の時知りたるものなし。いかよとなれば。不斷妻子を忘れ居る故。別は妻子を忘るゝ事。改めて有るべからむ。然るは此ほどの軍の首を取りて。主君の恩賞は預らん。高名としてほまれを顯わさんなど。思ふのみとして。或は恩祿加増を得ん事を樂しむ。子孫を繁昌させん事を志す。働かぬ故。雙方死を遂ぐる者稀也。去る慶長五年。關原合戦は立ちしもの。斷を聞かぬ。あられうかりける此度の軍かな。何よ。是は武士の生れ来りしぞや。町人百姓にて有るならぬ。かゝるゆゑ。あまじき事。世を恨み身をかこちて。此戦治りなむ。いかなる山家隱谷も引き籠りて。世を安々と暮さんと思ふ者。多かりしと聞く。斯は大将の采配の勤く段。魂しつかりとすあり。死を一圖に決せりと也。我等年若の時谷戦はさよ。あらず。とよかきおきて。傑百人行けは九十人までの。大方死す。其中はて手柄をふるひ。高名して生きて戻る。傑出たる大剛の者也。又は臆病者也。たどひ生きて戻りても。飢えて食ふべきものもな

く。妻子も兵火の爲に焼け死ぬか。又、海川に身を投げるか。自害するか。行くへしれを
 かなどよて。家居の打ちこぼたれ。又、焼失して。跡形もなく。親類友達も討たるもの
 多ければ。生きて戻りての樂み少む。たとひ恩賞をおこなひる人も。其由所のみよ
 して。作くるべき民家もなし。金銀腰の物など賣ひても。武具雜指物等の入用。下々の者
 へもあかちあたふれば。少も我身は付けて樂しむ事なし。故に早く死して。たすかるを
 是と心得。いよいよの大將名士。佛法を専み。經を書せられし。此故と思ふ也と申し
 其由。彼老翁の父の斷也とて。老人物語申しとまり。其の事なき。其の事なき。其
 其の本曰く。此事誠は肝心の事なり。今太平の代に生れあひて。亂をもちざるま。其
 心得大に違ふ。たとひ今孤獨貧窮にして。せつなきものたりとも。亂世の人の安樂よ
 りた。はるがよまざるべし。人のとかく其時々調子も乗りて。榮耀は超過して。古を
 志るものなれば。かの老翁が斷を思ひ。昔々如斯なる事なりし。今我々身の安樂
 勿體なきこと云ふ事を顧み。かやうよしてこそ。天下を靜謐に治め給ひて。安樂よ
 りた。さし給ふこと。有りがたけれと思ひ定めて。覺悟し居るならむ。身の慎みの種と
 なるなり。春を押し。道を知らす。一端ともならんか。

本多流髪并家風の事

一世止。本多風と云ふ髪の結ひかたあり。是の昔。本多中務大輔忠勝侯家内の風儀を定
 め給ふとぞ。諸士より下々足輕并中間迄も。髪を前七分。後へ三分と厚さを定めて。紙を
 こよりを捻り。七つづつ巻きて鬘を結ふなり。是を本多風といたすとぞ。いま異様の髪
 をして。本多風と云ふ。大よあやまれり。今も忠勝侯の子孫は。是を慕ひ學ぶ中にも。
 本多彈正少弼殿家ほか。めんはつは是を守り。棒刃巻下緒とて。三尺計の長刀。少しも大
 りは刃をくり。形の上下へ下緒をきり。と巻き留めて。是を帯し給ふ。着類は本多
 柿白裏也。本多柿。並洗柿郡山綿とも云ふ。中頃本多大内記郡山。勿論裏表とも本綿として。其仕立様は。仕居の時。多く世上一瀬の出だす。郡山綿ともいふ。飾出し行短は。いひて。丈を短くして。足の蹠の出づる様よし。ゆはも短く。立ち振舞仕能
 きゆりよとの仕立也。腰物持た。塗綴。茶糸。無地。鍔。赤銅。目貫縁。同じく石目頭。角の
 一文字巻懸鞆。袖はだたき。甲斐の口黒下げ緒也。平日質素第一として。武役軍用を
 重んじ。美食を好まじ。學問を勤むといへ共。詩文章を禁む。朝々とくよりかき。弓馬槍
 太刀。身をこらし。體をきたへ。寒暑は肌をきらし。を以て業とし給ふなり。假初は。柔

弱なる事を嫌ひ。潔白を表とせ。御子息がた御元服まで。草柄大小。鞘の銅の鯛かねを
入れて。そこねぬやうにして。さへせ給ふ。或時近習の者。鼠色の足袋をはきて。彈正殿
前へ出でたり。彈正殿御覽ありて。其足袋を御所望ありし。彼者憚り多しとて。辭退
す。苦しからずとて。無理を乞ひ給ひ。叔。其後屋鋪にて召し給ふ所の足袋。鼠色はな
りしとぞ。是何が故なれば。御儉約の思召より出でたり。是まではさ給ふ白足袋。よご
れぬ見えて。五日ともめし給ふ事能はず。此所を考辨し給ひて。近習の者の足袋を所望
ありて。鼠色足袋はなりしかば。是より近習の者。いふに及ばず。家中一統鼠色はなり
しかば。總體よて大ひなる儉約となれりとぞ。儉約の申付なくして。自然と一遍。儉約
をなす事。尋常ならずとぞ。

某の人曰く。全體物事みなそれく。一矩を定めざれば叶ひがたし。めい／＼身の著
も。本多家の風儀の如くと。格を立て。嚴重よして有らば。様々の障礙もなく。波風た
らずして。穩なり。色々時の風儀は移り。或は形風俗物數奇など。時の流行は隨ひなす
もの。正しさもの。一人もなし。然れば。人の大概其かたち物數奇となりとよて。心根
も見ゆるものなれば。無盛が忍ぶれど色は出でよけりの歌よきたとへなり。志のば

なりすれ共。其心の善惡。是非色はあらわれ。形は顯るものなれば。其心得肝要

なりすれ共。其心の善惡。是非色はあらわれ。形は顯るものなれば。其心得肝要

一里塚始末五左衛門井戸の事

一御三代目將軍家の御時。諸國草して死する者數をしらす。列して往來の旅人道をま
りあへずして死せり。是は依りて土井大炊頭利勝候。上意を經給ひ。往還筋道の左右へ
松を植ゑしめ給ふ。大は旅行の助となれり。然れ共先行も。皆松原のみよて。旅人の
退屈せん事を思ひはかり。かさねて大炊頭殿御了簡よて。一里塚と云ふものを築き。一
里づつは持入置くならん。さかるべからん。されども。松の道の道端の並松はまがひも
すべき間。如何すべきと。上意を伺ひける。大炊頭申す所尤至極理はあたれり。一里塚
よ。餘の木を植ゑさせよと。仰せ有りしを。大炊頭殿老年よて。耳遠くおとしければ。
餘の木を根木と聞き誤りて。根木を植ゑしめらる。今一里塚は根木を植うる。此故
なりとぞ。

某の人曰く。是誠は不易長久の遠慮也。今よかいて往來の旅人歡ぶ事限なす。其並松

一享保年中。觀世太夫一世一代の勸進能を行ひ。京都の河原に舞臺を造り。棧敷を拵へ。芝居を興行す。見るもの蟻の如く群集せり。初日か二日ゆか。觀世木賊刈を舞ふ。其面白き事見るもの感^い堪へたり。爰^いいかよも田舎めきたる百姓と覺しきもの。十人計連れ立ちて。能を見物して有りけるが。數千人の人数。悉く讚歎する中。彼の百姓共は。さも思えぬやらん。何かひそく^{こゝろ} 鞞合^{こゝろあはせ}てうけを顔なりけるを。觀世舞ながら此體をさつとみとがめ。叔能も終りければ。木戸へ人を遣はし。かくくしたる衣類着たる百姓十人計。木戸を通らん時。必。留め置き申すべし。尋ぬる子細有りといひやりければ。程なく能濟みて。木戸を出てんとする時。かの百姓どもを差し留めけるゆゑ。何事かこと大に驚かしを。觀世さどがぬやうに樂屋へ呼びて申しける。今日我等木賊刈を舞ふ。其出来たる事。凡。あるまじく思ふ心にて仕たりしかば。果して貴賤群集。れしをへて。感心の様子はみえたるが中。其方共は。さも思えぬ様子にて。何やらん打ちひそみて。鞞合^{こゝろあはせ}たるといかよ。其ささふしきと思ふより。子細を尋ね度。木戸にて留めさせしなりと申しければ。百姓共申す。我等事の。信州のその原と申す所の土民候。今日木賊刈の能興行有るよし承り及び。我等も木賊かゝる者共なれむ。なぐさみなが

ら能とやらんを見物して。一生の癖の種もせまほしく思ひて。今朝より芝居して見物する所。心なき賤の我々ども感心して。面白く侍る。去りながら。只今遊ばされたる内。いでいといとくさからふよと申す所。鯨の御手我等が仕なれたると。聊替りある故。申す事にて候といへば。觀世の曰。それなり。いと面白き見答やう也。いかよして我等とかるのと尋ねければ。されば。とくさむかふへ一刀切りよかり申上候。今遊ばされたるを拜見いたし候へば。同じ所を前の方へ二刀にて。御かりなされ候を見申して候。あれよとくさやかられ申すまじく候と云ひければ。觀世大に感心して。物とらせつゝ厚く賞して戻しぬ。その後。觀世江戸にて。とくさ刈をせし時。先年信州の百姓らが批判せしをまもり。向の方へとくさを刈りければ。其能の出来たる事。大かたならむ。みな。目を驚すに至れりとぞ

某の人曰く。智者よも一失有り。愚者よも必一得あり。其道に入れば。其道を知る。信州その原のとくさの名所にて。かの百姓ら數年其とくさを刈りて。手練し居る事なれを。觀世は鯨の手の違ひたりと申しける事。尤殊勝也。觀世も舞臺の上にて。自餘のへまよと目もかけまじき所。あやしの百姓らが。鞞合^{こゝろあはせ}あふを。さつと見答めしこそ。流

右名人なれ。そののみならず。樂屋まで呼び入れて底意なく。尋問せし事。其己が業の道を求むる端にして。いんかたなし。世の人藝術に凝り執心し。其藝の興義を得。或の妙所に至る。皆道執心たるが故也。され共。藝術に執心する人の多けれ共。人の入たる道は執心する人の稀れ也。觀世が百姓よくさの鎌の手を聞きたるが如く。賤の男賤の女たりとも。其道をさかん時より。妙所に至る事有るべし。れろそかと思ふ。みからせとあり。山の上より下りて。其の妙所に至る事有るべし。れろそかと思ふ。女く。其の妙所に至る事有るべし。れろそかと思ふ。一豊臣秀吉公紀州高野山へ詣りて給ひし時。御勝手へ御好有りて。判の病を召し止られ度由命せられたりしとあり。時料理人ども数人打ち寄りて。早速製して奉りければ。秀吉大に御機嫌よく高野より。白のなま所なるよ。早速は出で来たる事神妙也とて。御氣色よるしかりし。其後御歸路の節。途中にて誰が申し上げしよ。高野にて召し止られ判の病。白にて製したるよとなく候。御料理人御膳方御膳掛の者共。大勢にて組板の上よりさかみ指し上げし也と申しければ。秀吉公大に怒り給ひ。不届至極の者ども哉。

其の料理人共。白を持たせ来りしものぞと心得て。用意の程を賞美したるよ。意外也。其が今の勢ならむ。一程づつけづらせても自由也。まがし左様なる春のせぬものなりとて。御叱りを蒙りしとぞ。其の人曰く。此物語は人のよき戒也。人の君たる人。必。物の自由なりと知りて。其出茶まじきをしらむ。其心よりの自然と春も長する物なり。昔利久が子の道安。雪降の日。茶會を催して。父の利久を申し入る。利久は道安が方へ行き。路次入りの時。前裁の方をみれば。蓑を着。竹笠をかぶり。傘をかたげ。畑に生ふる菜をほりて。家に入るをみれば。道安也。扱亭に入りて。茶も濟み料理出づ。利休もいつくより機嫌よく吸物碗の蓋を取りてみれば。鱈と若菜なり。利久氣色替りて申しける。先刻路次入りの時。みて見居たる處。園へ出て。雪中の菜を斫りてものし。蓑笠引きかぶりたるさま。さすが風流は有りて。深切さいとん方なく。そら面白く興有りて。とかふいはれざりし。鱈の吸物と何事ぞや。總て茶の懸志を盡すを以て第一とす。花を以て風流とす。たのれ我子よてかゝる辨もなき事の有るべしや。木將至極の者也とて。散々叱りければ。道安も大に迷惑し。さかみ指し上げしは詭言して。漸く父の機嫌を直しけり。

是よりして。道安茶道の心入。總て物數奇よくなりて。骨髄に入りしほど。古人の物語
なり。是等よき戒也。豊臣家のあり。道安が靈の吸物。みな春を停止し。儉約を守る
手本とならん。

吉村又右衛門 所可兒才藏が事。一萬石を賜り。元より武功勇
一吉村又右衛門也。元福島左衛門大夫正則侯は奉公して。一萬石を賜り。元より武功勇
猛。世よ普く知る處也。元和の晩年。正則御不審を蒙り。御勘氣を得たる時。在所藝州廣
島まで。家中の者共籠城の用意あり。其者共。福島丹波。小關石見。大崎玄蕃。松田下
總。林長兵衛。吉村又右衛門。村上彦右衛門等也。城内へ打ち寄り評定す。丹波が曰。主人
正則の墨附到来して。城を渡すべき由。命せらる。ならは餘義なし。既よ其沙汰もなき
ま。いざ城を枕せん。威高いだけ成りて申しけるを。皆尤也。同じ武具を携へ。頻よ
籠城の支度也。此時大崎玄蕃の柱もたれか。りて。居眠りある。吉村又右衛門の指先
まで疊へ手習して在りけるを。丹波が曰。大崎吉村御兩所。思召いかよ。臆し給ふか
と怒りければ。玄蕃申す。いらぬ事。候。其様なる事。は。不申候。少の間御待ち

候へ。頻て殿よりの下知状参るべし。丹波殿は年寄りて。短氣せき成り給ふやと云ひて取
りあそむ。又右衛門の。林長兵衛此時入道して。向ひて。和尙いらぬ僧の腕立おかれよとい
ふ。其内正則自筆狀到来して。相違なく城を開きて渡すべし。違背あらば。我等爲成
るまじきとの文言也。城受取の面々。松平宮内少輔忠雄侯。松平阿波守忠鎮侯。堀尾山
城守忠晴侯。京極修理亮高知侯。松平主佐守忠義侯。本多美濃守忠政侯。松平越中守定
綱侯。同美濃守定房侯等也。城の四面を打ち圍みて。備を張り。もしえの事あらば。其
用意專なりしを。相違なく渡すべし。日限極りし。諸侯方城中より入りて
それぐの場所を請け取らる。此時。吉村又右衛門の。城門の番頭より有りしが。松平越
中守定綱侯。此城門を受取り給ふ。又右衛門が英名懸て知り給ふがうへ。かれが所體
さも大功の者と見なれむ。被召抱度旨。御道は御意あり。又右衛門の仰難有奉存候へ
共。拙者儀は寸志の望も御座候へむ。御奉公は仕りがたく。御免を蒙るべしと申す。ま
り。定綱侯彌まはしく思召され。いかなる望であるか。いかさまも此方の身は叶
ひし事ならば。聞きてとらせんと有なれば。又右衛門の曰。我等主人は五十萬石以上
ならで。なり不申と申す。越州侯曰。それいを事也。然らば高知を望み申す。其

小身たり共。隨分大祿にて召し抱へ申すべし。是迄の知行一萬石と聞き及ぶ。五千石より
 下りいかゞと仰せられたれば。又右衛門かぶりを振りて。いやくそれよてり御相
 談出来がたく候。某が春族譜代の者共多く候へば。彼等を扶持し申さね成りがたく
 候。我身一つは少々の扶持合力を得候へば濟み候へ共。身は付くもの共の不便は候ま
 ら。大祿を好み候と申しければ。越州侯則一萬石にて。吉村を召し抱へ給ふ。吉村在所
 へ引きこさせ。夫より屋敷をもらひ。城内へ入れ。則家老職に命せらる。時は吉村が春
 族共追々あとより来るもの。其人數擧げてかぞへがたし。或いはげたる具足櫃を春は
 負ひ。ふるちうらほちぎれ鏝を入れて。おら繩にてからけ。鎗杖を突きて来る者もあれ
 ば。柄糸のされたるふる大小をさして。来るものもあり。異形の者共。毎日くく又右衛門
 共来りし日より入り来る事。中々二三萬石の家中にても及ぶまじり人數也。越州侯の
 家中所をけし。奇異の思をなす。是等は皆吉村が縁者。或は譜代の家来共にて。何れ由緒
 あるもの共故。廣島近在五七里の村々を差し置き。百姓などさせ。それといえん時の役
 に立てんとて。少々ぐく扶持をあて行ひ。置きたる者。吉村が跡を追ひ来ければ。吉村知
 行を割り付けして與へ。愛憐を加ひしとなり。其時より。其時より。其時より。其時より。

某の人曰く。又右衛門が所行古風にして。武備を崩さざる所。尤賞すべし。扱又知行を
 わけて與ふる事。是も昔の一風にして殊勝なり。民と共に樂しむと云ふ心持にして。
 甚面白し。同じ福島の臣。可兒才藏。大功武邊の者にして。關が原の時。見事なる
 高名をし。其外一代の戦功かぞふるよいとまあむ。笠を以て搦物とする故。笠の才
 藏と云ひ。生得徒者にて心軽々しく大祿を好まむ。福島家より七百石を得たり。爰は
 才藏が郎等。竹内文右衛門と云ふ者有り。いつても知行を半分とけよすべしと
 いふ約束にて。勤め居る。正則よりの俸祿。七百石の内。三百五十石文右衛門に分ちあ
 したふ。是も又右衛門が所行に似たり。扱才藏。生得愛宕山を信仰して。我の愛宕の化
 現也といひ。或は太郎坊の我なりなど云へり。人皆狂人かと思ふ。才藏常といふ。い
 必愛宕の縁日。死ぬべしと。果して六月廿四日。死せり。其前宵より經を讀誦し呪
 を唱へ。身を清め。精進潔齋して。身は甲冑を帯し。弓矢を手もち。牀几。腰をかけ
 て。六月廿四日の夕方死去せり。今藝州吉田邊。才藏が石塔あり。心ある旅人。馬よ
 り下り。水を手向け。花を捧げなどすと。是は福島家浪人の子孫。此物語をしたり

細川侯和歌并かしく坊の事

三十四

一慶長五年庚子九月。石田亂の時。細川幽齋入道藤孝侯に。居城丹州田邊に楯籠り給ふ。寄手大勢取巻きて。きびしくせむといへども。丈夫に持ちこたへて金石よおなじ。于時幽齋侯に。文武兩道の達人にして。和歌の志し深く。古今の傳授を得給ひて。感激し預り。主上よもひとかたならむ思召されければ。此度の軍に幽齋の命を預さん事をあわれみ。且古今傳授の斷絶せん事を惜み給ひて。三條殿を勅使として。田邊へ遣りさる。勅使應對の場所へ。城外より鐵炮を打ち込みし。三條殿と幽齋侯との間を玉通れり。幽齋侯とりあへず。

「おんをさしてうつ鐵炮の玉さる命よもかふべきや此道

鳥居強右衛門勝高に。與平九郎信昌侯の家士なり。參州長篠合戦の時。城中を忍び出で。信長公に援兵を乞ひ奉り。歸路の節。番兵に見付けられ。河原にて磔にかけられし時。勝高三十八歳辭世の歌。

「我君の命よかたる玉の緒は何のいとものゝふの道

賢永の頃。駿州島田の出生よ。かしく坊といふ者あり。狂歌を好み。俳諧をよくす。所々

雲水して一所不住也。多藝にして。人の好む所よししたがひ。琴。三味線。鼓。笛。太鼓何よてもなきを云ふ事なし。彼の坊主富士をみる癖ありて。毎年二度づゝ駿河へ行く。其道をがら一錢の時なし。食物を乞ひ。錢を貰ひてゆく。島田の者共申すに。此所出生の地なれば。少しの外聞をも思ひて。乞食をばやめ申せよと有りし。耳よもかけず。恥づる氣色もなし。其後府中寶臺院門の扉よもたれかゝりて。死せる乞食あり。皆人立ち寄りてみれば。傍に覺束なき短冊に。辭世と覺しくて。一首を書けり其歌。

「富士乃雪とけてのものと墨衣かしくの筆は終なり鬼

某の人曰く。細川侯に大名。強右衛門の侍。かしく坊に乞食なり。其位いたがへ共。其志の皆一つにして。實は豪傑と云ふべし。まさかの時となりて。轉動するに。衆人の常也。或は天地の急變。水火の災。人間の生死。あつて。日頃の覺悟いづちへか失せぬる事多し。然れば眞實に其心を勵みなば。なとか其期に至りて周章する事あらん。細川侯。強右衛門。かしく坊共。平生其心懸骨髄に入らずんば。其際臨みて。かゝる秀歌の出づまじ。時の變を思はんもの。かねて其事をはかるべし。

桑名屋徳藏が事并妖怪と答詰の事

一或者の物語。桑名屋徳藏と云ふ者。名ある船乗の名人にて。所々難海共を乗りし事あり。此徳藏申しける。月の晦日。出船する事。必。斟酌すべしといへり。或時。徳藏いづ方にてか有りけん。只一人海上を乗り行きし。俄に風かたり。逆波立ちて。黒雲覆ひかゝり。船を中有り巻きあぐるやうにて。肝魂も消え入るべきを。徳藏もさすがまたゝか者なれば。ちつとも動せずして。蹲踞つんくまける。向へ脊の高さ一丈計の大入道。两眼の鏡へ朱をさしたるが如き。妖物出て。徳藏むかひて。我姿のおそろしきやといひければ。世を渡るの外。あけておそろしき事なしと答へければ。彼大入道。忽ち消えうせ。波風も静りければ。徳藏のからき命を助かりけるとぞ。徳藏後。此事を人に断しければ。人皆奇異の思をなせり。或時。徳藏北海乗りける時。風烈く方角をもわかたず吹き付けし。船中食物まれて飢渴に及べり。漸く新米の藁四五束ありしを。潮にひたしかみしめて。口腹を潤し。命をつなぐ。同船のもの三四人ありしが。何れも聲をあげて泣き叫び。徳藏いふ。か様なる大風にて。船を覆し。或は破船などせんとする時。響きはなち。帆柱をさる事と申すなれば。いざや其通せんといふ。徳藏曰。我の其事いや也。

船主と生れしうへり。只其職分を大切にして。外の心の動く事更になし。又。帆柱の船中肝心の道具として。武士の腰の物の如し。凡。侍たる者。命が惜みとして。腰の物を打ち捨つといふや有る。命は天命なり。風の天變也。人力に及びがたし。また髻を拂ひ。出家に成りたりとも。などや佛神の歡び給らん。命惜みての仕方なし。坊主と決句笑はせ給らんか。我の戦場にて討死の覺悟なり。天の助あらば助かるべし。さなくば。此處にて死するとも本望也として。敢てたじろぐ氣色なし。其内は風静り。波をさまりて。難なかりしとぞ。

某の人曰く。桑名屋徳藏職き下郎たりといへども。其志のたくましく丈夫なる事。中々いひん方なし。妖怪のもの出現して。詞をかけし時。世渡の外。おそろしき事なし。といひし。誠は名言といふべし。即座の氣轉頓智の答。すぐれたる所あり。次は北海にて難風の時。徳藏が詞勇猛にして。本意を失はぬ。是を以て思ふ。皆人徳藏が如く。我職分の爲に命を捨つる事をもいととして。天道はまかする所。教はかなへり。おらんづく。武士たるもの徳藏が心いれよであらば。治亂共に役したらん事相違あらじ。假初のされ物語のやうなれども。身よりけて心よ思ふべき事なり。

薩摩野郎の事并北村季吟子を叱る事

一寛永年中御上洛の節。諸侯方御供ありし中。薩摩中納言殿も御供奉也。時薩摩殿旅館水あしくして用ひがたきより。彼家中の下部野郎と號する者。毎日くはるくの所へ水を汲み行く。ある時。例の野郎共桶に水汲み入れ。薩摩の旅館へ戻りがけ。最早館へ一町計までありし時。年頃計の若もの走り来り。息を切りて申す。只今跡の町まで望撃いたし。人を殺して立ち退くものなり。追手のかゝる身ながら。餘り咽の乾くなれば。其水一口たまたらんといひながら。卒爾に蓋を明けて。手して水を掬して呑みけり。野郎共おれと云ふ間もなく。過ぎ行きたり。叔野郎共其跡まで。十荷計の水を其儘こぼして。又とるくと一里餘の所へ汲み戻る。道行く人いかゞやと尋ぬれば。答へて曰。人の呑みさしを主人よの呑まされをといひて。速方の所を汲み戻りし。其律義いそんかたなし。實に信を守るといふべし。

其の人曰く。薩摩の野郎實義なることいふ計なし。其徳よいたれば。必其徳あり。先年伊藤仁齋。京都堀川に出世の節。門人夥敷隨從す。其中は兩三輩。人柄惡敷もの有りて。さまざまの謀計をめぐらし。遊所芝居などへ出で行く。最早其謀計の術も盡きて。我親の此程病氣を取りむすび。おもくしき様子をなれば。見舞に参り度候間。晚程御暇を賜り候へと申せば。仁齋翁打ち聞きて。母儀の病氣とあらば。早速に行かれ。様子伺ひ申さるべしと許しければ。彼もの偽り濟して。大に歡び。いつもの遊所へ行き。沈酔して歸る。最早夜も初更に近き。仁齋の手燭を携へ。袴を着し。威儀を正し。玄關へ出で。彼者の歸を待ち。いかゞや歸宅の遅きを因りて。殊の外業じ待るなり。母儀のいかゞの様子にて有るか。段々快方にて有るかと尋ぬれば。彼者甚赤面して。迷惑に及びきとぞ。總て仁齋翁が。平日の行狀其篤實なる事いふ計なし。故に其門下自然に恥ぢらひ。行跡を改めしとぞ。人として。實なく信なきもの。顔有りて。耳目なきに似たり。天和。貞享の頃。江州の北村季吟法印花の本の宗匠となりて。連歌の會を催す。聖靈會の發句に

「まさしくと在まが如し魂祭季吟といふ句を吐出して。百韻既半も至る頃。季吟が悴の潮春。其時いまだ十歳にて傍に在りしが。小便に立ちけり。季吟が曰。其方は何れよゆくかと。潮春小用に立つと答ふ。季吟曰。我悴連歌を身に入れて。居たれを

したりといふんより。道は於て規模あるべし。其儘をこよて小便をいたし候へと申しけるとぞ。是等雜談ながら。道は取りての心入れ他事をなさ事感むるは餘あり。林道春子幼少の時も。是は似たる事あり。千勝丸とか云ひて。家貧く。其上父病屈してあける折しも。ある方より鐘の銘を書き呉れよと頼み来る事あり。父は醫者にてありしかば。ケ様なる事を作る事。家業は似たれど。此程の病氣にて。むつかしく思ひ。等閑は打ち捨て置きけるを。度々催促申し来れるまゝ。千勝丸子心よもさのどくと思ひ。反故の裏へ件の鐘の銘を書きて。父は見せければ。是を見て大は驚き。且讚歎し。其文章華美にして。證意詳明也。えもいふ面白き事なりとて感誦す。道春七歳の時の事也とぞ。今は其反故のうらゝ書きたる鐘の銘。林家はありと聞き及びぬ。又は道春父の服用する藥を煎じながら。火箸にて灰へ何やらん書きて居るゆゑ。父は是を見て。何を書きたしよと申しければ。鐘の銘の餘り遅くなり。度々催促申し来。さのどくは存じ候故。認め見候と申しければ。父さらば。其うらゝ書きて見せよとて。反故を出だして。其うらゝ書せて見る所。絶倫の事なれば。大は感稱すといへり。

曾呂利并門部候伴大膳等が事

一臨機應變といふ事。治亂とも第一入用にて。此働を知らむんばあるべからむ。昔曾呂利太閤の出頭たりし時。太閤の近習の輩。曾呂利へ尋ねて申ま。御邊職は君の思召し叶ひ類なし。いかゞしてか。かくの如くは御意より入るぞや。我等ども。御側は勤めて居れど。やゝもすれば。御怒を蒙る事あり。此事貴方の傳授はあづからんといひければ。曾呂利曰。毎日食をくひ給ふかと答へて。毎日食ふと云ふ。飯の風味はどのやうなる物よかと問ふ。又答へて云。斯と定りたる味はなけれども。只うまさ物なりと。曾呂利また菓子やうまさ物よかと。答へて曰。うましくしてあまし。曾呂利然らば。飯は定りたる風味もなければ。明日より飯をやめて。うまさ甘き所の菓子計くひて居給ふべし。彼者聞きて。それ一向はならぬ事なりといふ。曾呂利大は笑ひてされば。の事也。貴邊は菓子を以て。君は進め。我は飯を以て。君はすすむる故。いつ迄も飽かるといふ事なく。甘きもの時宜しよりてあしく。飯はいつまでもよき物なり。まかし何もうまさ風味はなし。貴方の心は甘き所を以て。君の用ひ給ふ所を期する故。大は了簡達へり。我は飯のさまで。の風味もなき物なれども。退屈し給ふと云ふ氣遣ひなる事なさを事とす。春の寒さ

と秋の暮と。年寄の健なると。君の寵愛と。必久しからぬものなれば。其心を以て媚
びを諂ふて。真直は奉公し給ふべし。外は傳授もへちまもいらぬと申しければ。彼
侍も納得し。大に歡び歸りけるを。門口より呼び返し。かまへて飯の事を忘れ給ふな。菓
子をなげさせて。虫を出だし給ひすと。申しければ。彼男腹をかへて歸りけるとぞ。又
御三代目將軍家。ある時櫓へ御上り遊され。御小姓衆は仰せられける。誰ぞ此櫓の上
より飛び候。夜美遣はすべしと仰せ出だされける。我飛ばんといふものなかり
ければ。御氣色損じて。阿部豊後守は承り申すべしとの上意なり。此故は。豊州侯の方へ
行きて尋ねられける。豊州侯御申し有りし。それ格別各方の不調法なり。左様な
る働のなきことや。あるべき。あさねて御尋などあらん時。傘をさし候。心安く飛び
申すべくと答へ申されよと也。扱其後又々御櫓は上り給ひて。先日も申し。如く。此上
より飛ぶものあらば。何よりとも望む物をあたへんとの。上意ありて。御戯れ遊ばさ
れけるを御側衆。傘などさし候。飛び申すべくとありければ。將軍家御機嫌殊より
るはしくありしとぞ。かの御側衆後日。豊州侯の方へ禮ながら參られて。上意は叶ひ
し由。申されける。豊州侯宣ふ。夫は一段の事也。まかし以來とても。御身近は仕と

れて。ケ様の事。専ら心得あるべき事なり。上様御戯。上意遊され候事。何れもて
も戯れて御返答申し上げられよと也。かの入信服して歸りける由。又備前の池田武藏
守利隆侯の家臣伴。大膳といふ者あり。主人の寵愛を得て。出頭する事斜あらむ。傍輩
の者。是を羨みて。大膳は出頭すべき傳授を致し呉れよと望む。大膳眼を怒らして。其心
故は。寵愛をば得ざるなりと云ひて散々叱りしが。稍ありて面を和らげ申す。勲氣を
得る事を教へよといふてもなく。主人の氣は入らんと思ふ心が殊勝なれば。一口申
して聞るすべし。近侍の輩上手は嘘をつくゆゑ。叶はぬ。我は下手は嘘をつくが故。御
意は叶へり。大名は正直なるものなれば。随分不調法は見えまぐやうは嘘をつくべし。
上手のうそ。必佞曲なるものなりといひけるとぞ。

其の人曰く。曾呂利が興談。阿部侯及び大膳が人は示したる語。君は仕ふる者よき心
得なるべき事也。或は邪曲姦佞才辨を以て。取入り出頭する事。實は惡むべき事
あらむや。只太平の臣は心を正うし。身を直うして。媚び諂ふ事なく。時勢は應むる
こと。聖人の法制は叶ふべし。さもなき事。ひぢをとり。我は顔は時めき出頭を鼻
かけ。人もなげよふるまふなど。和漢共盡すべからむ

松平信綱侯并大石良雄評の事

一松平伊豆守信綱侯。死すべき期に至り給ひて。御用の書付共悉く藥罐の中へ入れ。子息甲斐守輝綱侯を呼び給ひて。我死なば此書付共を悉く焼きて。其灰を集め。かくの如く藥罐の中へ入れ。白き布切にて包み。紐を付けて首にかけ葬るべしと也。其後悶絶し。苦痛有りしが。暫くありて。眼を開き。近習の士を呼び念佛を唱ふれば。来世を助くるやと宣ふ。近習曰。必往生疑なしと申し候と申せば。豆州侯又人と死ぬる時の煩惱志怨にて。来世も其念を離れぬと云ふ。誠かと問ひ給ふ。近習其如く申し候と返答すれば。豆州侯去からば。我を眼を塞ぎて。只御奉公くと唱へて往生せん。年頃日頃御奉公を足らぬとのみ心懸り居るなれば。とても事のまさきの世も此念を離れぬやう願ふ事也との給へり。其内よまた病苦せめければ。眼を塞ぎ。顔をまかめ。涙をなかして。御奉公くと片息にて唱へ給ふ内。苦み少し軽く成りければ。眼を開き給ひて宣ふ。幽霊といふものも有るものか。なまものかと側のもの申す。隨分有るものにて候。逢ひたる者も多く候と申せば。然らば我ら幽霊と成りて。死しても君を守護し奉らんとて。卒去し給ひけるとぞ

其の人曰く。忠志無二の心。誠し此物語を聞く時。袂をひたすに至れり。臣たる者。一信綱侯の此時の答諾を。平日胸にたくはへて有るなら。忠勤の欠くといふ事あるまじ。あかひあれど。臨機應變にて。時勢に隨ひ。世上よく押移る事有るべきや。此程ある茶人の申す。前裁の石燈籠へ火を燈す傳あり。闇の夜より。燈心三筋計入れて。火を細くす。月夜よ。燈心七筋計入れ。火を太くする也。誠し此ことば。よき今日の行事に用ふべき也。赤穂の忠臣大石内藏助良雄。平日の行状闇夜の燈心細きが如く。いざや主人の事に至りて。月夜の燈火の太きが如く。暗闇にて。其變を察する事甚奇也。木村長門守が茶坊主にあたまをたふかれて。堪忍しけるを臆病者といひふらじや。かど。難波の役。比類なき戦死して。名を擧ぐるに同じ。其場所よいたり。其氣の動く事。或は静し。總し。猛く。勇ましくなどする事。忠臣たりとも。其時勢をしらむんば。深き淵に入りて。珠をとり得ざるに同じからん

進喜太郎が僕才六が事并桶屋物語の事

一元和初年の頃。幕府の御旗本は進喜太郎と云ふ人あり。瘡の療治をする事大名人也。進が僕も才六と云ふ者あり。極めておどけものにて。狂言を好み。御旗本中の慰物にて。關ヶ原御陣。左の腕を鐵炮にて打たれ。手叶ひがたく。用いたくむといへども。主人喜太郎不便と思ひて。召仕ひけり。後ハ膏藥を煉る事覺えて。金瘡の療治をするハ妙也。諸人可愛がり。所々へ頼まれて。殊の外はやりける。大坂御陣の時。皆々すゝめて手負の療治をいたさせよとて。連れて登り。わらじを作りて。陣中へ賣り或ハ手負の療治を請取りて。いたす。はやる事斜ならむ。ある時。才六例の狂言。我々軍をするハ金が多く入るといふ。皆聞きて。其戯言ををかしがり。其金を以ていかゞするかと問ふ。才六が曰。まづ我軍法を聞き給へ。其多くの金を以て。紀州へ行き。紀州熊野にて蜂と蜜とを多く買ひ取り。米て。人数にて持ち運び。樽などへ詰めさせ置き。蜂ハ袋に入れ置きて。すゝといふ時。大柄杓數千本にて。彼の蜜を汲みて。敵へ打ち掛け。袋の口を解きて。蜂を一時は放ちたらば。あまたの蜂むらがりて。さし殺し。又ハさゝれて。痛む所を切りて入るならば。勝利を得ん事疑なしといへば。一座興入りて。あごをかゝえけるとぞ。某の人曰く。僕が戯言をかきし得もいことを。腹をかゝゆるハあり。是を以て思ふ。物

みを勘辨なくして。成りがたし。僕が軍法。先第一金を立て。次ハ蜜と蜂とをいたせり。此三つの物をかれが戯言の道具立として。人の笑ひを招く。わづかの興を催す。さへ工夫勘辨と。道具立となくして。叶ひがたし。まして人たる道を行ふ。かならむ。五葉なくして。成りがたし。さかりとて。餘り五葉過ぎたるも。猶及ハざるが如し。器ハ水を盛りて。滿れば必あふれ。物食ふも。過れば腹はりて。苦し。あるもの。雜談。一人の桶屋有りて。いふ。おそれ大風も吹けよかしと。かたえらのもの聞きて。大風吹くのを。如何やと尋ねければ。桶屋が曰。大風がふく時。砂石散亂して。往來の人眼中に入らば。必盲人出来べし。然れば。琴。三味線屋。繁昌して。橋を多く取りて。皮を張るべし。さすれば。世上橋少くなり。鼠おのづからあれささきて。桶をかじりなん事。案の内なり。其時。至りて。我等が商賣の益となるべければ。大風を好むと答へけり。其まわり。遠き事。いん方なし。只五葉分別も。かざりあるべし。我明道の柱のたぐひ。笑ふべきことならん。

一 奥州泉領孝子并名君行狀の事

一興州泉の領主本多彈正少弼忠篤侯。領分の内は甚孝心の百姓あり。年頃四十餘父のも
 とや八十ちかし。其孝志是までつひは父の氣よさからひし事なく。一圖は孝道をつ
 くすこといふべくもあらむ。父もまた老年ながら達者にて。日々の農業を勤む。孝子寒
 氣のせつら。父が持ち出づる所の鋤鍬の柄。ひえんことをおもひやりて。あろりの火よ
 てあぶりて。これをもたせ出だす。かく逆心をつくし。が。老人若き時よりして。冷酒を
 このみ。毎日農作は出づる時。先冷酒を茶碗は三つづ。飲み出づる事。一日もかく事な
 し。孝子は是をいさめ度思へども。是迄心よさかひたる事なれば。今更餘命もなき老父
 の心よたがひ。日頃の樂みをさまたげん事を思ひやりて。勞する事斜ならむ。孝子つら
 く思ふよ。此勞心中は我力よ及ぬ。いざや神佛へ頼まんとして。毎朝氏神へ百度參
 を始めける。其殊勝さいもん方をし。漸日も立ちけるよ。ある日老父いつもの農業より
 歸りて。涙然として落涙する事あり。孝子其様子ことなるを尋ねけるよ。老父の曰。され
 ばの事よ。今日農作は往きたる處。勿體なき漸を聞きて。有難きは涙こぼるよ也。殿様よ
 は平日御汁をも御あがり遊ばされむ。ことく木綿の御衣服にて。襦袢まで白もめ
 んの由。御着も朔日。十五日。廿八日むかり三度。かますの干物一枚御あがり遊ばされむ

由。御近習の衆。御養生よなるまじき由申し上げられしよ。ケ様にして。下々の者をこや
 してやりたきとの御意有りし旨をこよ。誠は身よこたへ。骨は通りて有りがたく。覺え
 を涙を流して。其方は早くいひまかせ。我らも是迄の酒をやめ申さんとて。感きて歸り
 し也。あゝ勿體なしとて。夫より一向は禁酒せりとぞ。此本多侯いまだ御幼少の
 頃。山へ遊びは行き給ひて歸るさよ。ある所の庄屋方へ立ちよらせ給ひ。庭は建をしか
 せ。其上よて田畑を見はらし。辨當をつかひ給ふ。所の庄屋。名主。組頭等も其傍は居れ
 り。時は本多侯喰ひ給ふ處の飯一粒。土の上へ落ちけるをひろひあげいたまきて。是を
 食し給ふ。庄屋。名主。組頭ども感敷を催しける。誠は明若とや云ふべき。依りて其配
 下の民百姓等。富饒にして。靜謐にいふ計なし。ある時。樂翁侯本多侯よとひ給ふは。御
 領分の下民ことの外は潤ひ富める事。其聞え隠れなく候。如何の御仁政よ因りてか。と。
 御尋ね有りしよ。本多侯御返答よ。是は上一人の心よ有るべき事は候と。仰せ有りし
 とぞ

某の人曰く。孝子が物語誠はいそんかたなき事共。其君たるや。其子たるや。其父たる
 や。鼎の足のことく。道を守り。聖よ叶ふ處。其本といへむ。君の心よりしてこそ。老父

が飲酒もやみ。性が孝心も立ち。其甘美なる事。味ひやいふも絶えたり。有りがたき事
よごと

古代質素并小倉色紙の事

一むかし大猷公。御断じの衆にて。毎度登城して。居物語申し上げ。御夜話など申し上げら
れし衆中十人あり。毛利甲斐守秀元侯。丹羽五郎左衛門長重侯。蜂須賀達巻至鎮侯。林道
春の類也。此衆中登城の時。皆々屋舗より辨當参りける。衆の間。寄合ひて。是を披き
喰ひ給ふ。珍しき菜などある時。五取りかゝりて賞味し玉ひけると也。毛利甲斐侯
の辨當。菜は千疋の有りければ。皆々是の結構なる菜なり。珍しとして。殊の外賞味し給
ひけりとなり。阿部對馬侯。握り飯を紙に包みて。袂へ入れ御持参有りて。御中食の時
は。是を召し上られ。其色たる紙に付きたる飯粒を拾ひてくひ。紙の裏をのびして。は
なをかみ給ひし事。杯有りしを。見たる者も有りとなん。最明寺時頼入道の母儀。障子を
切り繼ぎて張り給ふ事。徒然艸にみえたり。寛永の頃迄。今の元結といふものなくて。
紙を細くたち。こよりよして髪をゆふ。其節まで。老人の紙を引きささて。其儘よご

きて。是よて髪を括り。其紙の先をもさらせとぞ。故に今古き繪草紙を見る。其如き髪
づきのもの多し。古風なる事なり。若きもの。伊達よとして。其まごさたる紙をわけめ
ば。紙みて置きなどしける。故に今も朝比奈などの畫。其遺風を移すと覺ゆる也。天文
永祿の頃まで。其風儀間々遺れり。理なる哉。右大將頼朝卿。南都東大寺造管寄附金五十
兩調達せんと有りしが。終に其金出来せずして。徒に成り行きける事。東鑑に見えたり。
如斯の事なれば。中々花者がまじき事。少もなく。天下の主將さへ五十兩の金子調達
する事あたらず。むなしく成りたり。其節の衣類紗綾縮緬と云ふ物。名のみ聞きて。
見たる事なほ者多し。皆布木綿の類ばかり。或は加賀より織り出だす所の絹を用ふ。紋
といふもの。はるか後に出來ける由。今源家の紋。笠を用ひ。平家の蝶を付くるな
ど。八島の繪を見ぬれども。是ら紋にてはあらず。其頃源平の家合印也。紋を用ふる
も。信長公瓜の紋など。大てい始のよし聞きし。其時。皆紋形といふものを。木下彫り
付け置きて。板木をおすやうに。墨を付けて。三所五所など。其主々の物數奇次第に押
しけり。今の紋よりの半分程もちいさし。黒き物への胡粉よておす。其時。其
其の今曰く。古風なる事。尤殊勝よてまたはしく。さすがに古のまたはしく思はる。

也。今世に残れる所の古物共。いづれも軽々しきもの多し。定家の色紙なども。さりよ
うつくしからぬ紙書きたり。此色紙の事。元伊勢の國司北畠の什物として。屏風
一雙有りけるを。花の下の宗匠宗祇勢別へ下りし頃。宗祇へ與へ給ひぬ。宗祇是を
秘藏し置さけるが。火難いで片々焼失して。片々残り。其内にも。赤色紙の餘程紛失
して。今僅廿四五枚ならで。残らず。是世上よいふ小倉の色紙百人一首歌の内也。其
外にも高子の後の御夜。三州八橋無量寺と云ふ寺有りし由。煤氣色よて。地あらく
見苦しき物とぞ。あるひは。名公名將の器財衣服多く。傳ふといへども。一つとして花
麗美艶なる事。曾てなし。只。要用を專一よして。堅固なる事を好めり。質素を專よし
儉約をおもとせしこと。まのあたりと思ひやられて。其古風感するは餘あり

小野木家妻女并かちんの事

一細川幽齋侯の和歌の門人よ。小野木縫殿助言卿と云ふ人あり。丹州福智山の城主たり。
關ヶ原の役は石田一味して。則。細川の籠り玉ひける。丹後田邊の奇手となる。此縫
殿助始よ。小身よて。年若の時よりして。和歌を好めり。や。妻を護けんとするよ。う

たよ志ある者を妻よ定めんとて。品々求められけるよ。其節吉田織部正妹歌は志ざし
厚きよし聞き及ばれ。媒して縁をむすべれける。縫殿助小身なる上よ。貧窮いんかた
なし。或日和歌の會を催す。其連中の。小川土佐守。熊谷大膳亮。守田下野守。木村宗八郎
等なり。座定りて。かたへを見れば。翠簾の掛りたる所ありて。さも雲上めきたるさま
也。皆人不審よおもわれけるよ。亭主縫殿助の云ひけるは。愚妻幾も。御會よ連り申し度
由申すよ付き。如此まつらひて。翠簾の内よ罷り在り候。あられ御連中は加へられ給は
れかじと申しける。程なく歌始りて。食事時分よ至りしかば。年の頃四十計の女。さもけ
おぼなるが。翠簾の外よ手をつかへ。今日の御客来よ。饗應奉るべき品なし。如何計ひ申
さんやと有りしよ。妻女とりあへず。短冊よ歌を書きて出だされけり。折節春雨の降り
ければ

歌「月さへも漏る宿なれば春雨のふるまふ物もなかりける哉

や有りて。黒く焼きこがしたる餅を。反故よつとみ。杉揚枝を添へて引かれしとぞ
其の父いらく。古風よして。其道よ志深く。即興の歌歌感するは餘りあり。貧窮を屈託
せめて。風流よ心を馳せる事。又ありがたし。總じて。昔の歌の會よ餅を出だして。

勝負の賞はあたへしより。歌賃といふとも。又内裡微々なりし頃。褐色の袴着たるをのこ。小豆餅を箱に入れて。築地の邊を賣りありきける。女房達は呼びて。褐と云ひしより。餅をかちん共いへり。よしやそれともあれ。かくもあれ。只。其會席の嚴密にて。風流を失せど。花着を長せざる事。能々甘美すべしとぞ。

蒲生飛騨守氏郷侯の家士の中。十人計京都見物は會津より登り。尾州熱田まで至りぬ。時は秀次公の家の中士。四五千石もとるらんと覺ししが。武具馬具いかめしく飾り立て。大道せましと来る。依りて。蒲生家の侍。少し道の側へ添ひて乗りかきをためて通りける。秀次公の衆の鎧持の袖と。乗掛の馬子の袖と。少し障りけるを。其儘は行き過ぎける。豊臣家の衆。以の外立腹し。不禮至極也。何方の家来なるぞと言ふ。蒲生家の侍直に馬より下りて。いんざん一手をつかへ。拙者儀は。東國邊の者にて候。此度始めて上方へ登り。此所まで参りて候。何れにも不禮の筋これあり候。御許給とるべし。私用まで登り候事は候へぬ。主人の名を名乗がたく候と申す。豊臣家の侍聞きて大

に怒りて。不届至極なる事を申すものかな。當時關白家の士は向ひて。彼是と申す者や有るべき。早々名乗りて。丁寧を盡し。下馬して通るべしとて。いひ止まを。蒲生家の侍の中。さかしくしき者有りて。宿の役人を呼び。金子を出だすべき間。扱ひくれよ。我々私用にて。旅行する故。別して喧嘩口論を好まむ。たとひ過分の金銀を出だしてなりとも。内濟しいたは度よし申しければ。驛の口利共。段々扱ひまかり。金子壹兩より廿兩。及ぶ共。曾て聞き入る事なく。いよく逆立いひつりければ。會津の衆十人計。悉く馬よりひらりと飛び下りて。何れも上着を一つづつ脱ぎ捨て。身輕になり。刀の柄は手をかけ。一様は詞を揃へて申しける。今迄はつゞみ候ひしが。我々共は。奥州會津蒲生宰相家の者共也。此度上方見物の暇を願ひて。罷り登りて候。此所は於て。不時の災難に逢ひ。迷惑ながら自己の旅中故。詞を下げて閉口し及ぶのみならむ。さまじくはあつがふといへども。御承知なき上。是非及むを。この上御挨拶申すべき詞もなく。絶體絶命の場所となりぬ。誠止む事を得ざる仕合也。御立上り候へ。勝負仕るべしと云ひければ。豊臣家の侍。最初の詞より似もつかず。一言も答ふる事あたらず。黙然たり。其内は宿役人等が計ひよす。いつともはし。其場を抜けさせて。關白殿の侍。間道を経て

逃げ行さしかば。蒲生家の侍。今何の益かあらんとて。又馬は打ち乗りて。上方のかたへ行きけるなり。彼蒲生の侍。年頃二十計を頭とし。皆若輩者にて。まかも小身の悴共のよしなり。

其の人曰く。他邦へ至りて。君命をとつかしめむと。是等の者をやいふべき。若輩なり。といへ共。其堪忍覺悟奇特千萬にて。勇猛また勝れたりといふべし。是所。氏郷侯平日武備の心懸厚く。物事綿密にして。捉嚴重なるが故也。ことわりなるかな。佐々木六角家の屬下にて。忠三郎と號し。江州日野にて。僅の知行を領し。父右衛門大夫秀賢の。無雙の臆病人にて有りしを。氏郷侯家を起し給ひ。信長公の智も成りて。秀吉公天下御治世後。勢州松坂十五萬石を賜り。其後與州會津若松すべて百五十萬石を賜下し賜ふ。故に家中の教令詳明なれば。下々までも。能く法を守る事また神妙なり。少年敵討。雲州の士詞の助太刀の事。一慶長年中の頃か。松州姫路近邊へ雲州の侍にて。四五百石計とると覺し。侍旅行して。駕籠より出て。茶屋に腰を掛け。茶をたべて居る所へ。年の頃十四五歳程なる童走

り来て。雲州の侍に申す。其の親の敵をねらふ者な候處。只今此所にて見かけ候ゆゑ。討ち果し候圖な候へども。敵の鎧を持たせ居り候故。手前も鎧にて勝負仕度候間。近頃御無心ながら貴子御もたせある所の御道具。借用申し度候也。我等浪人の儀故。餘方なく候と申しければ。雲州の侍委細承知いたし候。御若年な候處感も入り候。然し右の敵討。無ねて御届置かれ候かと尋ねれば。浪人の曰。無ねて相届置さ。今日此所にて。勝負仕る事故。所の領主へも申し達し置さ候ひぬ。御氣遣ひ下さるまじく候。侍曰。しからば持鎧御用立度候へ共。主用にて旅行致し候へば。私の儘も成りがたく。鎧の主人の爲の鎧にて候間。御用立申すまじ。去ながらうしろ立。ことなり可申候間。心強く思召れ候へといひければ。浪人大に悦び。とかくする内。敵も出米れり。大身の槍をさげ来り。たゞち浪人に向ひて突きかかれ。浪人もこゝをせんと。働さけり。雲州の侍は。拵は腰打ちかけて。これを見物する所。敵は。大兵の手垂といひ。長もの。得道具なれば。浪士の方危く見えて。陰になりて見ゆれば。敵は。陽に進みて付け入らんとする時。雲州の侍。其石突くと聲をかけられ。敵うしろへ振返りける所を。浪士飛び込みて。切殺しけり。然る處。敵の若輩共。彼少人。切りてかゝらんとしけるを。雲州の士。鎧の鞘をは

つし。眼をあらはげて。其方共の劔を眞と云ふもの也。引かまは相手なるべしといひければ。忍静りけり。跡の事など。雲州の侍。念頃よ世話して。彼浪士は向ひ。御手柄天晴なる事。感心いたし候。吾もからむ。我等主人へ御仕へ有るまじきや。其よきは吹舉申すべしとありければ。少年答へて。段々の御厚志偏に御厚恩詞の助太刀あり。返々辱仕合は候。御取持は預り候。奉公申すべしと有りければ。頓て松江へ同道して。主人へ其趣申し上げければ。御感斜ならせして。彼侍は加増を賜り。少人へは新知二百石とやらん與へ。小性はもして召遣われける。後年彼吹舉したる侍。聊所存は叶ぬ事ありて。松江を立ち退さける。此時。彼敵討たるをのこも離散しけり。何も立去るべき。仔細をけれども。我恩願よりたる侍立退きたる事なれば。おのれも離散したる事。義理甚深し。太守深くをしみたまひて。彼をめて歸され度思召はよりて。今一人の侍も本知まで歸參し。兩士共長久は忠勤を盡して。兩家永く好をむすびけるとぞ。伊某の人曰く。劔を負ふといふ事。曲禮に見えたりとぞ。彼兩士のありさま。物語を聞くは。始終義理の深き事感ゆるに堪へたり。惜ひ哉。かの兩士の姓名の知れざる事。此物語は。此村假水といふ者。専保の頃。入まかたりけるを聞きしとぞ。我は物語する者あり。假水が親の長生にて。古き事ども多く覚え居て語りしよしなり。

其後其忠告の事感ゆるに堪へたり。惜ひ哉。かの兩士の姓名の知れざる事。此物語は。此村假水といふ者。専保の頃。入まかたりけるを聞きしとぞ。我は物語する者あり。假水が親の長生にて。古き事ども多く覚え居て語りしよしなり。

感情の發句 并 盜人句を感ゆる事
 一先年江戸よて。乞食の頭たる車善七と。織多頭團左衛門と争論の事ありて。善七落度となりて。御成敗にあはべきを。いまだ幼少なれば。其家米七兵衛とかいひける者。主人は代り。討首にあふ。必死の忠義たぐひ有るべからむかの辭せよ

「地獄にも木陰があるか夏の暮」
 匹夫下劣の身よて。其情をよくいひ叶へて奇特也。されば。句にいづれも。歌の餘情も同じきなれば。感味すべき非諧ども。あまたあり

「早く女をまぐ子のうへへりて行く」
 「早く女をまぐ子のうへへりて行く」
 此句共を吟せれば。親の子を思ふ情を思ひやらるる。悲しく思ひやらるる。此句「無き」なら靡の内を菜種さへりて。此句鳥原の遊女の作のよじ。無と思ひやらるる

「まれば」の中は花咲く木賊かま

此句は豊後國ある片山里に貧くして。子獨もてる夫婦有りけるが。何やらん心よ
違ふ事ありて。をどこかの女房を離別しければ。女房悲しく思ひ。さまざまわびけれと
も。聞き入れなければ。止む事を得ず。家を立ち出づる時。此句をいひ出たし。かば。夫
感得し。呼び戻せしと也。遠江國天龍川の邊。老たる賤い男。孫が失ひて。其翌年の七
月。子蘭盆と云ふ。彼孫が位牌へ靈供を備ふとて

「去年まで叱る瓜を手向哉」

此句を吟すれば。恩愛の情涙も落つる計なり

「負ふと子よ髪をさらさる暑さのぬれ」

國女々句也。極暑の様子察せられ。實は女の句としらる。加賀の千代女が。夫と別れ
此時の句よ

「起るみゆ寝てまつ悔るひろき哉」

是亦其場合の様體思ひやらる。何事も上手に至れば。自然と妙あり。其角が句よ
「夕立や田をまめくりけ神あはは」

よる雨をふらし不角か

「頼政がひろひ殘せし椎」

よりの位よす。めり。其道の盛興に至りて。歌も句も。人情を和する所。各別の相違有
るべからむ

其の人曰く。さりし年。總州邊まで。誹諧を好むひとり者の方へ。盜賊入りて。家内の

器財悉く盗み取られたり。彼誹諧人を手厳く柱よくり付けて。ちつとも働かさざ。

誹人のいふ様。我少しの望あり。今かくの有様よなれば。金銀財寶一つとして惜か

らむ。まかし。一つの願あり。笈の内よ入れ置きたる宗祇自筆の伊勢物語と。床の間よ

置さける末の松山の文臺をば。我よあたへ給へといひければ。賊將聞き届けて。さも

あらげなく取り出して。投げやり。誹人の繩目をゆるして。盜賊どもは出で行きけ

るが。さるよても只今かれが乞ひたる書物と。文臺の結構あるものよ。立ち歸りて

奪ひとらんとて。戸外よたゞをみ。内の容子を伺ひけるよ。誹人の屈する色目もなく。

燈かきたて。筆と紙とを手よ持ちながら

「ゆき人も跡とざし行く夜寒るな」

とくけ返上く。ひとり吟じおける。盗賊等此句よめで。大に感じ。今宵奪ひ取りたる道具共を悉く返しあたへ。かゝる無欲なる面白き人といしらす。狼藉したりとて。金を多くあたへけるを。あへてとる事なかりしを。四五日もたちて。いづくよりともなく。樽肴よのし包添へて。電の前よ置きて歸りけり。察する所。彼の盗賊等かど覺ゆ。實に其道に至りて。鬼神をも感ぜしめ。たけき武士の心をもなぐさめ。男女の中をも和らぐ。むづかの一端といひながら。其感應深く思ふべし。

賢女物語 山ある深の事

一 一萬石計取り給ふ諸侯の妾たりし人。男子を出生有りしかば。位を付けて真正院殿とかき申して。小き館を經營し住み給ひぬ。と。又或大國主卒去し給ひて。跡嗣くべきものなかりし。此小身の諸侯と。深き因ありければ。國主方の家老眷族共。打ち寄り相談の上。彼小家の方へ申し入れ。男子を申し請けて。家を相続なさんとて言ひ入れれば。不行跡よぞだちし者なれば。大國の主將となりて。一國を治めん事覺束なし。幾重よも辭退ま及び申す也。大國の方にて。此君ならでんと。ふかく思ひ居るうへ。

往古同氏の家なれば。如何ありても乞ひうけむやと思ひ。老臣の面々詞を碎きて。數返申し入れける。漸く承知ありしかば。大に歡び。日を撰み。迎ひ取りぬ。叔彼の君小家よりして。大國の主となり給へば。定めて供廻り總體の美々しからんと。皆人思ひ居。沙汰しける。曾て左様の氣色なく。其家の古風を守り。格例を正し。公道なる事云ふむかりなし。平日召し給ふ所の衣服も。木綿或は紬のみよして。美服を用ひ給む。隔日一役人共を召して。政務を談じ。公事訴訟理非殺伐を禁じ給ふ。たま〜死の罪よいたるものある時。終日も食事し給むとして。顔色蕭然たり。月次の用日よ。大書院よ出座し給ひ。公事訴訟を聞き給ひて。理非判断せらる。直に其場よ於て。訴訟を聞召しなから。御辨當を召し上がらる。是れ少しも。隙の入る時。公事人。訴訟人難儀せん事を察し給ひて。かゝること。叔辨當を披き給ふ時。立會の役人。同座よて。一所よ食し給ふ。始めて御出席ありし時。晝飯時分よ成りしかば。いざや人々と共。支度せんとおりし。何れも辭退ま及びければ。大守曰。ちつとも苦しからむ。君臣心易き事。寢食を共よするも承り及びぬ。速應なき間。打ちくつろぎ。我と共よたべられ申すべしとありしを。遂て辭し申すといへども。聞き入れ給む。役人の輩止む事を得むして。大守の前

よて辨當をひらきける。佳肴珍味充満たり。太守の辨當は。食籠に入れて香の物と焼味曾のみありければ。何れも大い痛み入り。願は汗して。面を得上げむ。太守是を見給ひて。誰某と結構なる菜の物を設けたり。箸をかへして。我らよちと分けてんやと。戯れ給ふ。座中大い迷惑し。是より段々辨當の肴をやみけるよし也。又小家よかす所の御實母への孝心を盡し給ふ事いふも更也。然りといへども。御母公の方より。終は大國主の屋敷へ来り給ふ事なし。是よりて老臣打ち寄り評議の上。彼御實母を大國家の屋敷へ引き取り。知行千石を御臺所領として。進じ奉らんとて。小家の屋敷へ行きて御實母目見して。右の由を申す所。御實母曰。心ざしの所の嬉しけれども。太守の爲を思はれば。必無用と致さるべし。其子細に我ら輕きものゝ嫌たる所。先君の恩寵を得て。剩男子をうみ得し事。勿體なく。其有難き。常と思ふに餘りあり。然るに我子大國家の家督を繼ぎ。大國の主將となる事空かぞろしき。遂に辱き思ひをなせり。然るを。今彼屋舗へかきて。素姓つたなき老婆が。一所に住みて有るならば。太守おのづから我氣を請け得て。心ざし野郎は落ち入り給はん事。絹の色々よとまる如くならん。されば。一家中一國の爲よもならを候へば。只此まよ。差置き候へ。又。千石の知行過分也。我が當家よ在り

て。衣食とも乏き事曾てなし。其千石の知行を分ちて。日比忠勤のものへ加増し給はんいか程か歡び候はん。と有りければ。老臣等も感涙を流しけるとぞ。其後一度大國家の屋敷へ来臨し給ふ事あり。始めての入来なれば。馳走殊に甚しく。家中の者共。門前へ盛砂。飾手桶など出だして有りけるを。御母公は屋敷の門前迄駕籠を乗り給ひしが。門前まで下乗し。女中二三人供つれ給ひ。裾小短よかゞげて。問番の下座して居けるを。丁寧腰をかめて通り給ひける。屋敷内まで。大國家の侍中と逢ひ給ひても。餘り輕々しき故。先々よても殿の御母公といし。らむして。皆行き過ぎける。叔殿の前へ出で給ひて。其禮儀偏に君臣の如し。太守よも彼是と御挨拶有りて。上座へすゝめ給ふといへども。いやく勿體なしとて。始終手をつかへ。低頭して居給ひける。やゝ暫くして暇を告げ給ひ。歸館有りしが。其後再び来り給ふ事なし。惜いかな。この大國主將短命よして。人の慕ふ事甚し。

或人曰。貞婦の操道を守る事。仰ぎ感をもむ。此母公ある時。側的女中よ青く黄なる色の小袖を着たる有り。母公其いろは何と云ふ色ぞと尋ねさせ給ひける。山まゑ深とか申し侍る。まかし山まゑ深を誤のよし。實は山藍深のよし也。みちのやの山藍と

申す所より。深め出だす故とも。又ハ夏山の若葉の青々と。藍の如くなる故も。山藍深とも申すと承る。或ハ定家卿佐野の渡の雪の夕暮の晝をかくも。馬に乗りて。右の袖をうちかづきて。ちかす様よかく。是を山あゐの袖と申す事。晝家の傳授のよし。是のさのゝわたりの道せまきうへも。しかも雪降り積みたれば。袖とらふべき事も成りがたき程の。山の間のゆゑ。山あゐの袖と申すとも承り候ひぬ。元よりふるき事と見え。此色を定家卿の歌。

「ちかれしき霜より霜よくちはて。俱も古よし山あゐの袖

と申す古き歌有るよし承り及び候と申しければ。御母公かきかねて。其歌のそのみの無ねて覺悟して居る所よ。やと尋ね給へば。左様よてのなし。さるとし。此御館は官仕いたし居り候瀧瀬とやらんよ。承り侍ると申しければ。御母公大に感じ給ひて。今程ハ。人の覺悟も我覺悟よしして申すこと常とをなれり。歌物語より其身の律義なるをこそ賞すれとて。綿縮を賜ひて夜美たぐひなかりしとぞ。此女大切の用向をば承り居る前夜の。粥。梅干。焼味噌より外。他の物を食はぬ。用心して。叔明日の用事を勤めける。貞實無二の者なりければ。御母公の口入よよりて。ある歴々の侍の方へ嫁し。仕合を得たりとぞ。

國府寺筍 并島左近り事

一今の昔。播州姫路の太守たるひと。年々筍の生ふる時分。姫路の城下國府寺次郎左衛門といふ富家へ。振舞よゆき給ふ事有り。かの國府寺ハ。由緒正しきものよ。太閤よりの御朱印頂戴す。境内ハ大藪有りて。年々筍出づる事夥し。其太守を招請申す事先例也。また。此藪へ入りて筍を盗むもの。必罰せらる。事律令也とかや。ある時ハ。筍の時分。太守の中間年十七八計なる若もの。ひそかに彼やぶに忍び入りて。筍を多く盗み取りけり。此事露顯し及び。吉岡某といふ家老のはからひよ。禁獄のうへ。彼者打首し致しけり。其節吉岡至りて出頭して。肩をならぶる者なし。こゝハ其翌年夏。例の筍時分。國府寺次郎左衛門太守を招請し奉るよよりて。吉岡もしたかひ行さけり。亭主次郎左衛門罷り出で。いつもの如く。藪の筍を御覽下されかしとて。先へたち案内す。太守見物まじくして。うしろを振返り。筍のいつものとゆるが。人々と仰せられて。涙をこぼし給ひければ。吉岡がつとじたるよし。下劣の小童の命一つといへども。忘れ給ひて。筍を見給ふ

よも。かれが死をいしませ玉ふ。人君の思召いと有りがたし。凡是まての。大概此節を盗む答り。死刑に極りし。太守半句の謎を以て。其後の永代死刑をまぬかるゝやうに成りしこそ。徳行とや申すべき。或人曰。人の一言半句の事よりて。相違の有る事なり。身左近勝猛。大和の筒井順慶の家を浪人せし時。困窮いふ計なし。和州吉野邊に近き親族有りて。しかも金銀澤山に持ちたり。然りといへども。生得番じて。中々人よかす事なし。左近度々無心を申し遣すといへども。一向は取り合ひを。此故は左近さまとくと思案して。辨吉達せる者を撰みて。彼者よいひ合の遣す。此程金子何程の入用は付き。無心申し度候。尤強ひてといふ不申候へども。親類の事故。其家の爲を申し入れ候。凡。金銀財寶を人の施すもの。子孫長久に繁昌して。益榮え。施さざるもの。災害必近きよ来ると承り候と申し遣しければ。元より大徳無雙の者なるに因りて。早速は金子調達しけるとぞ。

謙信侯毘沙門并三淵大和守が事

一上杉謙信侯は。毘沙門を信仰ましくて。彼家の旗の印は。毘沙門の毘の字也。盟約誓紙

など有る時。毘沙門堂へ打ち寄りて。上座へ謙信侯着座し給ひ。家老中一家中。段々居流るゝ事也。或時鄰國は一揆蜂起の沙汰有りて。間者を入るゝ事急也。彼者は神文とせんとする。いつもの如く毘沙門の前にて。神文とせんと云ふ。謙信侯曰。事既に急也。毘沙門堂へ連れて行けば。それだけ遅くなる也。我前にて神文とせよと也。老臣等例はたがふとして遅らす。謙信侯笑ひて曰。我ある故は毘沙門も用ひらるれ。我なくば毘沙門も何かせん。我毘沙門を百度拜せば。毘沙門も我を五十度か三十度拜せらるべし。我を毘沙門と思ひて我前にて。神文とせよとなり。諸臣納得して。彼者神文よおまひける也也。一言語活達の氣象時よりて發明也。足利義政將軍茶を好み給ひ。或時三管領の家老を呼び給ふ事あり。茶席はのぞめる時。細川家の臣三淵大和守計一刀を帯せり。東山殿達て腰物を取るべしと御説ありし。彼者申す。主人を持ち候者よて候へば。おせめて一腰の御免下され候へと申しけるよし。誠忠言とや云ふべき。金言とや申す

家老等も其言を聞きし。其言を聞きし。其言を聞きし。

一ある名君。始めて入國まじくける時。國に在りける役人夫々命じ。壁をぬり直し。疊をかへ。腰張等さらびやかまいたし。泉水築山迄の花麗を盡しけり。其日に至りしかば。太守機嫌よく入城まじくける。木綿布子。同じ木綿鼠。深めたる紋付の單羽織。馬のりあけたるを召し給ひ。馬は打ち乗りて。城に入らせ給ふ。町在のもの。今日ぞ殿様入部也とて。見物山の如くなりしが。右の體を拜見して。肝をけしたるとぞ。太守入部の後幾程もなくして。庭を潰し。築山を穿ちて。水をたへ。是へ稻草を植ゑて田とし。自身世話有りて。百姓を呼びて農のいとなみをさせられ。民の艱難をしり。其年の豊作は作を量り給へり。又。居間の腰張をへがし。松葉紙にて自身張り玉へり。是まで前裁は植ゑられし樹木名草までも。望心のものあらば遣すべしとて。悉く人に賜ひける。疊も琉球表の目の荒さ。縁をもとらて用ひられし也。扱入部四五日め。所の木綿やよて木綿二反調へられ。小納戸の者を召して。此木綿單物は仕立度ま。定紋を付けて。水浸黄は深めさすべし。我思ふ子細ある間。随分當時はやりなる。町と在との紺屋へ一反づゝ遣すべしと仰せ有りければ。奉役て。其通はしたり。時ははやる所の紺屋なれば。人多く入込みて。右の深物を見て。諸人太く仰天し。殿はか様なる鹿末の品を召され候や。是を見て。我々が着服大く奢の至也。嗚呼々々勿體なしとて。皆是を語り合ひ。吹聴して。自然は町在迄も書を停止しけるとぞ。此家中にて。城普請有る時。足輕共へ申し付けられて。是をいたす也。故に堀をほり。石垣など築く事。能心得居る事也。ある時洪水にて。石垣少し崩れ。其修復を足輕共へ申し付けられて。三百人計も打ち寄りて普請いたしける。延を敷きて。其うへに刀を脱き置き。脇指一本にて働く事。古法也。其最中へ太守見物に米給ひ。大勢の働をまばらく見分して。居給ひけるが。彼延の際へすかしくと至り給ひ。脱き置きたる所の刀を手を取り。するりとぬき給ひたる處。さながら研立の様子なりければ。太守御機嫌よく我男の刀。皆よく研きてある也と殊の外に悦ばせ玉へりとかや。元より此家中武備の心懸厚く。下々迄も嚴重なる事也。しめは。今日此體を見て。いよく武を磨き。腰物など少しの錆よても。早速研きしとなり。

或翁曰。森家の侍は喜多見某と者云ふあり。貧窮にして。難澁言語は絶せり。後より焚くべき物もなくして。家の柱。竹の簀子迄も折りくべて焚きける。妻も離別し。男子一

人有りける。たのみ寺へ遣し置き。おのれひとり成りて暮し居しが。因窮更に加
 なる事なし。後々の家宅雨もりて。壁もくさり。簀子の皆焚き仕舞ければ。せん方盡
 きて竹の垂木をととのへ。生木を柱として。塀へさし掛けいたし。其中に住居しが。門を
 閉ちて人よ逢らむ。終に餓死し及びけり。近所の者の。久敷音のせされば。不審して。
 是を見付けて。早速目付中へ達しければ。頓て檢使を越れける。さもさややかなる。
 鍵一筋。うつくしく拭ひたて。塀の庇下。竹釘を打ち掛け置きて。金紋の付きたる
 立派なる鎧櫃もたれ。大小を帯して死しけり。目付役其鎧櫃を開き見ける。はお
 やかなるおどしの鎧一領。軍用金として封じたる。小判百兩あり。又垂木は澁紙包
 一つある故。引きときみる。あたらしき上下一具。小袖袴等總べて勤の衣裳一式有
 り。腰物の革柄にて。真黒よよごれたれ共。身の氷のごとく研立て。大和の米が作とや
 知らん。百枚の折紙付の由。目付役とくと見改めて。其趣を主君へ逐一達し申し。か
 りば。御感料ならむして。たのみ寺に居ける子を召し給ひ。父の跡目相續申し付けられ
 是迄の借金等悉く太守より返済し給はりければ。殊の外ゆたかになりけり。其後森
 家津山にて。斷絶の頃。人減りて。かれが子孫も浪人しけるとぞ。

一井伊家の侍岡本半助并茶室の切の事
 主税助方へ振舞い行き給ふ事あり。半助小兒姓にて供をしたたりけるが。其節世間一統
 は唐犬を飼ふ事。殊の外とやりけり。庵原方にも。君より賜ひたる唐犬一足有りけるが。
 門の内は居て。太守米臨し玉ふ時。とんとんと吼えける。掃部侯御機嫌あしく。犬の犬
 をよくあるもの也。此犬は主を忘れたり。其上耳も長く見苦しければ。誰かある。あの犬
 の耳を切るべしと宣ひけるを。半助聞きもあへむ。玄關は上り。釘は掛けてありける。髪
 鍬馬の毛を
鉄具なりを取りて。太守の前へ差上げ。まづ御前より耳を遊されて。御覽候へと申し
 上げしかば。掃部侯笑はせたまひ。御氣色宜しかりしとぞ。又。此半助十五歳の時。掃部
 侯長野十郎左衛門と云ふ家老の方へ振舞い行き給ひし時。半助も供も参りける所。十
 郎左衛門方は扶持し置ける浪人有りけるが。亂心して。人を殺して。長屋へ取り籠り。諸
 人長屋の口より立ち居て。騒動する時。半助振袖をきて。長屋の戸口より有りしが。人の袖の
 下をくぐりぬけて。長屋内へ飛び込み。被浪人をとめぬ。其手柄比類なし。井伊侯其場

また二百石をあたへ給へり。また半助幼少の時。江州彦根青龍寺にて何やら大法會ありて。門前を建つる無縁の者。入るべからむとあり。半助子供の事なれば。押し代寺内へ入らんとする。僧中出でて無縁の者入るまじといふ。半助笑ひて他人の女房は遣らぬかといひければ。寺僧閉口せりとぞ。此僧生涯此答語を忘れずして。終つ大悟せけると也。井伊侯ある日。半助は戯れて。とうがらしの小さくても辛じと宣へば。腹を計ふ候と答へ申したりとかや。半助後政事を預りて。江戸勤番は出でける時。半助と知音はる人。半助が方へ尋ね来るは。我居間ことごとく板の間にして。只座する所一板を敷けり。夜の小さき蒲團一つさうりして。道具。家財。挾箱一つして仕舞。尋ね来る。人暫く物語の時移り。晝時分もなまりしかば。飯をたべてゆけよと。頓て膳を出だせける。さも黒飯。飯は青菜のとしらかしたる汁。向ふの小さき赤鯛一足を焼きて付けたる計也。亭主又さうりして。汁と魚物をくひたり。かへ給へとまひけり。叔中酒を出だす。一は。胡麻を摺り込みたる味噌を着して。客も亭主もよき程飲みて。酒を入れよけり。其上にて。亭主半助申しけるは。今日の御珍客故。過分の馳走をいたし。我等も御蔭にて。よき相伴を任り候とあり。客も興さめて。叔中今日のもてなしを。亭主よのよほど御

氣をばらせられしよや。我らの平日もかやうなる品いたべ申さといひければ。半助重ねて嗚呼の事をば宣ふ人也。此上の馳走何かあるべき。若此上の饗應あるとも。それゆゑてなしといふべからむ。奢といふもの也。我ら三十五萬石の志めくくり致す役柄なれば。平日の行跡心入大切也。あたらし金銀をいかに口あたりがよければとて。腹の中へ入れて。糞として仕舞と云ふ。勿體なき事也。是より上の食事をまゐる事。全くの奢の至也。向後止め給ふべし。我ら平生の。半春の飯は香の物より外喰はむ。以来を慎み給へと。意見しけるとなり。或人曰。井止主計頭正就侯の物語給ふを。志賀瑞翁が若年の頃。聞は傳へし由にて。瑞翁よりまた聞きたりし由。はなしけるやうに神君。濱松御在城の節。御側衆の内。茶宇の袴を着用いたしものあり。神君御覽遊ばされて。其袴は何と云ふ物ぞと御尋ねあり。彼人御受は茶宇竊と申す由候と申し上げければ。奢たる事哉とて。御機嫌宜しからざるに因りて。其後着用仕らむ。漸日敷を経て。神君先日茶宇の袴いかに仕りたるかと御尋ねければ。破れて用ひられざるよし申し上ぐるより。おからば其破れたる切をくれよと上意あるより。捧げ奉りぬ。御近習衆を召し集められ。

此切の何といふ切ぞと御尋ありしは知りたる者なかりけり。其後本多作左衛門重次正京の節。是を上方へ遣はされしは。上方も此切を志りたる者少して。極めかねしとぞ。かの袴を着たる人の。暫く迷惑の體にて。引籠りありしが。漸々よして出勤しけるとなり。

名君夜話并仁心の事

一ある名君。近習の者を集めて。兩夜の徒然に宣ふ。其方共。誰が大切なるかと問ひ給ふ。近習の衆詞を揃へて。君より外は大切なるものなしと云ふ。太守又何故左様は大切なるかと。今日恩顧を蒙り。祿を賜はり。妻子等をまごくむ。其主恩いん方なき。故に命をも奉る也と答ふ。太守然らば。恩祿をあたふるは依りて忝也。近習のもの其通と答ふ。太守重ねて汝等も食祿を遣す。我力にていな。百姓共が骨折故こそ。食祿もあたへ。我らは一命をも投げうつ。其筋を傳へ。其本をたゞしみよと仰せられき。此君甚孝心よまじく。御親君への御つとめ。言葉絶えたり。常に宣ふ。輕きものは平日親の傍を離るゝといふ事をなす故。孝行もつとめやす。親の側は居る事こそ浦山

しけれ。我ら諸侯の列はあれ。下さまの如くはならざるこそ恨なれと宣ひし。いとあり難き事なり。此君家中末々迄の名前帳を。平日懐中し給ひ。閑暇の節。五日め六日めは誰々の久しくみうけざるが。替る事もなきかと尋ね給ひ。又は足輕中間迄の年齢を帳面は留め置き玉ひ。何某は。當年いくつの老人なるが。達者なるうなど。問ひ給ひ。又病氣の様子を聞召して。殊の外は繁じ給ひ。人參烏目等を賜はりぬ。若死刑に命ぜらるゝものあれば。二度も三度も議して。其後又二ヶ月三ヶ月の日を待ちて救ふべき品あるか。又天の助あらんかを見合せて。其後漸よして。死刑につく。其日。太守寢食を安うし給ひぬ。仁政を行ひ給ひしかば。後法の犯すものもなく。罪につく者もなかりしとぞ。めでたかりき

雨窓閑話 大尾

此書之出於白川夜話傳以為樂翁源公所作
 書肆名山閣獲之朝士中山君將刻於余質之
 桑名藩田內翁翁曰公素無此作世之所傳者非
 也然以余觀之此書裒輯近古事蹟而皆實踐之
 言裨益匪尠况於論評評精乎夫書之有論評猶
 車之有輪轄也輪轄密而車愈具矣論評精而書
 益備矣車而具焉可駕而行矣書而備焉其可不
 讀而法焉哉改題曰雨窓閑話刻成謁跋於余於
 是乎書則改題跋

雨窓閑話跋

茲書舊題曰白川夜話傳以為樂翁源公所作
 書肆名山閣獲之朝士中山君將刻於余質之
 桑名藩田內翁翁曰公素無此作世之所傳者非
 也然以余觀之此書裒輯近古事蹟而皆實踐之
 言裨益匪尠况於論評評精乎夫書之有論評猶
 車之有輪轄也輪轄密而車愈具矣論評精而書
 益備矣車而具焉可駕而行矣書而備焉其可不
 讀而法焉哉改題曰雨窓閑話刻成謁跋於余於
 是乎書則改題跋

長嘉永庚戌孟冬

齋而進其芳。均與白。松代開畏堂。小林至靜識。
 益備矣。事而其真。已。誠而首矣。言而備。其。不。
 車。之。下。律。計。也。律。計。密。而。事。金。具。矣。備。體。蘇。而。香。
 言。辨。其。通。曲。出。矣。備。體。計。而。事。夫。書。之。下。亦。體。能。
 亦。然。以。亦。歸。之。曲。香。聚。揮。出。寺。尊。能。而。書。實。錄。之。
 亦。然。以。亦。歸。之。曲。香。聚。揮。出。寺。尊。能。而。書。實。錄。之。
 香。集。於。山。園。遊。之。醉。在。中。山。款。款。以。公。亦。實。之。
 燕。書。書。與。白。日。川。亦。流。對。以。歲。舉。筆。臨。公。視。亦。
 而。密。關。請。題。

嘉永庚戌孟冬

松代 畏堂小林至静識

かゝるひさし

齋藤彦磨通稱の可憐華假庵又宮川舎と號せり石州濱田の城主周防守の藩士にして安永二年に生れたり幼時江戸に來り濱町の藩邸に住り學を伊勢貞文本居宣長より傍山東京傳よりつきて其文章を磨きぬ性質剛毅にして毫も時流に阿らざる超然一家の見識を抱けり好みて鬼神を信仰し往々幽冥不可思議の説をなす事あり其見識の尊卑知らむといへども能く高言放論して殆傍若無人の勢ありき天保年間藩主事ありて與州棚倉に徙さる彦磨も從ひてかの地より下りぬ時水戸に耕雲齋の事起り周防守與りて勲功ありしかば幕府これをめして客老とし新に川越に封ぜり彦磨また從ひてこゝに移りぬ彦磨常に心を讀書に寄せ余暇あるごとし和漢古今の文林に分け入りて殆止まる所を知らむされば其學や雜駁の嫌なきはあらねど博聞洽記一世は高く或は諤々の議論を唱へて人を動かし爽快の筆を振ひて世事を批判したり川越に移りしころは年稍老いたりといへども其の氣象益壯にして筆聞舌戰の晩年を送りきとぞ著書數十種ありいまその重なるものを擧ぐれば伊勢物語繪抄。さかのやまぶみ。神代餘波。諸國名義考。三拾小傳。醉中五論。武烈天皇暴惡虛名。黃子の根。現身のなやみ。初學教語。神道問答。竹帚。かこり等なりこのなか「あしのか

り不」といふ隨筆あり濱町に居りし時火災に遭ひて其大半を焼きたりとして氏みづから大に之を惜みきとぞ以上の諸書のうち最見るべきものを「かたびさし」とも「伊勢物語繪抄」「諸國名義考」の如きも頗心切の著なり「現身のおやみ」村田春海の清水濱臣に命じて本居翁の所説と人物とを難せしめたるを駁せるものよて痛論
爽快氏の最特色なる筆なりとま又あるとき古今六帖の「人の心をいかしたのまん」といふを下の句とし十余首の歌をよみて頗世評を博せり文政六年享年八十七にて歿しぬ其子孫いまは川越にありとぞ

おのれいまだ若かりしころ始めての火の災
よ住どころやけぬれを河のべの濱町のほと
りの蘆ぶきの屋よまむし住ひける頃かりを
めよ葦の假庵と號けつるが思ほえをひろご
りてとほきさかひの人もあること、ありよ
たれむもとつ住かよかへりても猶かふべく
もあらむをかまよさし置きつゝかたへよ
いさゝか立てをへしてふづくゑおく所とし
て傍廂とあん號けぬるかくをいとまあるを
りよよくさよのあげつらひ書どもあら
もむつる草稿の中よりいさゝかとり拾ひて
たよよかたびさしと名をほせつるがつぎ

ようもりくして五十巻よもあまりぬるを又
 さらよこ、かしてぬきかきして木よゑらせ
 たりえうあきたのわざといまりあがら猶い
 けらん世の老のあゝろあぐさよいたづらあ
 るたい言書きはくけぬるよあんありける
 嘉永六年の秋
 八十六翁
 齋藤彦磨

傍廂前編目録

ひえはじめ	一頁	よくきもの	十三頁
武勇詩論	三頁	白酒 黒酒	十四頁
曾我のあど討	四頁	大工 左官	十五頁
澹閑 <small>かきつゆ</small>	四頁	九年母	十五頁
おろし をろし	五頁	國初 <small>の</small>	十六頁
和詩	五頁	隅田川	十七頁
ふるとし	六頁	孩子蛇を殺ま	十七頁
鬼よとふ	七頁	小女狼をころま	十八頁
ゆりの色	七頁	鈴虫 松虫	十九頁
尺八の笛	八頁	五畜 六畜	二十頁
かまがこ かわやた	十頁	交易	二十頁
如意	十頁	籠荷 生薑	廿一頁
披風	十一頁	役行者	廿二頁

傍廂前編目録

南無	廿二頁
壽の長短	廿三頁
おもしろた	廿四頁
霞時雨	廿五頁
嘉定祝	廿六頁
冬のおでしこ	廿七頁
窟	廿八頁
聾	廿九頁
坊主	三十頁
やよ	三十頁
延齡のあのみしきもの	卅一頁
似顔繪	卅二頁
箒木	卅二頁
重言の略さぶり	卅四頁

菊	卅四頁
おがらへ	卅六頁
髮疑を墨よて深む	卅六頁
花	卅七頁
かつ杖	卅八頁
神の御姿	卅九頁
まをそとこ	四十頁
あり	四十頁
離	四十一頁
江戸人の勇氣	四十二頁
庚申狂歌	四十三頁
神位	四十四頁
一筆	四十五頁
暮目鏡	四十五頁
墨引新	四十六頁

まゆらさよ姫の石よりなる	四十七頁
鎗	四十七頁
單物帷子	四十八頁
桶箱	四十八頁
圓位上人の杖	四十九頁
私の官位	五十頁
脇草	五十一頁
非理法權天	五十二頁
屠蘇と烏頭を加ふ	五十二頁
夢あひせ	五十三頁
正月事始	五十六頁
握符	五十六頁
ぞろかじき	五十六頁
はうふとつうなるゝとのけ	五十八頁
ぢを	五十八頁

石の鏝	五十八頁
國分寺	六十頁
いろは文字	六十頁
廣成の失	六十一頁
強盗と名の付する異ある人	六十二頁
灰零	六十二頁
けくき木	六十二頁
くごうけ	六十三頁
作者の名	六十四頁
萬物	六十五頁
得たるべき	六十五頁
變輶國	六十六頁
夜鷹	六十七頁
毒物	六十八頁

郭公	六十九頁
からまの鳴聲	七十頁
劔刀名義	七十一頁
唐音	七十二頁
普請作事	七十二頁
神爵	七十三頁
言をいさゝらかへて心をい	七十五頁
くうへる歌	七十五頁
手のよしあしの論	七十六頁
くちづゝへ	七十七頁
御位争	七十八頁
ちん犬	七十八頁
さくおどり	七十九頁
あぬる樂	七十九頁
朝あ夕あ	八十頁

鯨尾槍	八十一頁
顔色土の如し	八十一頁
神社の星祭	八十二頁
神の使	八十二頁
羽倉在満翁の真蹟	八十三頁
極樂地獄の繪	八十四頁

傍廂後編目録

たくじ	八十五頁
南方退治	八十五頁
静の前が勇氣	八十六頁
以牛祭神	八十七頁
雁金	八十七頁
因快止動	八十八頁
大塔宮	八十八頁
軍神問答	八十九頁
龜のますら	九十一頁
はくも鬚	九十二頁
女筆女文	九十三頁
武烈天皇御謔名	九十三頁
いしとけ	九十四頁

位服	九十五頁
林家學風	九十五頁
七賢人	九十六頁
下野の花	九十六頁
盗才	九十七頁
山本晴幸の明眼	九十八頁
幽霊の見ゆる處	九十八頁
あまじこ	九十九頁
額烏帽子	百頁
神の託言	百一頁
鳥羽變文	百二頁
あひし。かいら。をさえ。	百三頁
みかやうど	百三頁
後世の旋頭歌	百三頁

すまもの	百四頁
さむ	百六頁
松の花	百七頁
醴泉	百七頁
知行	百七頁
たぐらめ	百八頁
徂徠が病中	百八頁
將棋	百八頁
八神殿の焼失	百九頁
水仙山	百十頁
人名の魚	百十一頁
猫	百十二頁
言を信じて人をまらむ	百十二頁
おしゆとをしねとい異なり	百十二頁

稻穀	百十三頁
鎌倉長吏定書	百十三頁
大行天皇	百十四頁
諱	百十四頁
植物の虫	百十五頁
和歌四天王の異名	百十五頁
幸矢拔	百十六頁
水草	百十七頁
年忌	百十七頁
實名を音よて唱ふ	百十八頁
蛙掛	百十九頁
胡蘿蔔	百二十頁
俗畫	百廿一頁
那波道圓	百廿二頁

よげ水	百廿二頁
葵を簾に掛く	百廿四頁
鶯草	百廿四頁
義士の難陳	百廿四頁
小石を妊娠のまじあひと江	百廿五頁
四大橋	百廿六頁
こほろぎ。きりくぐり江	百廿七頁
鐵砲鍛冶の國友	百廿七頁
三昧の法	百廿八頁
勅勘勅許	百廿九頁
鳥のせうやうもの	百廿九頁
繪そらごと	百三十頁
大人小人の國	百卅一頁
行燈挑燈	百卅三頁

月よ星九曜	百卅四頁
熱田社	百卅四頁
詞不可疑	百卅五頁
三十六言の歌	百卅六頁
今神の湯	百卅七頁
大男	百卅七頁
大字	百卅九頁
千木鱈木	百卅九頁
鳥居	百四十頁
九段	百四十一頁
小兒真心の歌	百四十二頁
無住法師の歌	百四十二頁
酒のむ人	百四十三頁
金の五色	百四十三頁

傀儡	百四十五頁
船の名を何丸といふ事	百四十五頁
無病長壽の靈藥	百四十六頁
金銀鐵	百四十六頁
反齒	百四十七頁
柳橋	百四十八頁
西瓜	百四十九頁
譏草	百四十九頁
可用不可用	百五十頁
角生ひゝる馬	百五十一頁
麥秋	百五十一頁
ひとえのひさご	百五十二頁
軍學の始	百五十三頁
飯豊皇女	百五十三頁

國府臺	百五十四頁
國分寺瓦	百五十四頁
秀吉公の御目のひうき	百五十五頁
瓢箪	百五十五頁
役行者が畜生道よかつ	百五十六頁
笛をこちく	百五十六頁
有情非情	百五十七頁
出芋大社	百五十八頁
おのが田へ水を引く	百五十八頁
おもり。やもり。とかけ	百五十八頁
からの小兒の手習はじめ	百五十九頁
まし	百六十頁
くさり	百六十頁
夷三郎	百六十一頁

大盃	百六十一頁
島織	百六十二頁
草字より真字に直しとゞへ	百六十二頁
尚齒會	百六十三頁
一莖二葉	百六十四頁

火澆布	百六十四頁
とひき	百六十五頁
くひつミ	百六十六頁
物いまひ	百六十七頁

傍廂目錄終

傍廂後篇目錄

傍廂前篇

藤原彦磨著

年毎の正月の始めよひめとじめといふ事。假名曆にあるをいかなる事とも定るよ記し
 たる書もなければ。大方に。男女交通の始めとと思ふゆれど。親子兄弟の中よてり。つゝ
 まじさよさともしえいとぬ。好色淫奔の心を恥づれらるべし。さる故よ。小ざかしき人
 の。編繅始めなりといへり。和名抄は編繅比女とある。枕草紙は御衣編繅とあるよて。衣
 よつくる糊なり。今もひめのりといへる物なり。是資青記。海人藻芥などよ誤りて。食物
 と思へり。よしや常の飯よしても。毎日三度つゝくへ。何ぞ其始をいふべき。あはひひ
 かたうゆゑるうゆの始もなし。酒の呑み初もなし。又飛馬始なりといへる。別よ馬乗初
 のあるよ。心つるざるよりいひ出でたるなり。傳略抄よ。ひめと。騎の異名のよもいへる
 ことあれど誤なり。飛翔齋のなどの字は。馬のうへよいへるなり。獸よ。馳走駈などの字
 が相當なり。又傳略抄よ。まべて女の所作をいふとある。姫の字よなづみたるなり。故

師伊勢貞丈大人の云く。初春のひめとしめぬ。諸説まち／＼なれど。皆。とるよたらむ。む
あしより世俗のいひ来れる。男女交合の始なり。是子孫増長の大本よて。人間第一の大禮
の根元なりといれしなり。此類なき卓論なり。そも／＼伊弉那岐。伊弉那美の二大神。そじ
めて男女交通し給ひしなり。私の御慰事よあらむ。高天原よて。天の御中主の神。高皇産靈
神。神皇産靈神三大神の勅を承り給ひて。おのごろ島よ八尋殿をたて。天の御柱をたて。
禮儀嚴重よ取り行ひ給ひしなり。國々神々人々山海草木など生みなし給えん爲の。重き大
禮よて。輕々しき戯れの慰事よあらむ。是を始めよて。素盞鳴の大神の。奇稻田姫の命を娶
りたまひ。彦穗の邇々岐の命の。木花咲耶姫の命を娶り給ひ。彦穗々出見の命の。豊玉姫の
命を娶り給ひしなど。御史を見てあるべきなり。今の世よても。中宮女御などの入内の式
なり。御記委まきあり。其外高貴の御方々の。御婚姻の式の結構美麗なる事。言語よ述べがた
し。下の下なるさざみよても。婚姻の一代一度の大禮なれば。身の程々よ隨ひて。媒妁の人
を以て取り結び。親族一類かたらひ合せ。定まりたるうへよて。雙方の主君へ願ひぶ奉
り。御ゆるし蒙りて。吉日をえらび。親子兄弟。一族家門。皆禮服を着て參會し。酒宴歡樂し
て。萬歳を誦ふなり。子孫繁榮の基をおこす。男女交通の行ひ始の祝事なり。其後主君の仰言

蒙りて。御前よ酒肴を獻じて。禮服よて。婚姻の御禮申し上ぐるなり。交通始をみたるよしの
御禮なり。斯く表よあらししながら。その行ひ。人の前よてすべき事よあらむ。大祖二神の
交通なり。くみよおこし給へり。くみどの。隱處なり。おこし初發なり。然る故よ。新婦を
娶るなり。新室を造る故よ。新婦を新造といへり。よしや一室造らむとも。新婦を新造といへ
るなり。古今通稱なり。されば。ひめとしめぬ。密事始の略稱なれば。編織よも。姫よも。飛馬よ
もかゝる事ありあらむ

武勇評論

元祿頃。赤穂の義士敵家よ亂入して。目ざす敵を間十次郎が。鎗もて突留めたるを。武林只
七かけつけて。大刀もて斬り伏せたり。さて互よ首とらんとして。評論よ及び。既よ刃傷よ
及むんとするときよ。大石内藏助よからひよて。十次郎よとめさす。只七よ首討たせ
たれば。雙方遺恨なかりしとなり。昔もさることあり。大江朝綱と。小野道風と。互よ手書
の評論して。止まむ。主上の御前よて。勝負を決せんとして。持ち出でしよ。勅して。朝綱の手
書の道風よ劣る事。たとへば。道風の學才の。朝綱よ劣るがごとしとのたまひしゆえよ。雙
方遺恨をりよし。江談抄よあり。かれとこれと。古今文武。雅俗一對の美談なり

曾我のあだ討

新田義貞朝臣記云。曾我十郎五郎が。本望遂ぐるうへり。誠は高名至極なれば。聊その難を
し。但。後輩是を學ぶべからむ云々。若成人の後斯くのごとく。年を送らば。いかなる横死
よも逢ひなば。長く本意を空くし。家の疵をも附くべし云々。とのたまへり。御理は似たれ
ど。祐安殺されし時。一万丸の五歳。箱王丸の三歳なれば。いかよともせんすべなかりし
なり。十八年を経て。二十歳あまりとなりて。本意をとげしなり。夫まで祐經の身はも。兄
弟の身はも。恙をりし。箱根神靈の御守護なりし事。疑ひあるべからむ。

澹閑

和泉式部が澹陰門といふ。題よてよめる歌

「筆もつよゆがみて物のかゝるゝのこれや難波のあしであるらん
とよみし。芦手と惡筆とよて。字音の惡筆を惡疾よかけてよみしならん。筆の碑密反よ
て。ヒツなり。疾の才栗切よて。シツなれば音たがへり。和泉式部の。さる辨へなきはあ
らむ。物の名なれば。せんすべなきの志とさなり。古今集をさく誤なきを。物の名は
芭蕉のむせうなるを。心むせを。とよみ。後撰集は。紅梅のこうばいなるを。鶯の子を。

いゝとよみ。蜻蛉日記は。岡のをるなるを。つゝじのおうしからましとよみ。その外よ
も。又戀を木居といひ。四位を椎よいひかけ。のちの逢初を。藍染よいひかけなど。い
とみだりがとしくなりたり。次手よいふおのしを。蜻蛉日記のつひかけの物の名を證として。愛感のおのしを。嘲弄のをるしとひとつよせ
んとする人。こゝもかしてよもあまたあり。古言よくらさ故よあるべけれど。雅俗存
亡を辨へぬ故なり。萬葉集なる半迦志久と。續紀宣命なる於半加志と。書紀竟宴歌なる於
半加志とあるなど。愛感のおかしなり。又古事記は許志とありて。此者嘲弄也とも。仰天
而咲ともあり。書紀は塙とのみもあり。その外。古く表加志とも表古ともある。皆嘲弄
のをるしなり。愛感と嘲弄と。うらうへのたがひこそあれ。いゝでひとつものならん。後
世よいたりて。雅言は愛感のをるしとあれど。嘲弄のをるしとせたり。俗言嘲弄のを
るしとあれど。愛感のおのしとせたり。雅俗存亡といひしゆこの事なり。さる故よ混び
てひとつとなりしあり。

和の詩
傍廂前篇

和詩といふ名目。一よて其幾三あり。ひとつの詩作して。人の許へ贈りたる。其答の詩を和詩といへり。和の答ふる義なり。二の唐人の作詩を唐詩といひ。日本人の作詩を和詩といへり。これの作者よつきて。唐和とよけたるなり。三の詩をから歌といひ。歌を和詩といへり。おれ作者よかゝらむ。歌と詩とをもて。唐和とよけたるなり。この三くさをおしなべて。和詩といへり。さるを近き頃。むげは物學びせぬ神職書家などが。和詩と思ひてつくれる。えもいそぬつたなき事よて。語格も。口調も。てにをはも。假名も更し辨へむ。もとより歌よも詩よも速くして。戯作文よもそるかよおとれる。禪學の未熟なると。心學の踏み迷ひたるとの類なり

ふるとし

年内立春の題よて。ふるとしとよむ人あり。いと心得たがへなり。春よなりて。去年の事をふるとしとよむよし。年内よの年のうちとよむべきなり。古今集の發端よ。ふる年は春立ちける日よめるとありて。歌の年の内よ春よ来よけり云々とあり。歌の年のくれよよみたるなれば。年の内よとよみ。撰集よ入れらるゝ時。春の部の首なれば。ふる年は云々とかゝれたり。是歌の。在原の元方よて。とし詞の。貫之大人なり。さて年の内といふも。年

のくれのみよのあらむ。正月より十二月までの間なり。同じ古今集よ

「ぬれつゝぞまひてをりつる年の内よ春のいけりも何らじとおもへば

とある。三月末の歌よて。歳暮よのあらむ

鬼よたとふ

人を鬼よたとへていへるよ三くさあり。ひとつの。たとへば。加藤清正侯を鬼上官といひ。服部正成主を鬼半藏といへるなどの。武勇するどく。強力なるなり。又ひとつの。容顏美麗の女の。心ざまあくまでかたましく。そらあしくして。人を憎みそねみ。隣の意なく。憎まらぬを鬼といへり。またひとつの力強く。心ざま悪からねど。生れ得て顔色赤く。目口大きく。齒齧み出だして。おそろしげよ見ゆるを鬼といふ。この三くさの鬼といふ名の同じく。いたく異なれば。眞の鬼のかたちも定りたる事のあるべからず

ゆかりの色

紫色をゆかりの色といふべき故ある事なれば。源氏物語よも。紫上の藤壺の中宮の御姪の縁よつくりたるなり。もと武藏野よ。紫草とも。紫根ともいへる草あまたありしなり。紫草。一名鴉御草。一名紫戻とも云ふ。本草蘇恭云。紫草似蘭香。莖赤節青云々。時珍云。花紫根

紫可以深衣。故名。これをゆかりの色といふ。この草一もと生ひぬれば。三尺ばかりの間の。土の色紫となりて。そのほどりよ生ふる。他草悉く紫色をおびぬれば。古今集より「紫のひともとゆゑよ武藏野の草は皆がらわれとぞ見る上は」
 ともみしも其ゆゑなり。伊勢物語より

「むらさきの色こそ時々のゆゑもなるよ野なる草木ぞわぬれざりける」とある。皆がら紫色をおびたるをいへるなり。さる故に。紫をのみゆかりの色といふよやあらん。されば。源氏もむさし野といへば。かごたれぬとも露分はわする草のゆかりをともし。いかなる草の縁なるらんとも作りたる。其故を所。世の人。さる事も辨言をあらす。よみよみける。尺八の笛。源氏末摘花の巻。例の御あそびよあらず。大ひちりささくそちの笛など。大ごゑを吹きあげつ。たいとをさへかうらんのもよまろびしよせて。手づから打ちならし。あそびかひさうす。さくそちのふえ。和名抄音楽器部より。尺八律書楽圖云。尺八爲短笛。縦向吹者也。ありて。大筆策。尺八をとり。公卿の器よあらず。地下樂人の器なり。た

いこも地下樂人廣庭よてうつ物なるを。けふの例のと違ひて。公卿みづから大筆策。尺八などふき。大鼓をさへ。打ち給ひしなり。どの尺八。短笛

あよ尺八ともひとよざりと
 もいふ。むかひ難波は雁が音
 文七といひし使客あり。自然
 と尺八の妙手よて。せよめて

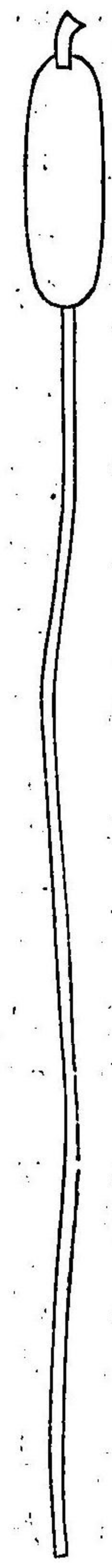


られしゆゑ。手下の使客ども。悉く學べり。後々の吹くこといさし置きて。いさかひの爲の便利よせんとして。一尺八寸よして。節をあまたよして。竹の根さりを切りて。一刀のかかりとす。かくては。短笛の名も。一節切の名義も失へり。むかし本郷の邊よ。年老たる工匠。短笛の妙手よて。我若き頃聞きしことあり。かの一尺八寸の笙竽道具とい。音律いたく異なり。其人うせて後。吹く人ある事をさかす。○古への短笛一名一節切。總一尺八分なり。彼一尺八寸の笙竽道具の尺八。樂器よあらず。今も僧徒の器となりて。本寺さへ出米たり。當時普化僧の托鉢の勸進とされり

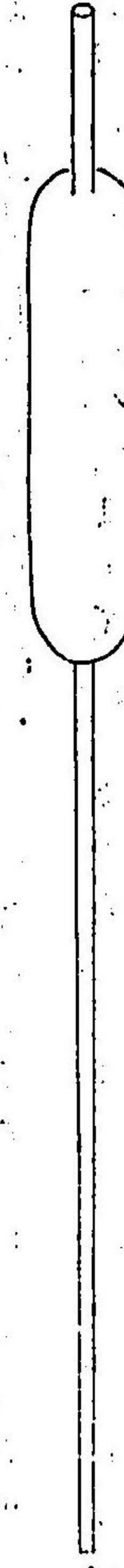
かまぼこ かむやき

魚の肉をすりて。細き竹にぬりたるに。蠟燭のごとく見ゆる。これをかまぼこといふ。蒲の穂に似たる故なり。今の板につけたるを蒲ぼこといひて。實の蒲棒をば竹輪といへり。名

かまの穂



かむやき



かむやき

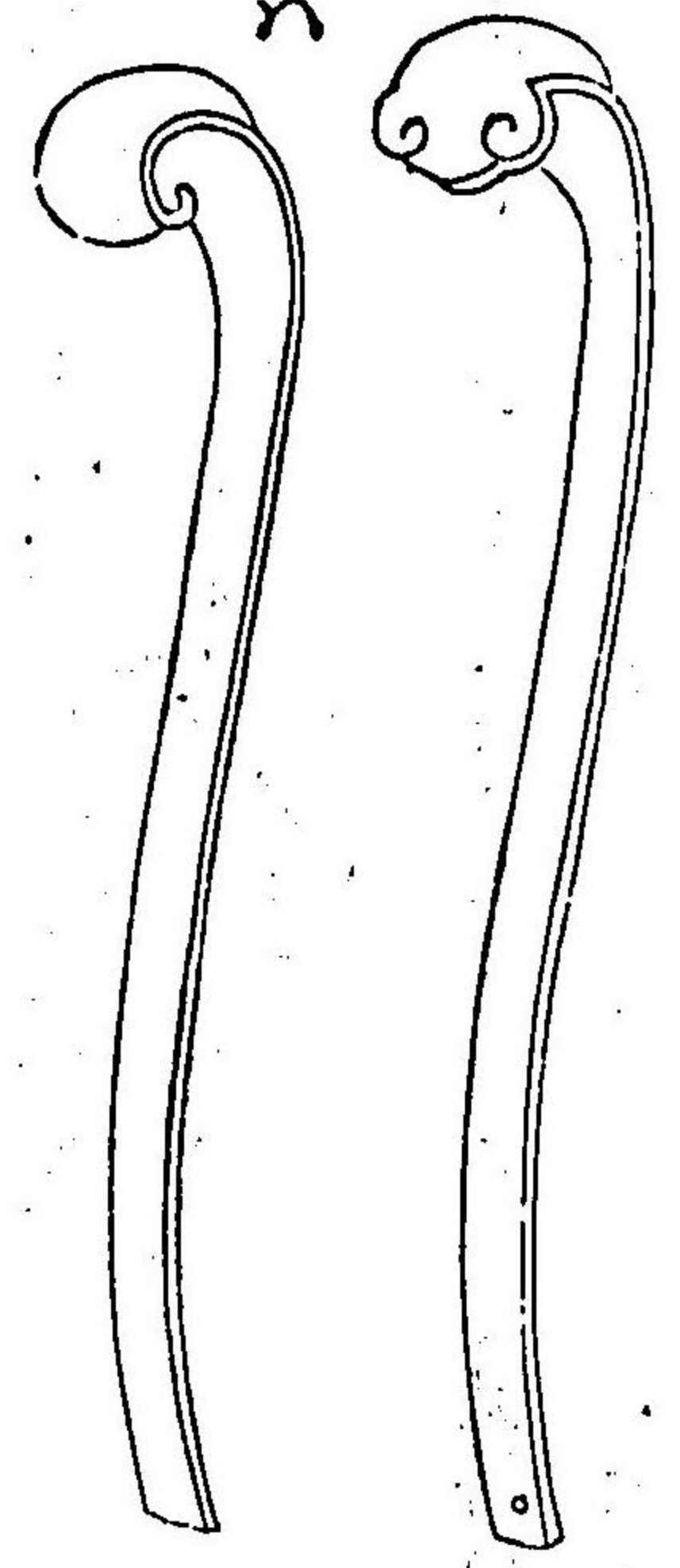


錢を奪られたるなり。又。蒲焼も鱸の口より尾まで。竹串を通して。鹽焼もまたるなり。今の魚田樂の類なり。さるを。今昔より聞きて。竹串さしたるなれば。鱸の袖。草摺に似れど。蒲の穂に似もつかず。名義を失へれど。味の無雙の美味となれり。これにいよしへも遙まされり。わきてこの大江戸なるを極上品とせり

如意

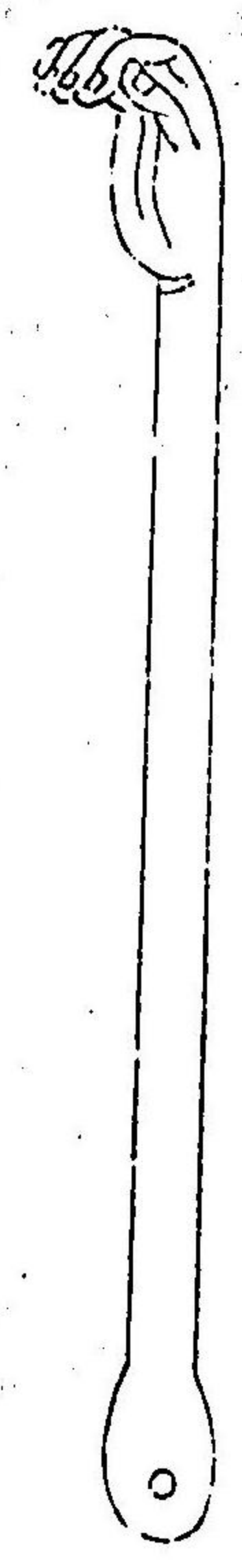
法師のまさぐり物よすなる如意といふ物。佛前へも持ち出で。人よ對面よもち。他へ出づるよも持ち行くなり。そのかたちかゝるさまなるもあれど。もとにさる物よあるべからむ

又の



釋氏要覽云。如意梵云阿那律。指歸云。古之爪杖也。骨角竹木刻作人手指爪。柄可三尺許。或背有痒。手所不到。用以搔爪。如人之意。故曰如意とあり。背のかゆき所よ手のいたらぬを。これよてかけば。意のまゝなる故の名なれば。かゝるかたちよて

後世孫の手といへるが。眞の如意よ



て。法師のもつ所の如意に。人みせのかざりよて偽物なり。外戎の麻姑の爪に。鳥爪の如くよて。又異なり

披風

披風の。堂上方の略服よて。直衣よ似て。入襦あり。上帯なれば。風よ披く故の名なり。袖

傍廂前篇

も短く、袂は、たゞうちくしの女の御服なり、膝より上まで付、裾は、其の裾の裾より、

堂上直衣之圖



さるを、近き下ぐみて、合羽に似て、襟の装束なく、裾の方より紐なく、襟の後の方より涎掛の
どとくなるを附けたるを、披風と號けて、剃髮總髮などの着る事あり。これ披風といふ大い

異にして、座敷合羽といふ物なり。近き頃、總髮剃髮ならぬ月代頭の人にも着るあり。似
つかいしからず、裾めきてよくげい見ゆ。小女の着たるもよくし。年たけたる女の着たる
は殊ににくし

平人被風之圖



法師の酒に酔ひて、放蕩なる事いひちらしさおげるとよくし。若き女の酔ひてたれ
れたるは、あきてよくし。又、若き女の漢籍さへつり、唐様文字書きて、ほこれるもよくし。

年老いたる武士の長劔横たへ。尉たりて。いさかひこのまじげよたけびありくいとよくし。年老いたる女の色めきて。くねりをまめくも又よくし。くすしの大酒大食よくし。吐逆などして。惱むうとましくよくし。晝の蠅。夕ぐれの蚊。書齋の鼠。納戸の盗人。風烈しき時は。近きほとりの火の災いとくよくし

白酒 黒酒

萬葉集十九

天地與久萬代爾萬代爾都可倍麻都良牟黒酒白酒乎

この黒酒の式よりて。常山の灰を入るとも。又胡麻粉を入るともいへり。白酒の常のすめる酒なりといへり。これら誤なり。常山灰。胡麻粉などいへるは。黒酒といふ名よりてのおしはかりなり。又。白酒の常のすみさけなりといふも。せんかたなきのひがことなり。いよしへの荒稻。和稻といひて。荒稻は玄米にて。和稻は白米なり。春きたるも春かざるも。白くして黒くあらねど。玄米白米といへる如く。玄米の酒は黒酒にて。白米の酒は白酒なり。常のすみ酒は。白酒といふべき故なし。いよしへの皆濁酒にて。清酒はなかりしなり。黒酒も白くして。黒くあらねど。白酒は對して白からねど。黒酒といへる事。白

米は對して玄米といふも等し

大工 左官

匠丁をおこなべて大工といひ。壁塗師を皆がら左官といへるが。今の通稱なり。おふけなく僭上なる事なり。職員令に。大工一人。掌城隍。舟楫。戎器。諸營作事。少工二人。掌同大工とありて。太宰府は屬したる官人にて。修理職。内匠寮。木工寮などの屬官なり。されば。大工は。少工の上たる官人にて。匠夫の事はあらむ。又。左官は。いづれの官舎にも。カミ。スケ。シヨウ。サグワンの四階のあるなり。其よし下は記せり。ことなるは。同令に土工司正一人。佑二人。令史一人。泥部二十人とありて。サグワンの官名なり。百官百司ことごとくあり。○神祇官は。伯少大副少大祐少大史○八省は。卿少大輔少大丞少大録○諸職は。大夫亮少大進少大屬○諸寮は。頭助允屬○諸司は。正少大佐少大史○彈正臺は。尹少大弼少大忠少大疏○使は。長官次官判官主典○近衛は。左大將右中少將左將監右將曹○衛府は。左督佐少大尉志○諸國は。守分少大掾少大目○太宰府は。師少大貳少大監少大典いづれも四階は。皆備はりて。文字を私よかふる事あたはむ。近き頃。輕き神職が。不相當の字をつくるは。皆私にて本官よあらむ

九年母

傍廂前篇

神代より日向の小門の橋。今もありて。いと大きくして。味の美なる事。橘柑中の最第一なり。後世よいたりて。密柑。柑子。金柑。柚。橙。枳殼などつきくまじたり来ぬれど。上古の橘の片もしよも及ばぬ。そが中よ九年母といへる。垂仁天皇の御代。田道間守といふ人を。常世の國よつかえされて。時じくのかげのこのみをとよりよせ給ひしを。後世九年母といへる故。御記の九十年春二月庚子朔。天皇命田道間守。遣常世國。令求非時香菓。今いふ橘これなりとありて。九十九年云々。明年春三月辛未朔壬午。田道間守至自常世國。則賚物也。非時香菓云々とある。九十年より九十九年の明年まで。十一年なるをつかえされし年と。かへり来りし年とを略きて。中九年なれば。九年母といふなるべし。母といふこの菓を乳柑といへれば。母と號けしならん。又。九年を久年ともかける。橙を代々といへるよ同じ祝言なるべし。

國初

儒書より外の見し事なき偏屈なる學者。時の將軍の御代始を國初とかける。いふべき誤なり。外戎よて。臣たる者が。君上を弑し。國家を奪ひ。國號を改むる故。國初といふ時節度々あり。皇朝。かしこくも。天照大神御孫の彦穗の邇々岐の命。此國を授け給

ひて。君王となし給ひしより。數萬歳を経て。今日只今もかゝることなく。一日の如し。此後幾萬億年をふとも。天地のあらんかぎり御正統つくべからねば。國初といふ。神代のたゞ一度のみなり。頼朝卿以来の將軍も。私の尊號よあらむ。朝廷より將軍職をも。官位をも給へるなり。外戎よて。私よ國王となる。その上よ定りたる君王なき故なり。

隅田川

武藏と下總との堺の川を。隅田川とも。須多川ともいへる。もとスミダなるを。音便よてスنداといひ。又。略きてスダといへるよて。同じ所なり。たとへばヤムゴトナキを。音便よてヤムゴトナキといひ。略きてヤムトナキといふなど同じ意なり。この川の名。他國の名所を。江戸へ附會きたるなりといへる。中々なる非なり。萬葉集よある隅田川。紀伊國なり。六帖よある隅田川。出羽の國なり。古今集よある隅田川。武藏國と下總國との界なり。隅田川に限らむ。國々よ同じ地名あまたあれば。とかくいふべきよあらむ。更科日記よ定かならぬ記しふり。委しくあらむして書きたる故なり。但し庵崎。待乳山など。いよしへよりありやなしや。いざ都鳥よ事とんと思へど。しることあたはじ

孩子蛇を殺す

昔。我殿のまろしめまゝ信濃國水内郡富竹村の農民。夫婦共。田畑耕作の爲に出でんとて。二歳なる男子をつぐらといへる葦器にいれて。鴨居より置き出て行き。午時にかへりて見れば。小兒のこゝちよげよあそび居たり。おろしみれば。徑一寸むかり。長四尺もやあらん蛇をつかみて。ふりまにし遊び居たり。蛇はとくは死したるさまなり。思ふ人のみぬ間。小兒の血吸しんとて。柱より上り。鴨居よりつたひて。つぐらより入りつるを。何ごころなく。急所をつかみたるなり。首より三四寸下の急所にて。うては忍死ぬるなり。小兒のさる事しらねど。全く産土神の守護し給ひしあらんと。たふとくどおもゆる

小女狼をころせ

是もむかしまろしめまゝ。石見國那珂郡濱田の在りて。あしき狼ありて。狂ひありき。あまた人をなやめし故。夕ぐれよ。人の往来も稀なるを。或農夫十二三なる女子を。酒かひよやりたる。買ひてかへる道にて。かの狼は出合けり。狼は少女をくひたふさんと飛びかゝる。少女のがれんとして。酒器持ちたる手を後まよきし出だして。よげんとす。雙方の勢にて。徳利といふもの。狼の口中は深くいりて。出でも入りもせむ。狼はたけびくひて死したりけり。少女は。酒の器を狼にとられて。せんすばなくなき居たるを。所の者聞

きつけて。家は送りしとなり。彼小兒と。此少女と。東西一對の奇談とやいふべからん。これも神のたすけならん

鈴虫 松虫

當時褐色にして髭長く。腹黄にしてチンチロリンとなくを
 松虫といへど。これいよしへの鈴虫なり。鈴ふる
 音のごとくまこゆれむなり。又。色黒くして首ち
 びさく。尻大にして背をばみ。腹黄白色にしてリ、
 リンとなくを。鈴虫といへど。これ松虫なり。その
 松風の音に似たる故の名なり。おのれ若りし時。
 遠江國秋葉山にて。松枝よさるひなきあるを聞き
 て。あやししく思ひ居たり。その年のくれの事なり。



鈴虫松虫の形状

其後三河國寶飯郡の。小江の松原を春の中頃や
 あらん。夜深く通りつる。松枝よ笛の如き音あるをあやしみ。あむしたちとまりて。聞
 きしよ。風の吹き来る音よまじりて聞こゆ。時よもより品よもより。枝振よもより。風の吹

さまいしよもよりて。まゝある事あるべし。さる故よ。松風の琴の音よるよふと。歌よもよめるなり。たゞ。ドウく〜とふく風の音のみならず。松よ限るべからず。松風よ限りて。琴の音よかよふ。リリリンのひびきあるゆゑなり。チンチロリンとなく。鈴虫よて。鈴の音よ似たり。西川行幸。壬生忠岑の序よ。山の端よ月待虫うるひて。琴の音よあやまたる。また或時の野邊の鈴虫を聞きて。谷の水音よあらがれ云々。とあるよてよくわかつてり。これ真の鈴虫。松虫の差別あり

五畜 六畜

皇朝よて五畜といへる。牛。馬。犬。猿。雞よて。人の家よ畜ひ置きて。人の用よあつれば。産死の穢も。人よつぎてあり。されば。食ふに甚しき穢なり。外戎の六畜。牛。馬。羊。犬。豕。雞なり。是も畜ひ置きて。次第よ殺して。食料よあつるなり。同じ畜よても。大よ異なり。たとへば。皇朝の五畜。下人の部屋よ住めるがごとく。用あれば出で、仕へ。用なければすらすらひをれり。外戎の六畜。重罪人の囚獄よ置かるゝ如く。遅くも速くも。刑伐よ行これんを待つがごとし。

交易の事

諸の外戎國。他國の物を得されば。其國立ちがたき故よ。萬里の波濤を渡ぎ。諸國へ舟をめぐらせり。皇朝大八洲の内。かれよなき。これよあり。これよすくなき。かれよ多く。かたみよとりかゝして。ことよくべきよあらねば。いやしき外戎と交易するは及むざる事なり。皆。其なり出づる鳥獸虫魚草木砂石よいたるまで。居宅。器財。衣服。藥品。食料それらよ備へ授け給へる神のみまごさあり。よくてことよくべきよあらざ。さるを外戎より諸の病疾わたりこし故よ。藥品もらうたりあらざり。驗なしといへる。條理違へり。病疾。異國よりわたりても。人物。皇朝人の性あり。大同類聚方よも醫方也在于我邦也。自神世矣。神國之民。服他邦劑。而何應其惠乎。人應其土地。而稟氣之辭。其土人服其土。宜不可無効也とあるを。是を能く辨へて。近き頃。佐藤定方が奇魂といへるを著したる中よ。海南と北陸との寒暖異なれば。病症の異なる。土地よ生ひ出づる藥草の有無多少とを。よく辨へて記したり

籟荷 生薑

籟荷をメウガといひ。生薑をセウガといへる。俗の音便なるべし。和名抄よ籟荷。米加。薑。久禮乃波之加美とありて。メウガともセウガともなし。同じ形容なれば。籟を米加とい

へるより。蓮を兄香として。妹冠の義よかなへたるなるべし。いづれも香氣ある中よ。まさき蓮の香氣深ければ。兄香といひしを。セウガと誤り。妹香をメウガと誤りしなるべし。皆音便より崩れたるなり。

役行者

役小角。大和の葛城山に岩橋をるけんとして。諸の鬼神を仕ふ中よ。一言主神の形の醜を取ちて。畫のるくれて。夜々仕へ給ひし故よ。小角いかりて。一言主を縛りたりといやしめおとしめし。いとおほけなくかして。妖言なり。さるを。岩としの夜の契も絶えぬべしなど。歌よもよみ。かつらさの神こそさかしくあきたれと。物語文よもかきし。俗説よなづみたるなり。かしくも一言主神の。雄略天皇葛城山に御狩の時よ。一言主神顯身あらし給ひて。御對面ありし事。御史に顯然たり。猪の怒りたるを踏み殺し給ひし強勇大力の天皇も。恐こくおもほして。奉り物など有りしなり。小角如きの及ぶべきならぬ。小角は葛城上郡節原村の土民の子よ。狐をつかひ。妖術を以て。人をたぶらかまへ故よ。韓國連廣足が言上よよりて。天武天皇三年五月。伊豆國大島へ流罪せられたり。

南無

南無の梵語よて。唐に翻譯して。歸命といふ義なり。悲華經よ。決定諸佛世尊名號。音聲也とあり。代辭よ。釋氏稱佛菩薩名號。皆以南無二字とありて。佛號の首よ冠らむる二字なり。さるを。ある日蓮派の寺の住持。あるやんごとなき公よ。南無妙法蓮華經の七字を書き給へと。願ひしかば。則。筆とり給ひて。妙法蓮華經の五字を書き給へり。住持いそく。願こく。南無の二字を加へ給へと。願ひしかば。公の曰く。南無の二字の。佛號の首よかくべき稱とこそおもへれ。書籍名目の首よ書きし例。まろいまだあらぬ。古書よさる例あらば。後學のためよ聞かまほしとのたまひしかば。住持おもて赤くして。いとぞあてて。すべりあり。にげかへりたりとなん。公よくしらしめしつれど。中々よ一寺の住職があらぬもをりし。

壽の長短

垂仁天皇紀細注よ。先皇御間城天皇。雖祭祀神祇。微細未探其源根。以粗留於枝葉。故其天皇短命也。是以。今汝御孫尊。悔先皇之不及。而慎祭。則汝尊壽命延長。後天下太平矣云々。これ大國主神の。垂仁天皇よ御さとしの託宣なり。此天皇の。古事記よて。百五十三歳よて。書紀よて百四十歳なり。御父崇神天皇の。古事記よて。百六十八歳。書紀よて。百二十

歳なり。いづれよしても御父子とも御長壽なるを。御天帝を短命とのたまひ。御子天皇を長壽とのたまひし事。心得がたし。思ふよ。天帝は二百歳に及び給ふべきを。ちよめ給ひ。御子の尊。百歳にたらず。崩御し給ふべきを。のむし給ひしならん。神の御心。とかかれぬものなり。神慮のみまごさ。天皇の御ちからよも及むせ給ひぬものなり。既この後仲哀天皇。神の御諭を疑ひ嘲けり給ひし故。神々いかり給ひて。汝帝のよさせる國を得給ふまじ皇后の胎中よまします皇太子得給ふべし。汝帝。此國は用おければ。早く黄泉は行幸し給へと。さとし給ふよ。忽ち崩御し給ひしよし。記よも紀よも顯然たり。又齋明天皇も。神罰よて崩じ給へり。

おもしるき。おもしるき。おもしるきといふ。見るものさく事につけて。心は深くいりてよろこむしく。うれしく思ふことよのみいへれど。さのみよてのあらむ。うき事かなしき事よても。心よふりくしみて。忘れがたくたへかたき時よいへる詞なり。齋明天皇紀四年五月。皇孫建王八歳薨。今城谷上起殯而收云々。冬十月庚戌朔甲子。幸紀温湯。天皇憶皇孫建王愴爾泣。乃口號曰。一耶麻古史底于瀨。倭留騰母於母之。櫻根伊麻紀能。离知橋。倭須羅度麻自耳。

この御歌。大和より紀伊へ山をこえ。海あたりて。ゆけどもあこれよあつかしくおもしるく思ふ。今城山の建王を葬りたる所。忘れがたしとあり。すべておもしるきと。心よふかくしめぬれば。そのもの其かたちそのさまの。目前よ見るがごとく。深くしみぬる故。面著の義なり。さるを。古語拾遺。天石門ひらき給ふ所。衆面皆明白也といふを。おもしるきよ取りなして。上天初時。衆俱相見面皆明白云々と。いんたための推説なり。

霞の時雨

春の霞と。冬の時雨と。江戸よて見る事なし。山多き國よて。春よなりて山を望むよ。うすく縹引きたへたらんとく。山のたぐをまひ。木立など見えながら。定かよあらぬが。うすみどりたちたり。さる故。歌よも淺緑霞といよめるなり。朝日夕日のうつろふ時。うすむらさきさだちて見ゆるなり。江戸よてをかすみても見えむ。冬のはげれも。山多きところよて。山のあひより雲立ち出で。俄に雨ふり出づるかたよしより日影さして。雨雲のよまよめり行き。又跡よりくもり来て。雨ふりぬるが。やがて暗れ行くも度ななり。ふりみふらむみ定めなき物なれば。歌よさるよしよめるなり。江戸よては十月よても時雨よあらしむ。穢の長雨日數ふるなり。

六月嘉定の式。重き事なり。さるを。庖丁書録。六月十六日嘉定あり。近世世俗申し傳ふる。室町家大樹のとき。六月納涼の遊の爲。揚弓を射て。かけ物とし。負けたる者。嘉定錢十六文を出だして。食物を買ひて。勝ちたる者をもてなすなり。嘉定と宋の寧宗の年號云々とあれど。師翁貞丈大人云く。室町家年中行事の書どもよ見えをといわれたり。師翁は。京都將軍代々の近親なれば。舊記悉く所藏せらる。嘉定の實の傳。元龜三年六月十六日。遠江國御方が原羽入八幡宮へ御參詣の節。社中にて表し嘉定通寶。裏し十六と。鑄たる錢を拾ひせ給ひて。諸軍示して。嘉定はよろこびを定むるなり。十六の當日なり。勝利の瑞なりとのたまふ。時よあひよあひて。大久保藤五郎六種の菓子献上せんとて。御旅館へ持ち行きしを。御社參のよし聞きて。この所よて奉じしなり。益御歡ありしとなり。是正説なるべし。足利の遊興ごとき後世までの重き大禮とし給ふべきなり。藤五郎は足し鐵炮疵ありて。歩行なりがたき故。御菓子司となりて。本白銀町の邊は地所給へり。大坂落城の後。嘉定の京都よて祝ひたまひ。八朔は江戸よて祝ひ給ひし御吉例なりしを。慶安三年より一度中絶したるを。またおこしたまへり。さるを。嘉定嘉祥として。仁明

天皇より始まるといひ。また。大寶元年六月十六日宴を給ひしより。天武天皇より始まるなど。まぢりいへる。みな。推量の私よて取るよたらす。○大冬。冬。の。な。で。て。し。と。○山。古。よりあるなでしこと。野山はのづから生ひ出で。すずねの花咲けり。夏の始は咲き初めて秋を経て。冬までも咲けり。萬葉集よおてしこの花あまたあるはこれなり。古今集のころは。異國より種々傳へたるなり。もとよりのをやまとなでしこといへり。庭ははくりたつる異國なでしこと。早くかれりて。野山は自然生ひ出でしもとよりのの。ち長きものなり。後撰集は十月ばかり。常夏折りて。贈りて侍りければ。○冬。なれど。君が。垣根。咲きぬれば。うべ。常夏。戀ひし。かりけり。また。定家。卿。も。○霜。さ。ゆ。る。あ。した。のは。らの。冬。かれ。よ。ひ。と。花。咲。ける。倭。な。で。し。こと。○更。科。日。記。よ。も。秋。の。末。よ。も。ろ。こ。ま。が。原。よ。大。和。な。で。し。この。咲。きた。る。を。お。か。し。が。り。し。事。あり。これ。の。もと。より。皇。朝。よ。ある。な。で。し。こと。なり。後。は。異。國。より。傳。へ。し。の。瞿。麥。と。も。大。蘭。と。も。石。竹。と。も。洛。陽。花。と。も。數。名。あり。

古今集の作者の中。女の名籍アノナまた寵チヨウ又レフとも三處ばかりありて。異本ま
ちくしてまればたま名なり。さる故。古人考へ得たる事をさかす。思ふ。この女の父
か。夫か。兄る。内藏寮の頭。助。充。などの官の時。内へ参りたる女。よび名を内藏とい
ひしを。草書にて畧とかさしを寫しひがめて。上の三字のごとくなりしならん。この女の
常陸國へまかりける時。藤原公俊よみてつゝかひしける時の歌に

朝まげ見へき君と。したのまね思ひたちぬる草まぐらなり

とある二句は公俊の名あり。四句よきして行く所の常陸の國名あり。結句よみづからの
名を入れしなるべし。すべて。女の名なり。さうぬもあれど。大かたは父か夫かの官名を
よびるゝが多し。小兒もまじりたる百人一首の中なる女の名なり。

- 伊勢の伊勢守繼隆の女なり
- 右近の少將季繩の女なり
- 和泉の和泉守道貞の妻なり
- 大貳三位の太宰大貳成章の妻なり
- 赤深右衛門の赤深時用の女なり
- 小貳部内侍の和泉式部の女なり
- 伊勢大輔の伊勢祭主輔親の女なり
- 清少納言の清原元輔の女なり
- 相模の相模守公資の妻なり
- 周防内侍の周防守繼仲の女なり
- 紀伊の紀伊守

重經の妹なり。あゝる例あまたあるを思へば。内藏寮の頭。助。充。などの女か妻かのよび
名なり。いかにおもはるゝなり。

聾

加藤千蔭翁の月次會曰。我若かりし時。季鷹。縣主と安田身弦と三人おて行きけむ。何
くれと物語りしける中。千蔭翁のいづく。近頃の本居宣長こそ。金聾になられたといひ
けむ。傍よて聞きて斯弦がいづく。宣長を假名聾とのたまふ千蔭先生は。真名聾よと
いひけれど。千蔭翁よこえむ。人々の打ちたふれてとらひぬ。季鷹。縣主よこえぬ
こそをかじかりし。又或やんごとなき君の御まへまで。人々物がたりしける時。守の
殿のたまはく。近頃季鷹が狂歌よ
「我耳の速くなりし年をへて聞えぬ歌をよみむいか
とよみし。いとちもじろしとのたまひけれ。御まへに居たるくすし其の年老いたる
が。さばかりの歌のれもよみ侍るなり。さまでほめさせ給ふべきよあらをといへば。彼
殿きらげよめとのたまふ。彼くすしがとりあへむ
「我耳の速くなりし年をへてきかぬくすりをもちも報いか

といひければ無禮。むらいのつみをもとがめ給ひて。こよなう入興し給ひけり。斯くいふ我も今の耳遠し

坊主

坊主の寺院の住持にて。一坊の主といふ義なり。その外の衆僧の同宿といひて。坊主といひて。文治元年十一月廿二日。前伊豫守源義經吉野山の雪を凌ぎて。潛り多武峯に到着せし。南院の内藤室の坊主十字坊といへる大惡僧義經を賞翫したるよし。東鑑あり。これ住持を坊主といへるなり。また。同二年三月六日。大衆蜂起より。其所より山即の姿となりて。大峯に入らんとする。件の坊主の僧。義經を送りたるよしあり。これ住持みづから送りたるなり。衆徒は送りしめたるよしあらむ。然を當世の法師のさらしもの。醫師。茶道。俳人。遊人。隱居に至るまで。剃髮の人の悉く坊主といへり。甚しき歌かぶりたる無宿をも。乞食坊主。宿なし坊主といへり。一坊の主にて宿なしの名をかじ

やよ

古今集壬生忠岑の長歌の中云く。「これよとられる私の老の數さへやよければ云々とあるやよ。いかなる義とも定かなる釋のなし。或はやよの弱きにて。年老いてかたろへたることといひ。或は俗言のよけいといふ義なりなどいへれど聞こえがたし。故思ふよ。やよ。彌多の義ならん。イヤの音おのづからオホのかしらよおひうつりて。ヨとなりしなりオのヨよかよふべき音ならねど。連聲よひかされて。おのづからうつりたるなるべし。三月の彌生なるを。ヤヨといへると同じ格にて。オのヨよかよねど。ヤオの反ヨなれば。おのづからうつりて。さなりしあらん

延齡のこのまじきもの

高貴の御威勢も。萬箱の金玉も。ちから及ばざるの齡なり。我賤しく貧しといへども。高位大祿の貴人も。財寶充満の富人も。親しくむつべら。八十過ぎても猶病なく。まじかなる故なり。命よまさる寶あるべからむ。極樂上品の臺をむねとする佛書も。大智度論に。説滿世界寶。無有直身命とも。一切賢中人命第一。為命求財。不為財求命とあり。吉田無好法師が。人の四十よたらでまぬることめやすけれといひし舌のかまぬ程。命萬金よりも重しといひしこそ。真心なれ。歌よこそ露のあだものとも。まよやすじなどよめれ。寶の長くもがふと思ひぬ人のひとりもなし。されば。安心決定して。上品上生の位を手取りたる如く思へる名僧知識も。病疾あれば。醫師を招きて。藥を乞ひ。死をのがれ

んとするよあらむや。おれ有情の本意あり。似顔繪。いと古くよりあり。文徳實録。百濟朝臣河成在官中。令或人喚從者。或人辭以未見容顏。河成一紙。圖其形體。或人遂驗得とあり。源氏物語末摘花卷。髪長き女をかき給ひて。鼻は紅をつけて見給ふ。云々。是は常陸姫官の似顔をかきたまひしなり。後世よいたりて。爰川師宣。西川祐信など名人なり。其のち勝川春章。鳥居清長。また近米歌麿。豊國などもよくかけり。當時は若き男女などの姿をかくし。肩をまぐぬ。肘を膚よよせて。寒げよちとみたる姿よかけり。さる故。衣冠の官人も。甲冑の武士も。年若く容顔よきをば。みあさるさまよかけり。寒げよちとみあがりて。身をがらしく見ゆるがとやりものなり。

坂上是則の歌。そのむらやふせやよおふる常木のありとみえてあぬ君のを。此歌よりて。源氏常木巻。つくりたるなり。其原伏屋。信濃の國にて。美濃の國界をり。遠くで見れば。常を立てたる如く高く見え。近くよりて見れば。いづれの本ともをかむ。されば。ありと見えて。あぬよしといへり。我幼き頃。三河國矢矧の大橋の上よりみれば。西の方よ大きな常木の如き木あり。里々の云々。彼の伊勢國朝熊山の木あり。といひ傳へたりとぞ。幼き頃よ見聞して。今よ忘れぬ。いとよく暗れたる日あらでん見えむ。街道行程三十餘里あり。むかし景行天皇の御代。筑後の御木薈。大壁木ありて。朝日よ肥前の杵島をかくし。夕日よ肥後の阿蘇山をかくまよし書紀よあり。仁徳天皇の御代。免寸川の西よ大木ありて。朝日よ淡路島よ及び。夕日よ高安山を越ゆるよ。古事記よあり。又。肥前佐賀郡よ。大樟樹ありて。朝日よ杵島。蒲川山をかくし。夕日よ養父郡草横山をかくし。夕日よ大倭島根をかくすとも風土記よあり。近江國栗太郡。日よ淡路島をかくし。夕日よ大倭島根をかくすとも風土記よあり。近江國栗太郡。大柞木ありて。朝日よ丹波國よ。夕日よ伊勢國よ。今昔物語よあり。さる事あまよあらむ。我若かりしころ。紀伊國熊野。大榎ありて。二またよ諸木竹おど數十株生ひ出でたるよし。紀の殿より御申し届よなりて。繪圖さへ未たるを見て人々あまねくまゐる所なり。

師翁の玉勝間。古今集の「月夜よし夜よしと入る告げやらば云々とある。月夜よし月夜よしとかさねて講ぶべきを。五七言のまらふよとのへんとて。略さてかく講ひしなり。催馬樂の「あづまのまのあまりの雨ぞよ云々も。あづまのあづまのとのさねて講ぶべきを。是も五七言よとのへて。かく略きたるなり。和名抄は四阿と雨下とあけて。舉げられつれど。この歌のそれと異なるよしこれしを。石原正明が隨筆よ。月夜よし夜よし。月よし。夜よしといふ様にて。あづまのまの。その如く。東屋の軒よも立ちぬれ。まの軒よも立ちぬれて。まどけなきが講の本意なりといひし。歌の本意をよくも辨へざる故なるべし。清少納言集よ。

「よするなよあよといひしはくれ竹のふしをへたつる數よど有りける」といふも。忘るなよ。よするなよ。とかさねていふべきを。五七言よとのへんとて。略さてよするなよあよとよみしなり。外よなよといふ物なし。

菊

菊は神代より皇朝ありむ。いやしげよてめづべき花よあらねば。歌よよみし事

なし。今も野山よかのづから生ひ出づる。俗よ野菊といふ物なり。神代紀よ菊理姫といふ御名のある。菊を久々といひし證なり。その花形括りよせたる如くなればなり。水干直垂などの括綴くわくづいを菊とちといへる同じことなり。名義と字音と。似たる故よ。和名抄よ菊四片字苑云。菊舉竹反。本草註云。菊有白菊紫菊黄菊。和名加波良與毛木。一よ云。可波良於波岐。日精草也とある。外戎の菊と混雜したるかきぶりなり。括りのうつりたる通言よて。字音と等しく聞ゆ。菊の字音は。舉竹反とも。居六反ともありて。全く等しくさこゆれと。クハリクハルクハレルなどたらけ。活生の用言なり。字音は死物よて。うごくとあたを。似よりも大異なり。當時家々の庭よ生かしたつる種々の菊は。野山よかのづから生ひ出づると異て。今京以米の物なり。本朝通記よ。仁徳天皇七十三年。始自唐獻菊種とある。何を證よいへる。あつかなし。この天皇の御代よ。さる事古事記よ。なし。書紀よ。六十七年より。八十七年までの事をければ記され。のよもかくよ。奈良以前よなし。平安以後よたりしこと。六帖よ紀貫之

「古躰をよめられて咲ける菊の花たひらるよこそ句ふべらふれ

このたひらか。則。平安の都なり。奈良以前よたりな。萬葉よあるべきなり。後水尾

天皇の...
「おらの葉のえらびもれし菊の花のこれる梅の恨やのちる

とよみ給ひし。萬葉集は菊花なきと。外戎の楚辭は梅のなきとをのたまひしなり。されど今の菊の萬葉集の頃はいまだなかりしなり。梅は楚辭にあるべきをもれたるなり。もとよりなきとありて。もれたるといいたく異なり。...
人の世もあるをながらぬるよし。長存の字。又。存命などの字をかく。その義なきやと問ふ人あり。答へて曰く。幾のそのよしなり。言は長經なり。おがらへまがらふなど。ハビフへの中のフへよかよふ言にて。長經の義なれば。則。長存。存命などの字よりし。長存。存命などの字は。義訓にて。言の意は。長く世よある事なれば。長經の字の意にておちりける。

髮疑を墨にて深む...
更黑耶。對曰。臣用藥染之故也。上曰。欲何如。曰。臣覽鏡見髮白。竊傷年且暮。盡忠於陛下之

日短矣。因深之。使玄而拔交心不異。時音耳。上大善云々。これ理屈だてをいへん爲の人みせのかざりなり。髮疑白くとも。壯士よかとりしと。忠勤せんが臣たる者の本意なるべきを。白髮を黒くぬりかくし。うらべをかざる。好色の外にいらざることなり。さるわざもたりとて。老衰の壯健よかへるよもあらむ。忠義心の益よもあらむ。人おどろかじのみなり。齋藤實盛が。髮疑を墨にて深めし。木曾義仲の討手に向ふ時。義仲諸軍を示して。我幼少のときよ。既深きるべきを。實盛が情にてのがれたれば。再生の大恩あり。必。討つべからむ。髮疑白き老武者と實盛なれと。命令ありしことを聞き傳へて。かく墨にて深めて。若き出て出陣したれば。手塚太郎光盛は。實盛を若武者と見て討ちとりしを。樋口次郎兼光をして。水にて洗われしかば。白髮あらわれたるよし。是れ人みせのかざりあらむ。忠なり。勇なり。智なり。信なり。義なり。うらべをかざる偽賢人と同年の歳。あらむ。...
の...花...
いよしへ水もても草もても。今日のみまへ花の咲きたるを見ながらよめる。た々花とのみよみし歌。萬葉集よあまたあり。古今集の頃は。さくらをむねと花といへれど。中よ

「花の鏡となる水の云々。」流るる川を花と見て云々。「花どむかしの香よ匂ひける。これらの梅を花とのみよめり。又。「花見つゝ人まつ時の云々。是は菊なり。「たなびく山の花のかげかも。これに桃さくら。藤。山吹。つゝじなどおしなべて花とのみよみしなり。後世よいたりては。花といへば。題も歌もさくらは限れり。いかよも打ちまかせて櫻を花とのみいれんよ。憚るべきよあらむ。花てふ花の中よすぐれてめでたくたけひなき花にさくらなり。かばかりすぐれたる花なき外戎の國がらいやしき故なり。鶴林玉露。洛陽人謂牡丹為花。西都人謂海棠為花。尊貴之也といへる。事のかけたる國故なり。牡丹。海棠などこちたぐいやしげよ。くらふべきよあらむ。たとへていひ。容貌美麗の女官の打ちとけたる姿と。厚化粧の俳優人の粧ひたる姿とのごとし。かづを

和名抄。鯉。加豆乎。式文。用堅魚二字。大鯛也。大。曰鯛。小曰鯉。鯛。鱈魚也。これも皇朝に限りたる魚よ。外戎よなき。中山傳信録。佳鱈魚とある。加都乎を誤りて。他魚は號けしなるべし。今清國よて鱈魚といへるも。あらぬ魚なるべし。景行天皇五十三年八月。伊勢行幸し給ひ。それよりめぐりて。十月。上總國安房の浮島宮よいたり給ひける。御供を

る。磐鹿六雁命。角弭弓を以て。あまたの魚をとりし故。頑魚カウナシと號く。鯉は堅魚といふ魚なり。羊中行事秘抄。あれど。記紀よは鯉の事なし。書記よ伊勢より上總へめぐり幸ましことありて。白蛤を取りて。六雁命は贈をつぐらしめ給ひしことのみあり。鯉は上古よりありしかど。生よてはくはす。皆乾して堅くして食ひし故。堅魚の名をおほせしなり。延喜式。あまたあるも。皆乾して堅きなり。鎌倉の頃。かつぐ生よてくふ人ありしさまなれど。今もいら人より先。初鯉食のんとあらそへり。正饌よこそ奉らね下賤最上の美味となれり。

神の御姿

神の御姿を畫く。恐るべく慎むべき事なり。人の目よ見え給ぬ故。隱身といふを。略きて神といへるなり。天地の始。天津神たちの。獨神成りまして。御身を隠し給ひまことあるよ。御祖もなき。おのづからなり出で給ひ。其處よまします他神の御目よ見え給ぬぎりし故なり。人の世となりては。いづれ神も其所よましくながら。人のぬ見え給ぬ故。おしなべて神といへり。神の名のみよ見えねば。なしと思ふがあらぬなり。たとへば。簾の中より。主君の見給ふをまらさ。廣庭よて下部が不敬のわざを始すもの

なり。まれく人よきとして給ふ事ありて。御姿あらはし給ふ事おれだ。或は老翁童女などの姿と見え。人の大蛇猛獸など見えて。真の御姿の見ることをあたはず。但人代よ及びて。高徳賢才の人。忠孝武勇の人など。一社の神となりたる。存生の時の趣もて。畫んよあしき事なからず。神代の神いかよともかくべきやうなし。

ずりの街道の盗賊と思ひ。はたどの旅の宿をいひ。こりの物を入る。組籠なりといふ誤なり。和名抄に籠。説文云。竹篋也。須利。筥。唐韻云。飼馬籠也。波太古。俗用旅籠二字とありて。今の世の両掛挾箱。或は柳ごりといふ物の類なり。又。骨柳の字に附會して行李の字なり。旅具といはらさず。入のことなり。欽明天皇記。行李者百姓之所懸命とあり。左傳。行李注。使人也とあり。資暇集。行李誤作李。李古使字とあり。かくれば。行李よあらで。行使なるべし。さなるを旅具の名とせしむ。書言故事。行李人速行。必有行李也とありより誤りしなり。無盛集。旅人の間。盗人よあひたり。

此すれだわ。旅人の衣服器財を入る。箱。あるひに組籠なり。空しく敷なれば。盗人を

ち早く外々行き給へとなり。山のとねとぬ。即。盗人をさしていへり

梅津長者所藏畫卷



行 使

梅津長者所藏畫卷... 行 使... 籠... 持 ち だ ぶ る 所... 行李の類... 旅人の間... 盗人よあひたり... 梅津長者所藏畫卷... 行 使... 籠... 持 ち だ ぶ る 所... 行李の類... 旅人の間... 盗人よあひたり... 梅津長者所藏畫卷... 行 使... 籠... 持 ち だ ぶ る 所... 行李の類... 旅人の間... 盗人よあひたり...

冷世俗の内裏離といへる。冠服の姿なる故よおしはかりもて。内裡といへるよつきて。或は神祇天皇。神功皇后として。男女と次第をたて。また。神功皇后。應神天皇として。女

男と次第をたつる。皆據もまほ僻事なり。誰の姿といふことなく。只。男女の姿なり。源氏姓葉賀巻。紫の上。よき雛よき衣させて。源氏君と號け給ひし。其時よりての事なり。當世少女のもてあそぶ紙人形。みづからつくりて姉様と稱するが。即古の雛なり。同物語。十よあまれる姫君のひあそびせぬよしひしも。今世の紙人形の事なり。いよしへも當世の紙人形の如く。常の物にて。三月の限らむ。紫の上の雛あそびよ。いぬきといへる少女が。雛の屋こぼちたる。正月元日なり。ざるを。三月初己日。身源の枝あり。雛形の紙にて。身のわらへして。川へ流を故。なでもものとも。形代ともいふ。同物語東屋の巻。

「見し人のかたしろならば身よそへて戀ひしき瀬々の撫ものよせん

とよみし。三月上旬の己日の枝をよめるなり。そのなでもの。少女遊びの姉様の雛と混じて。三月上旬の己日の物となり。又。三月三日の重三と。上巳と混じて。ひとつまなりたるなり。外戎にては魏晉の頃より混じたるよし宋書あり。今の三日の己日ならでも。上巳日といふがならしなり。但シヤウシの日を音訓まじり。シヤウミと唱ふるの拙し

江戸人の勇氣

千早振神代のまよて勇氣おとろへざる。江戸人のいきほひあり。いみせき火のあらびよもおもてもふらむ。赤裸となりて火中よはせ入り防ぐありき。武くいままじき事。いづれの國も聞き及ばず。又。人とあらがふ時。ありあふえもの打ちあひて。いきかふいきほひ。おもてむくべくもあらず。ぞいよしへよりのならしなり。既よ勳業集。鶏がなく東男の出下向ひ。かへりみせすて勇みたる。武き軍士とねぎ給ひ云々とよめり。また。續日本紀神護景雲二年九月壬辰云々。兵士之設機要。是待對敵臨難。不惜生命。習戰奮勇。必爭先鋒云々。又。同九年の宣命。曰く。東人の常。いへらく。頼よの箭の立つとも。昔よの箭の立てすといひて。君を一心をもて。守護ものぞ云々。とのたまへり。その猛烈なる壯士の多き。いづれの國も聞き及ばず。賤さたとへながら。むかし下總國成田郷市川村。堀越重藏といへる俠客。江戸よ出で。慶安四年辛卯。男子をうめり。これ初代市川團十郎なり。延寶三七卯年五月。本挽野山村座にて。曾我五郎時致の役を廿五歳にて勤めたり。是荒事の始め。江戸人の心よかなへり。それより後。荒事なき狂言の見る人なかりしあり。おのづから勇氣備りたる國風なるが故なり。

千早振神代のまよて勇氣おとろへざる

千蔭大人の別荘にて。庚申祭の夜。季鷹大人を招かれて。千蔭翁のよめる歌

「食物も女も好ける季鷹の得ざる物こそ酒はあけりけれ

とあるは。季鷹翁のかへしよ。...

「有らんと千蔭に見ゆれど蘆若の江去舟とや速さかふるらん

とはまれたり。この元真集よ。...

「難波湯とげど小舟の蘆若の江去程こそ久じかりけれ

とあるをとられしなり。...

神位。...

いよし。郡縣の頃。國々の天社小社の神々へ位階を授け給ひし。神の御位よりあら

す。神社へつけ給へる位田にて。則。神領なり。一位は。現米二千石。二位は千五百石。三位は

千二百五十石。四位は六百石。五位は三百石なり。折ふれで位階す。み給ふ。位田をま

し給ふ。爲なり。後。封建とありて。神領御朱印にて定め給ふ。位田の加増なき故

は。位階の昇進もなき。さる故。大社舊社も。三位四位などの。よて止まり給ひし。もあ

またあり。さるを。近來の名もなき小社。また私に祭祀する神をみたり。正一位と稱する

が。いと多し。階上なることなり。...

一筆。...

師翁の秋草追加。書状の發端。一筆とかく事。細川幽齋侯の書札抄。一筆と相認め

候事。いそがしき取りあへ。又申さるてか。なる事を。いそがしき書につけて。つ

はす。おの。一筆にて用の相とのふことをいふなり。おしたて。つか。書状。一筆と

相認め候。其餘なきよし申し侍る云々。貞丈曰。今世態度もたる表向の状より。必。一筆と

書く。是。いよしへ。と。か。なり。云々。彦磨云。いそがしき。外の事を。か。た。た。用の

事のみ一筆かく。し。の。し。る。し。なり。當世。數箇條の用向。よ。ても。始。一筆。啓上。とか。ぬ

は。な。じ。また。急。用。も。なく。た。安。否。伺。ふ。のみ。無。用。の。長。文。も。始。一。筆。と。あり。當。世。一

統。の。な。ら。し。と。なり。た。れ。俗。事。も。ふ。れて。用。ひ。さ。る。中。々。よ。か。た。く。な。異。様。な。れ。は。

用向。と。の。ひ。か。ぬ。る。もの。なり。...

暮目。...

暮目の。...

又。鳴。音。暮。の。聲。も。似。て。十二。朝。子。と。つ。れた。音。な。れ

は。妖。怪。お。と。る。と。い。へ。る。な。ど。の。腹。を。抱。さ。て。笑。ふ。堪。へ。る。暮。の。鳴。音。は。調。子。あ。る。べ。か。ら

...

...

...

...

む。暮目鐘も樂器にあらざれば。調子よかといらむ。十二調子の。壹越。斷金。平調。勝絶。下無。雙調。鳧鐘。黃鐘。鸞鐘。盤涉。神仙。上無この十二にて。音樂の法なり。妖怪退散の論に及ばざる事なり。暮の一字に因じて。あらぬひがごとをつくり出だせり。暮目の略語の假字にて。響目なり。天工開物佳兵篇に。弧矢章云。響箭。則。以寸木空中。錐眼為竅。矢過招風。飛鳴。即。莊子所謂嘯矢也。これ響目なり。鐘もかり字にて。名義に。神振箭なり。カミフリヤのミを略ミリヤを約めたるなり。

墨引筋

正月十五日。武家の門に松筋に墨にて。十二筋横に引きたるを出だしかく。年中所用の御かま木の意なり。天武天皇四年正月。中百寮諸人初位以上進筋とあるが始にて。雜令に。凡。文武官人毎年正月十五日。并進筋長七尺。以二十株為一楯。また。延喜主殿寮式に。年中所用御新湯殿御料一百八十荷。御匣殿御料七十二荷。御沐料一百八十荷。御脚水料二百四十荷。御皮料七百八荷。儲料二百荷。中宮准此御糞料五荷。その外にも。江次第一年中所用御新司並五畿内國司供進。また。儀式帳に十五日。彌宜内人等御寗木六十荷奉進などあり。年中所用の意もて十二筋墨引として。十五日門の左右に置くなり。因ある年より。十三筋引く

御家もあり

まつらき上姫の石となりたる

大伴狹手彦をから國へことむけよつかにされし事。書記にあり。妾。佐用姫わかれをよしみて。ひれふりしこと萬葉集にも。かの國の風土記にもあり。夫をしたはて石となりし事。の據なし。按るるに。かの風土記に舉鞍招。因以為名とあるに。鞍を舉げて振りし故に。其山鞍振峯と號けしよしなり。為名といふ二字を。為石と見誤りて。暮夫石の故をつくりしなるべし。

鎗

鎗の後世の物なりといへど。名目こそ後なれ。其器は神代よりある様なり。時代のうつろひよしたがひて。便利よまかせ。制式つきよくかたりこそすれ。もとの神代よありし天のぬほこ。八千矛。嚴矛。八尋矛など同じ類なり。やうといへば別物のごとく思ふべし。同物なり。むかひさまよつてやる故に。ほこをやりといへるなり。つるきをたちといへるも断ち切る故の名なり。やうといふ名目。太平記が始なり。卷二十五の伴吉合戦の條に。其次一人。是も法師武者たけ七尺あまりもあるらんと覺えたる。阿間了願と名のり

て唐綾威の鎧は小太刀をさして柄の長さ一丈をかりし見えたるやりを馬のひらくびよ
 引きをへてすこしも擬議せむ。かへ出でたり云々。同卷三十四。鹽谷伊勢守あまり深
 く長進ひして馬は矢三筋たち。鎧まで二處つかれければ云々。同卷三十七。細川相摸守
 清氏軍評定の條。大和。河内。和泉。紀伊の國の官軍の蹴立となりて。一面は楯をつきた
 て。楯のかげは鎧長刀の打物の衆を五六百人づつをなして云々。これらおやりといふ名
 目の始めて物に見えたるなり。其器は神代よりある梓にて。とともものよあらぬのて

單物 帷子

當世は絹。木綿など裏なきを單物といひ。生絹。麻などの類を帷子といひて。着る時節も
 差別あり。さるべきことよあらぬ。すべて裏なき衣は皆單物なり。ひとへなるが故は片と
 いひ。風よひらぬ故にひらといへる。よて同じものを。浴衣をゆかたといへるも。湯帷
 子の義なり。頂上の領巾も。甲冑の母衣も。軍器の旗も。魚の鱗も。鬘も。ヒラの轉語にて同
 義の名なり。ヒラメクハタメクなど同言なり。

桶 箱 箱の取

或人云く。桶と箱とに互に文字をあて違ひたるなり。桶は竹もてしむる物なれば。竹は従

ふべし。箱は木もて造るなれば。木よしたがふべしといへり。これ字をのみしりて。其器の
 もとをじらぬなま

桶大

種々あり

麻笥

麻を織み入る。器は
 て。麻笥といふ槍の曲木も竹も

箱

物なれば。竹の器は

葛も

あり

らぬ。箱は木なるも。

竹よてあみたるも。葛

もて組みたるもあり

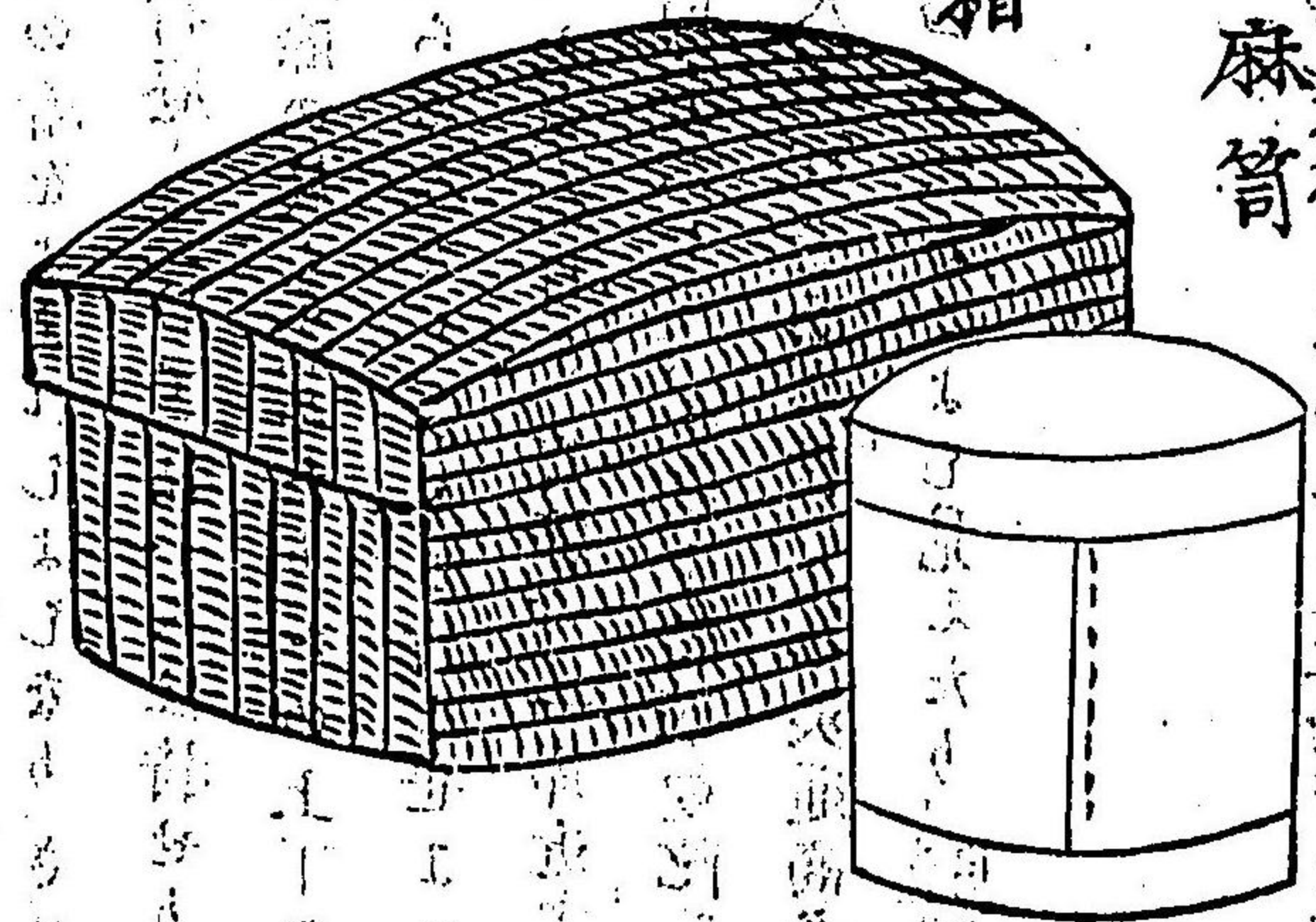
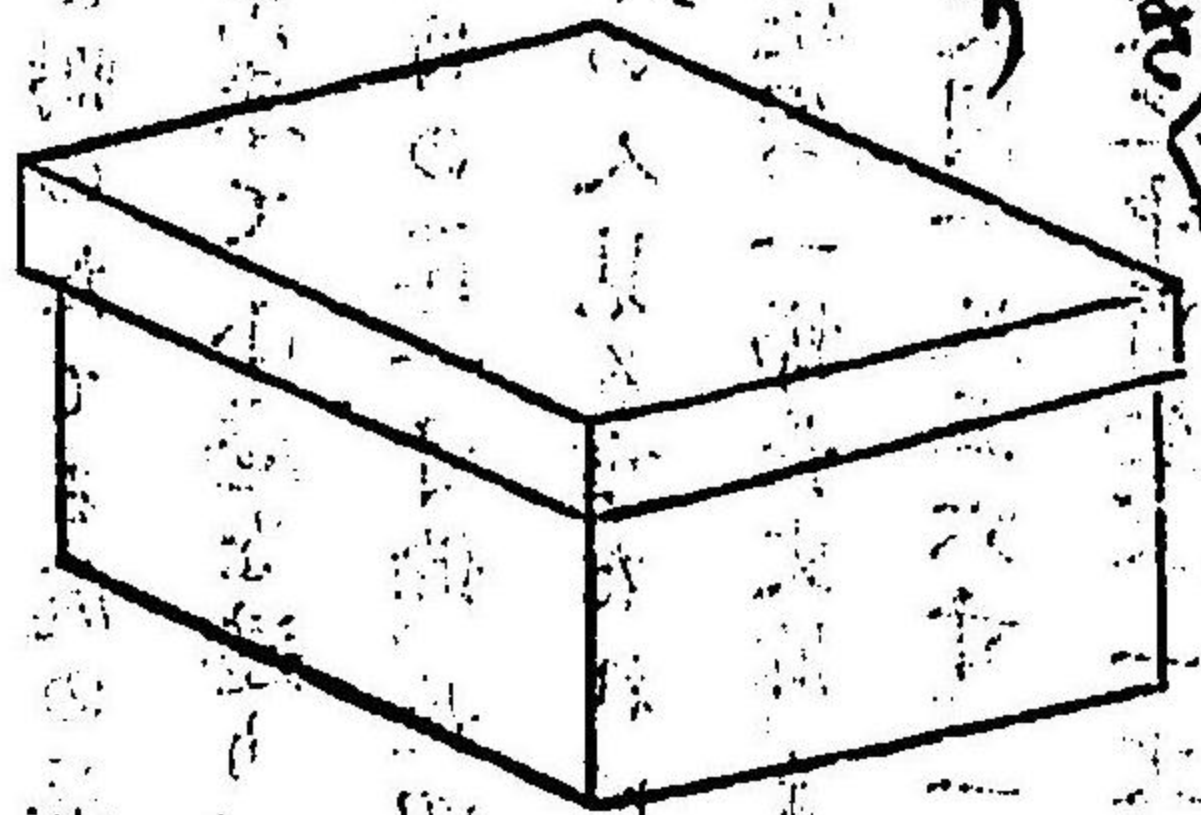
管

て。一様ならぬ。古書。

古書はあまたあり。實

をまらぬして。推量の

理屈だて。拙くりるさるものなり



圓位上人の杖

心なき身にもあはれはしられけり鴨たつ澤の秋の夕ぐれ

とある。上人の家集にて。澤へ鴨のたてる處の屏風の繪をよまれしよしなり。さる

を相摸國淘綾郡鴨立澤といふ處出来て。小庵を造り。西行庵と號けて。僧一人住持せり。

その庵は西行上人の杖なりとて。女竹の徑一寸餘。長四尺餘の杖を藏めたり。その上下の

節のみありて。中間は節なし。往来の人見る事なれば。しらぬ人なし。かゝる竹も世には

ある物なり。王氏彙苑。賞簍竹。在建安。一節長丈餘。また。本草綱目。賞簍竹。一節近丈。

潛確居類書。賞簍竹生水邊。長數丈圍一尺五六寸。一節相去六七尺。當麻中將姫曼陀羅

縁起。出庭前所一竹爲軸。竹乃一夜之中所生長。一丈五尺無節。卷而爲軸。又。華夷通商考

にも。咬嚼吧國及雲南土産の部等にも。瀝竹とて。一節の間四五尺あるよし見えたり。

あるもの云く。奥州松島フクラ島。三所坐の竹二三尺造杖佳品なり。世にはまゝある物ならん。

私の官位

平の義村が。私に三浦分と名のりしを。勅使下向の時。荒次郎と名のれり。是勅許なき
分なれば。位記口宣もなかりしなり。三浦は伊豆にて下國をれば。分なし。守は從六位下

にて。據は從六位下なれば。分はその間相當なるべし。ともかくも。その頃のみだりな

犯さざりしなり。また。三好丈岩は。從四位下を叙せられしを。おして私に從三位中納言と

名のり。武田晴信は。從四位下大膳大夫なるを。私に法性院大僧正と名のれり。足利義詮は

朝廷をさし置きて。私に諸士の官位を叙任せり。これらの朝廷をないがしろにしたる朝

敵同前にて。實に武道にあらむ。いよしへ。承平の頃。相馬小太郎平將門が。私にみづから

新皇と名のり。大臣以下文武の百官を置きたし事。古事談にあり。正應の頃。淺原八郎爲頼

が。突は。政大臣源爲頼と印付けたりし事。東鑑にあり。これらの狂亂人にて論のかざり

なり。ついでに。藤原の

總積朝臣の脇具を平群朝臣が噛りてよめる歌。萬葉集に

非に。小兒等草者勿对八總。夢乎總積乃阿曾。我脇草乎可禮。

とあるを。加藤千陰翁の略解に。腋下の毛の多く生きたるをいふとある。たがへり。さて

の噛の意うすし。脇草は脇具にて。和名抄に胡菟。和岐久曾。人腋下菟如葱鼓之氣。又。謂之

狐菟。如狐狸之氣とある是なり。後世の物語文などに。阿里加とあり。今の俗に和伎我と

いふ事... 非理法權天... 師翁の家訓。非の無理なり。理の道理なり。法の法式なり。權の權威なり。夫の天道なり。非の理は勝つこと能はざる。理の法はかつ事能くを。法の權は勝つ事能くを。權の天は勝つ事あたたまむといふこれし。めでたま尊くさとし言なれど。天といこれし。いみじき誤なり。天の形象のみよて靈なし。靈なければ物いことを。物いねば命令せむ。命令せねば權は勝つ事あたたまむ。權はかつの神威のなす所なり。貞丈師翁の。享保二年は生れて。天明四年六十八歳してうせ給ひ。宣長師翁の。享保十五年は生れて。享和二年七十一歳してうせ給へれば。大方の世を同じくおながら。互にその著述を見られざりしは。貞丈翁も。宣長翁の書を見給ひなば。天道天命など空論のたまふまじきなり。宣長翁は貞丈翁の書を。かつく見給ひし故。吉事記傳は貞丈翁の考を引き用ひ給へり。...

赤小豆。以三角絳囊盛之。除夜懸井底。元旦取出置酒中。煎數升舉家東向。從少至大次第飯之。藥澤選投井中。歲飲此水。一世無病云々。四十年むかりむかし。下總國海上郡銚子の郷に知る人ありて。行きて十日むかりも所々遊覽せし頃。かの里人のいづく。去年の秋。江戸よりくまじ其米りて。この郷の家かりて住み付さけるは。去年の暮は知音の所々へ屠蘇をむりせし。其藥毒に犯されて。元旦の朝悉くなやせてうせたる人多ければ。其所は位ひがたかくて。元旦の夜は出奔たりとをん。かたりける。そのことかしくまじして。古法の烏頭を用ひしならん。さるることをあるまじきよもあらぬ。烏頭を心得たがへて。からすの毒しちを測したるくまじもありきとをん。我徒山本長孫君邦が云く。あるくまじ敗醬を思ひながへて。ひしほのぞとねたるを干して。藥劑を加へし事ありといへり。敗醬の女郎花の根あり。...

崇神天皇紀。會明兒豐城命以夢辭奏于天皇曰。自登御諸山。向東而八回弄槍。八回擊刀。第活自夢以夢辭奏曰。自登御諸山之嶺。繩繩四方。逐食粟雀。天皇相夢謂二子曰。兄則一。弟則一。向東。當治東國。弟是志臨四方宜繼朕位とあり。また仁徳天皇紀。昔有一人。往兔餓宿于...

野中。時二鹿卧傍將及鷄鳴壯鹿謂牝鹿曰吾今夜夢之白霜多降之。覆吾身。是何祥焉。牝鹿答曰。汝之出行必爲人見射而死。即以白鹽塗其身。如霜素之應也。時宿人心裏異之。未及昧爽。有獵人以射壯鹿而殺。是以時人諺曰。鳴鹿矣隨相夢也。とあり。この事攝津國風土記にもあり。夫木集一。

「あはせてやいむといふらんぬむ玉の夢野の鹿の諸聲よなく

「おのが身一霜おく夢や見えつらんこゝろほそげ一鹿ぞなくなる一古事記垂仁天皇段一。問其後。曰見異夢從沙本方暴雨零米。急冷吾面。又錦色小蛇纏繞我頸。如此之夢是何表也云々。これり。皇后の兄沙本毘古の反逆よりて。天皇を刺殺し奉れど。小刀を后よりあたへたる故也。天皇の御夢一あらとれて。とひ給へれはかくしあへむ。ありのまゝ一表し奉りしかば。沙本古毘を討ち亡ほし給ひしなり。伊勢物語は。世心つける老母の誠ならぬ夢がたりあつるを。太郎次郎の情なくいらへてやとぬるを。三郎がよき御男あてこんとあはせたる事あり。宇治大納言物語は宇治殿の御夢一。大かろは三御覽じたりけるを。夢とさあめ牛三得給はん一と合せければ。あめりし三得給ふ云々。後上りさの三位それをあしくあてせたりとて。是は三代の帝の關白一なり給はん上

合せければ。その如くなり給ひけるとなり。また。宇治拾遺は伴大納言善男の。佐渡國郡司が従者なり。かの國にて。善男夢見るやう。西大寺と東大寺とをまたげて立ちたりと見て。妻の女一このよしをかたる。妻の云く。このまたことさかれんをらめとあはする。善男おどろきて。よしなき事を語りてけるかなと。恐れ悲みて。主の郡司が家一行き向ふ所一。郡司のさめたる相人なりけるが。口頃さもせぬ。殊の外饗應して。圓座取り出でて迎ひてめしのほせければ。善男あやしみをなして。我をそのしのほせて。妻のいひつるやう一。またなどさかんをやらんと恐れ思ふほど。郡司が云く。汝やんごとなき高相の夢見てげり。それよしなき人一かたりけり。かならむ。大位一いたるとも。おといできてつみをかうふらんぞといふ。しかる間。善男縁一つぎ。上京して。大納言一いたる。されとも。犯罪をかうふる云々。風俗通代醉等は。占夢者といふあり。まへて正夢と思はるゝを。みだり一。人一語るはよろしからむ。又。人の夢を戯れ一もあしさまよひを。よさまよとりなし一いふべきなり。是則。言靈の幸ひ助け給ふ上つ代より皇朝のならしなり。外戎一も。周禮一。夢者事之祥也とありて。占夢官一もあり。草木子一もさるたがひあり。南唐近事圓夢とあり。

延喜太政官式。凡。元日天皇受皇太子及群臣朝賀。辨官預仰諸司。辨備庶事裝束。辨史等行事。前月十三日大臣預點殿上。侍從四人左右各二人少納言二人奉賀奏瑞各一人。辨四位奏聞定之とあり。十二月十三日。正月の萬事の經營を始めて修す。これ事始なり。さるを。後世の十二月八日となりしを。又。後はいたりて。十二月は正月の事始あらば。二月も正月の事納めあるべき理なりとて。二月八日の事納めとせしを。又々後いもきだめを失ひて。十二月八日と。二月八日と互に始終を争ひ論をる事となれり。辨五位握符辨六位師貞史翁云く。雄婦に安産の符を水初穂までのみしむれば。赤子其符を握りて生るべしといへり。是修験者と取揚婆し心を合せてする事にて。軍將の腹心の士を使ふは同じといゆれしなり。定かよ見あらざれば事あればなり。かゝる淺きかなる謀計は歎かされて。奇異の思をなむ。信も恐るゝ。愚將の敵方は城も所領も奪られつべし。辨六位信濃越後の兩國の。雪深くしてどりのり。かじきかねば道路なりがたし。どりのり堀川

後度百首は忠房

「初ミのれみりよけらしあちち山

こしの旅人

橇

裸

この橇といふ物の。史記は泥行乘橇とあり。孟康云。橇形如箕。橇行泥上云々。如淳云。以板置其泥上以通行路也と註せり。正義云。橇形如船。而短小兩頭微起。人曲一脚。泥上橇進。用拾泥上之物云々。三才圖繪云。前頭及兩邊昂起。如箕云々。和漢三才圖會云。沙板爲之。其形如箕。橇行泥上者也とあり。かこまか夫木葉は伸正くはひちの直ち物くるをこま



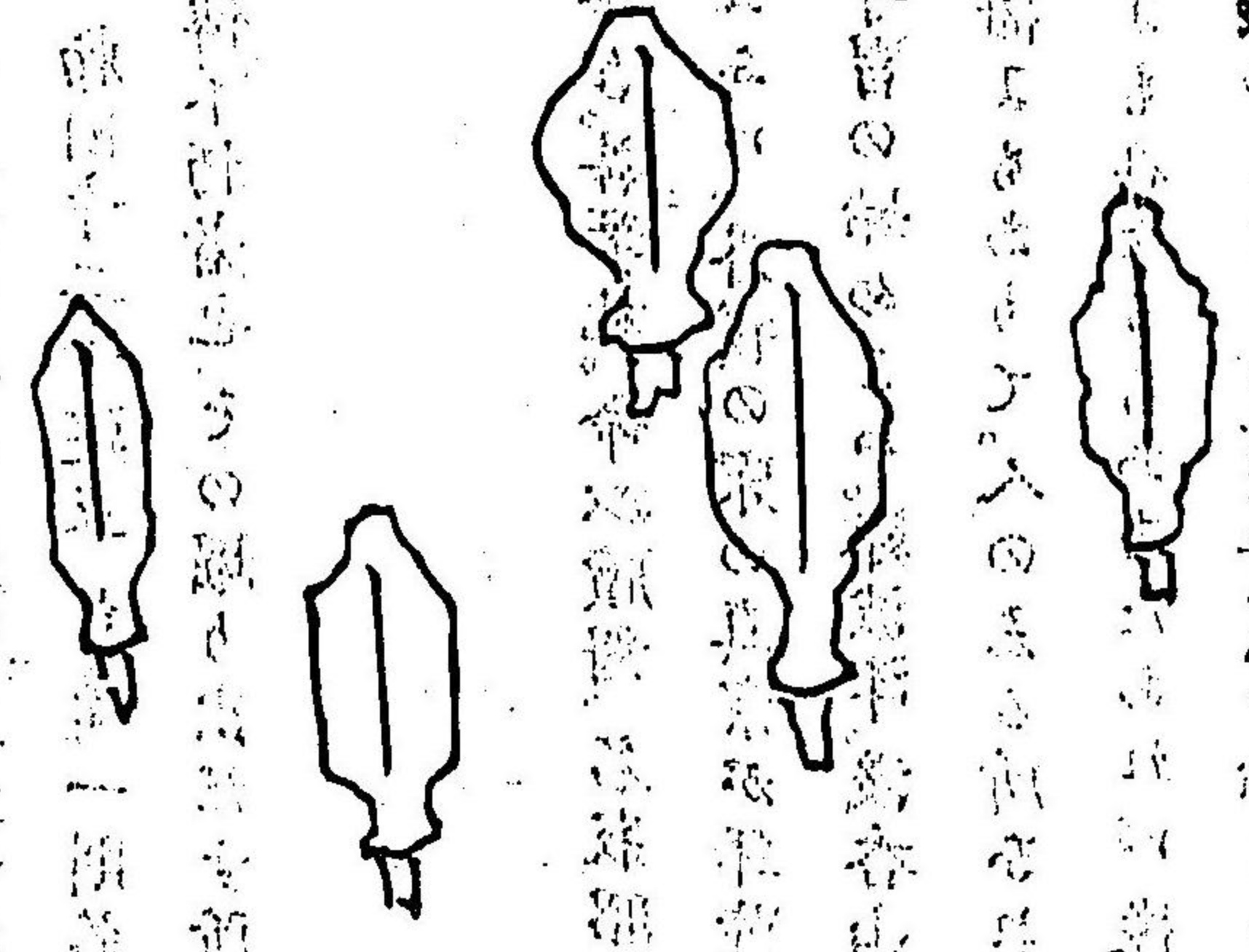
而竹葉圖かまきこくこしの山路の旅をらも雪よまづまぬ身をかまふとく

西行法師家集より、この石の鑱の形は、
和漢三才圖會に、其形似錐長半寸。施之履下。以為上山。不蹉跌也。按、如越州北地雪深而
不乘輜不能行。不着屨不得上也。

同記先生の軍用記に、神道儒道を好む大將の。佛道を忌みさらふ故に。甲冑其外武器の
類は、梵字。又、佛像其外佛説の具を爪弾して。忌みさらへり。さては、佛法は深く歸依の
諸士の。無法の大將なりとして。うとみそむくべし。すべて。大將の諸軍士の好む所は
隨ひ。さうへる事をもけては。諸士と共に佛法を以て。軍慮智略のくさひひは仕ふべし。
愚昧として佛法はつかはる事なかれといわれし。今は始めぬ大先生の高論比類
なし

出羽國庄内の殿の御内人某が、石の鑱もて、来りて語りけらく。近き邊の海邊にて。人々ひ

る事あり。この神代は神軍の鑱なりとも。又、蝦夷人の鑱なりともいへり。雁の羽をど
し附けたるを落し、ならんと。むかひよりいひつたへ、
たりて。二三めくみたり。續日本紀仁明天皇承和六年、
冬十月乙丑、出羽國言。去八月廿九日。菅田川郡司解備の、
此郡西濱達府之程五十餘里。本自無石。而從月三日。寒
雨無止。雷電聞聲。經十五日。乃見晴天。時向海畔。自然墮
石。其數不少。或似鋒。或白。或黑。或青。或赤。凡厥狀體鏡。
皆向西望則向東。詢于故老。所未曾見。國司商量。此濱沙
地而徑寸之石自古無有。仍上言者。其所進上兵象之石數
十枚。汝之外記局。勅曰。陸奥出羽并太宰府等。若有機變。
隨宜行之。且以上言。克制權變。令禦不虞。三代實錄に。元慶八年九月廿九日。出羽國
言。六月廿六日。秋田城雷雨晦冥。雨石鑱廿三枚。また。仁和元年六月廿一日。出羽國秋田城
中。及飽海郡神宮寺西濱雨石鑱。同二年二月。出羽國飽海郡神社邊雨石鑱。我得じも白
きあり。赤きあり。青きあり。灰色なるあり。黄をおびたるもあり



ちなり。諸書に國分寺の事あり。其の詳なるものあり。其の略なるものあり。其の詳なるものあり。其の略なるものあり。

國分寺の瓦なりとて。諸國より古瓦を。土中より掘り出だす事。ことよもかしこよもあり。續日本紀。天平十九年十一月己卯。詔曰。朕以去天平十三年二月十四日云々。通詔天下諸國。國別令造金光明寺法華寺云々。又。同紀。廢帝天平寶字四年六月云々。創建東大寺及天下國分寺云々。また。續日本後紀。仁明天皇承和六年六月。勅國寺二寺建立。自遠。一則名為金明護國寺。一則號為法華滅罪寺。先帝救世利物之法。遠傳不朽者也。その掘り出だす所の瓦。古新のけぢめある。寺建立の遲速ありし故なり。

書史會要より。日本國於宋景德三年嘗有僧入貢。不通華言。善筆札。命以牘對。名寂昭。彼國自國字母僅四十七。能通識之便。可解音義。この景德と云ふは。外戎の宋の真宗が年號也。一條天皇の寛弘三年よあだれり。そのかみり小兒の手習の始めより。難波津。淡香山の二首の歌を。手本としたるよし。古今集序にも。源氏物語にもありて。人のある所おれど。一首まで六十餘字ありて。同字數多あるゆへ。五十韻もれたるもあまたあれば。後本色降句へと云々の今様めたる。長歌が。同字なければ。いふとなく。是を手習の始なり

せしなるべし。い。その三字なければ。同字一たりある故に略さたるなり。又。五七言のあらべをととのへん。爲ももあるべし。三句目一言たらねども。おのやむことを得ざるなり。その字體もいと略き過ぎたるなれば。異様よみゆれど。楷書の草子の略なれば。こと物よあらざ。楷書の略なる事。外戎人の目より。よみゆべきを。日本の國字といひし。いふかじり事をり。此の事。その十餘の。用。宋。承和。六年。六月。勅。國。寺。二。寺。建。立。自。遠。一。則。名。為。金。明。護。國。寺。一。則。號。為。法。華。滅。罪。寺。先。帝。救。世。利。物。之。法。遠。傳。不。朽。者。也。其。の。掘。り。出。だ。す。所。の。瓦。古。新。の。け。ぢ。め。あ。る。寺。建。立。の。遲。速。あ。り。し。故。な。り。

強盗と名のつきたるゝ異なる人

砂石集。ある南都の強盗法師。かのれ強盗の中は交りて。人の家におし入り。財を奪ひ。盗人どもよあたへておのれのとらむ。さてあまたの盗人は敬われ。つきくは教化して。佛道よまゝめいれし故。強盗法師といへり。又。徒然草。ある柳原の強盗法師。度々強盗に逢ひたる故。世は強盗法師といはれしなり。名は同じくして故。いたく異なる。砂石集。梶原平三景時が孫。無住法師の作なり。徒然草。下部無願の子の吉田無好法師の作なり。

灰零

天武天皇九年六月八日。灰零と御記あり。其後。續日本後紀仁明天皇承和五年。有物如灰。從天而雨。老農名此物米華。かのれ十歳の頃。安永八年十月朔日。灰ふりたる事。かのれ覺えあり。其後十四歳の頃。天明三年七月江戸中戸障子響き震動して。大空くらく。灰ふりたり。人々あやしみを。四五日過ぎて聞けば。信濃國淺間山焼けたりとをん。手築葛野相模國へ遊歴して。けられ木といふ物がてかへれり。相駿。甲三國の塚の中心

よ立ちたる樹の根なり。中心よ立てるが故。けられ木といへる。國詞にて。こゝろ木といへる事なりといへり。實朝公のけられ木と。よみ給ひしも是にてよく聞ゆといへり。最ももしろき事なり。我若かりし頃。甲斐國より刑部刑部刑部といふ人。よみ歌の師なる季鷹。縣主へ度々米りて。物語などする。行合ひてかたらふ事常なりし。そやけいねつよやなりぬらんといへる。早九つの時よやならんといふ義なり。古今集の甲斐歌のけられ木。横をりふせると。かの金槐集のけられ木と。刑部がけられつと符合せり。伊勢物語。一夜もあけぬばさつよとめなんぐだかけのまださよなきてせなをやりつる。とある。だかけを。あしく心得て。鶏の名と思へり。ぐだの憎みのよむる詞にて。かけが鶏の名なり。そをよことりといへるも名よあらむ。かけといふべし枕詞なり。古事記。爾波都登理迎祢波那久とある。庭津鳥鶏と。野津鳥雉と。對句よよみ給ひしなり。さるを。かけの家鶏の二字なりといへる。むびは拙し。上古の字音をなす。よこありつとも。

かよともせんかたなきうへよ。小挑灯の風よけされぬれば。あうじてて。やと大聲發し
 て。不意の中ぐへりして立ちたるよ。近き邊の人其聲を聞きて。おどろき燈火もて来てみ
 れば。幸藏の傘さし。あしたとさしまよで。立ち居たる四五間をかり先よ。路上よ強く。
 打ち付けられて。頼むとつ死じ居たりとなん。輕き役者なれば。常よよき役者よ扱げられ
 て。中かべりする事なれば。得たるごさまで。思ひかけぬたらさるるなり。よき役者
 は中かべ及びがたし。...

韃靼國。...

天智天皇紀よ。蘇將軍與突厥王子契苾加力等。水陸二路至于高麗城下云々。この突厥。即
 韃靼なり。韻會よ。金山狀如兜鍪。俗呼突厥。通鑑よ。匈奴ともあり。大明一統志よ。歷代名
 稱各異。夏曰獯鬻。殷曰鬼方。周曰玁狁。秦漢曰匈奴。唐曰突厥。宋曰契丹。元曰蒙古。明曰韃
 靼。四十二國人物圖説よ。東西黑白二種ありて。屬類甚多く。國界四十八道よ。かかれて。大
 國なり。南界は唐土よ。交接し。北方は氷凍よ。近く。大寒地よ。て。四季晝夜の長短。大に他方
 よおなじからず。最。富饒の國なり。弓馬を好み。勇強の風俗なり。北極地を出づること四
 十三度より。六十四度よ。いせりて。南北短く東西長しといへり

夜鷹

夜鷹といへる。賤しき遊女を夜鷹といへる。いさる事な
 り。和名類聚抄よ。怪鷗。與多加。晝伏夜行。鳴以爲怪者也
 とあり。一名隻狐と云ふ。不祥の怪鳥なり。さて又。同抄
 よ。遊女云々。晝遊行謂之遊女。待夜而發其聲
 奔者謂之夜鷹云々。今井良亮が荏原郡戸越
 村に住ひける頃。かたりけらく。たそがれ
 の頃。木立のしげみより立ち出づる鳥あ
 り。道路よのげさまよ伏し居けるを。人行
 まがかりぬれば。立ちて二三丈も置きて。
 又始のごとくふすとなん。かたち夕くれ
 なれば。定かよ見えねど。ふくろ。みづくよやあら
 んと思ふさまなりと語れり。是夜鷹なるべし。道路
 よふす故よ夜鷹と號けしよやあらん



陸原郡石川村の邊の道路のかたへの草村に、目なれぬ草花ありしを。采かたりたる農夫
 とひければ。毒物なりとこたへて、くちくちと
 へていよけり。こゝろをぬ事いふは、
 ふをのこ哉。草も木も大毒
 小毒あるは。あまたなるを。是の
 み毒物といへるは。いふがしき
 事なり。漢名。俗名。おるべきを。い
 思ひつる。後其筋を。物産
 問ひければ。俗に毒の木とい
 べり。漢名。木本。黄精。葉。銅。吻。と
 なんいひける。天野信景の鹽尻
 一。光花といひて毒物あり。三月
 紫花を開く。藤。似たり。二尺計の小木にて。紫荊樹に似たりとあるもこれなるべし。



郭公

大永の頃。宗祇弟子宗長といふ人。書ける書。八月中旬の頃まで。子規晝夜となく鳴きけ
 れば。齋非時までもたへかねて。悲
 聞くたび。胸をうたげれば。郭公返吐とぞほととほあがりける。よ
 又山崎宗鑑が。唐詩の音。人の。又山崎宗鑑が。唐詩の音。人の。又山崎宗鑑が。唐詩の音。人の。
 貞丈曰く。郭公の聲。愁。しく。物。淋。し。き。音。なり。されば。好みて聞くべき物。あらむ。鶯
 の聲。は。い。た。く。異。なり。唐詩をよむ。此聲を聞きて。愁情を生じ。故郷を思ひいだし。哀
 愁。る。意。を作。れり。實。は。は。じ。め。あ。ら。む。事。な。れ。ば。歌。の。時。鳥。を。待。た。か。ね。野。山。は。出。で。い
 尋ねありき。又。初音を命。よ。か。へ。て。も。ま。か。ま。ほ。し。き。意。を。よ。み。人。は。先。き。聞。く。事。を。ほ
 まれと。實。は。風。雅。の。事。も。あ。ら。む。俗。情。を。入。人。とい。と。み。あ。ち。を。ひ。で。其。音。を。入。より。先。に。聞
 きた。愁。が。こ。こ。も。悲。し。く。も。聞。き。な。さ。る。其。音。は。感。を。心。を。な。く。い。と。み。あ。ら。む。事。を
 か。れ。心。の。さ。げ。が。し。き。なり。宗鑑が都のうらけを待ちつたといへると。子規の音聲を
 おく聞きしものといふ。宗鑑が都のうらけを待ちつたといへると。子規の音聲を

やむべきまじし申して願ひん。木挽の助命して。我行きたる頃。存命してありしなり。其松を見に行きし。楠の根より三四尺も上。楠より大なる松あり。めよつきて。うしろよりみれば。松の切口半月の如く。左右に見えながら榮えたり。又。下野の飯岡手古崎神社も。さる類の事有りしとなり。また。美濃國某村とかやして。これも寺院の作事の爲。近き所とりの小社の神木をさらんとする。神主のさむ。神木を汚穢の僧坊よせん事。思ひもよらむといふ。同行とかいへる者の中。一人嗚呼の者ありて。佛の御爲。寺の御爲なれば。我其神木を穢して。寺へ引かせんといひて。その夜。神木よて燃れ死したり。依りて切りまてたるを。寺へ引きし。住僧を始め同行のこらむ。大熱よて死したり。くびれし男。家内親族残らむ亡びたり。又。天保の九年の頃。尾張の名古屋よて。久米儀兵衛。儀十郎。二人父儀左衛門が死骸を。東寺町日蓮派本住寺の諸化悦山といふ僧と申し合せ。熱田神宮の一の鳥居を通りぬけせしを。神慮を恐れざる無法の所行なりとて。悉く追放し處せられたり。世よ希有のをこの者もあるものなりけり。其者共のそてく。いかよなり行きけん。その久米氏の。子孫一類悉く零落して。大道路よて。往來の人よ物をふごどくなりてたるよし。其國よ我をしへ子あれば。悉く聞きたり。追放し處せられし。顯露政

事正しき故なり。一族悉く零落せし。神幽政事いちじるき故なり。恐れても恐るべきなり。

公の御掟なり。畏みても畏むべきなり。神慮の御定なり。

言をいさかかかへて心をいたくかへたる歌

萬葉集

「あがの海人のめかり汐やさいとまなみくしげのをぐしとりも見なくよ

是を伊勢物語よ

「すまの海人のめかり鹽やさいとまなみつげのをぐしもきくを来しけり

萬葉集なる。髪あぐる解飾よて。伊勢物語なる。化粧のさしぐしなり。また。萬葉集よ

「おもしうき野をいなるまそ古草よひ草まじりおひのおふるがよ

是をかの物語よ

「武藏野のけふるなるまそ若草のつまもこもれり我もこもれり

この歌の。其先の古今集よ。初句春日野のとありて。草のつまとよみたるを。この物語よ

て。男の事とせり。又。萬葉集よ

「霞の緒をあわ緒よよりて結べらむありて後よあわむらめなり

惟喬親王と。清和天皇御尊と御位争ひ。紀名虎と伴善雄と相摸の勝負にて。定め給ひしよし。いへる。とらへ所もなきいつなり。惟喬親王の承和十一年御誕生にて。同十四年紀名虎卒去せり。夫より三年を経て。嘉祥三年の四月。清和天皇御誕生。同年十一月立坊ありて。皇太子となり給ひ。八年を経て。天安二年。文徳天皇崩御し給ひ。直に清和天皇御即位なれば。争ひ給ふ程の間はなかりしなり。其後貞観八年。伴善雄罪ありて。伊豆島へ流罪なり。是相摸は勝ちたるの偽なる證なり。惟喬親王の貞観十四年。病より。出家沙門となり給ひ。寛平九年。薨じ給へり。御史を去らむして。石清水にて十番の競馬の事。大内にて名虎と善雄が角力の事。又。東大寺にて紀僧正真濟と。延暦寺にて惠亮和尚と精力を盡して。大威徳と降三世との行方くらべなど。つくりてへたるなり。

ちん犬

矮犬をチンといひて。狽字をあてたれど非なり。狽の字書は狂也とありて。くるふ事なり。小犬のチンの字音はあらむ。ちいぬの音使して。ちいぬちひさいぬの略なり。もと皇朝の物ならぬ名はなかりしなり。類聚國史。淳和天皇天長元年四月丙申。覽越前國所進

渤海國信物并大使貞泰等別貢物。又。契丹大柶二口。矮子二口。在前進之。これ皇朝は矮犬もたりたる始なり。

さくなだりの延喜祝詞式。高山の末。短山の末より。さくなだりの真下垂マナダゲにて。水の落つぬいほほひなり。さるを。賣物神道者のよむべき俗本より。さくなだりを。佐久良谷サクラヤと誤れり。さるを。近江國石山の邊の川。櫻の瀧といふをつくりて。その事と。又。かの大枝詞は。大津邊オホツツノ居大船オホフネなり。船着の湊なるを。近江の大津と。彼方の繫木フナカキがもとを云々。とある。彼方を。山城の宇治の彼方。附會せり。また。近江栗太郡佐久那度の神社を。お供なだりのより所としたるも。いと拙し。その古事記神代紀も。道祭祭祝詞にもある。久那度神にて。此處より此方へ来ること勿れど。宣給ひて。なげ給ひし御杖よりなり出で給ひし神なれば。莫米所の幾なり。真下垂といふ大異なり。

無病長壽の爲。不死の靈藥。大同類聚方本草などにもありて。人の欲する事なるを。源氏揚卷。宇治の大坂君。今の時。兼大將の山。高丸の

「薄雲」のひびきたる樂のゆくまは雪の山よ跡をけけまし

とある。釋迦因位は雪山童子といひし時、于夜後、理法を問ひし。諸行無常是生滅法と半いひて。次に餓えていふ事能くをといへば。さらば何をか食ふと問へば。血肉を食はんといふ。童子我身をあたへん。未をいへんといふ。生滅滅已寂滅爲樂とをしへたれば。童子石壁へ書きつけて。谷へ飛びし。鬼の口より蓮花出て。童子を受けた。この鬼の帝釋天なりと。阿含經より作りたる趣もて。兼みみ給ひじなり。されば次の文も半なる傷をじへけん鬼もがなど。こぼけて身もなげんとかほすと。心きたなきひじりごとくならしける云々あり。此傷は涅槃經あり。いかまも佛法の死をつかさどる物をねむ。しぬる藥もとめん。仏の似つればしき教よりありける。さらでも毒樂を用ひは即時に死ぬるものなりと。兼みみ給ひじなり。此は經のよまらるる言なりと。此は入身經の言なり。朝のことも。暮山の木。暮山の木。木はひつらひつらと。此は木の言なり。朝な夕なのなり。朝夕の魚菜の事といへる。萬葉集のかり字がきより誤をつたへたるなり。あきのまのふのまといふ事にて。之間の反らなり。よなくは夜間なり。晝を晝間といふも。夜をよといふも。夜間の幾なり。夜半のかり文字はなづみて。深夜の事とある。非なり

隠尾槍

増鏡あり。新井白石翁云。三條宰相中將さねもり召捕られぬ。三條の家へ傳りて。隠尾と云ふ刀ありけるを。この中將日頃もたりけるよて。かの源原自害したりと見えたる。正應三年三月九日の事とありける。其文字の如く造りなしたる物をいふよや云々とあり。彦磨思ふ。隠尾槍は。今の長刀なるべし。白石翁の槍とある。隠れたるなるべし。長刀も槍の中のひとつなり。源原八郎爲頼は。甲斐源氏小笠原の一族にて。無法の狼籍者なり。諸國あむれある。身の置所なき。紫宸殿へかけいりて自害せり。射出だしたる矢。太政大臣源爲頼と書き記したる無法のあむれ者なり。東鑑脱漏あり

顔色土の如し

物に恐怖して。血色を失ひたる人の顔色を。土の如しといへり。いよしへは容貌美麗なる。對して。外をおとしめいへる語なり。長恨歌。顔左右前後紛色如土とある。楊貴妃一人は色を奪はれたるよしなり。源氏蜻蛉巻。御まへなる人のまことと土などのこちぞする云々。是は兼大将の目なり。女一宮を見たる目にて。御まへなる人々のつちの如く

顔色なきことちするよしなり、
神社の星祭

近き頃貴神道の神主が十一月冬至よりその社の拜殿も門前も星祭の看板を出だせり。いかし世あたりの爲の神主屋ならんからし。神社も穢を犯す。甚しき罪なり。延喜式も凡齋王將入太神宮之時。自九月一日。京畿内伊勢近江等國。不得奉燈北辰及舉哀改葬とあり。日本後紀云。禁今日祭北辰舉哀改葬等事。以齋内親王入伊勢也。又續日本後紀云。禁京畿之内采月供北辰燈。以齋親王可入伊勢也。かく嚴重なる故。外戎よてこと。日月星を等しく思ひて。日月を尊しとも星を賤しとも思はざらめ。日神月神の畏く尊き事はいふまでもなし。星のそれと等し並よあらむ。いとやしく雲霧も同じたぐひなるを。ことごとくまくいひなして祭る。外戎風なれば穢なり。
神の使
御島住吉の神主の代々日向守といふ好祖好祖。今の好貞とも三代つゞきて我門第なり。かの島の海人の冬より春かけて白魚を旨と漁れり。年よりしてすくなき事あれば。島人一同は神主は祈禱をたのめり。其祭祀より生きたる鯉を二。白木臺に居て神前へ備へ。神祭終りて海に放つ。まむしの程の勞りたるさまなれど。海に入りて。いきほひこじめの如く沖の方へそしり行けり。是は住吉神よりたづみの神へのこゆま使して。白魚奉らせ給ひといひやるなりといひ傳へたり。さる事あるべし。天照大神猿を使とし給ひし事あり。春日神の鹿を使ひ給ひ。石清水八幡神の鳩を使ひ給ひ。諏訪の神の蛇を使ひ給ひ。稻荷山の神の狐をつかひ給ひ。熊野の神の鳥を使ひ給ひ。松尾の神の龜をつかひ給ひ。息吹山の神の猪を使ひ給ひ。氣比の神の鷲を使ひ給へり。其外の神々も。其つかこしめ所々よりて異なり。近き頃。下總國船橋太神の使なる鹿を。所の者六人よて打ち殺し喰ひたる。其者どもの家々の。他の家々をへだてぬまきく。一時は焼け失せ。其六人同時は大熱發して。同時は死にせり。其六人の中より。折々見受けたるもあり。焼失の三四日過ぎて。船橋へ行きたる時。其焼跡をも見たり。

羽倉在満翁の真蹟

或人在満翁の真蹟とて。もて来りしを。真偽はまらむ。藏め置まつるを。富永春顔が望める故ゆづりたり。色紙の大ききなる紙。詩を懐紙の如くかゝれたり。春日遊小田原賦得海上眺望。荷田在満。昧蒙春日霞。渡流海面波。阿婆登應見。速山難追馬とかゝれたり。是を

昧蒙春日霞渡流海面波阿婆登應見速山難追馬。この春日をこるよとのよみがたし。又。追馬の二字のその一言は用ふる事萬葉あり。又馬の事をそともおとせとよみたり。まといひて馬追ふの當世俗言なり

極樂地獄の繪

寺院にある所の極樂の繪は。佛を始め。諸菩薩も皆がら肩ぬきて。南天竺の熱國のさまなれば。さもあるべし。いかならん地獄の繪は。閻魔王を始め。十王冥官獄卒まで。皆唐の姿にて。罪人の悉く日本國の慶長元和以後の月代剃りたる姿にまづる。作者の愚なるか。畫工の拙きか。あまりなる愚昧のまわざなり。さる故に。さよあらしといへる物がたり出米たるよも。焰王をこじめ十王ども冥官獄卒にいたるまで。悉くから人の如くにして。一人當千の勇士所々よおこりて。暫時は閻城を打ちおとし。或は殺し。或は生捕りて。忽ち地獄破却し及びしさまよつくりし英雄の勇士に。悉く皇朝人にて。外戎の張良。樊噲。關羽。張飛などのたぐひをばましへむ。地獄極樂を始めて思ひよりてつくりし人よりも。さよあらし作者どまさりたりける。正法念經に。閻羅獄卒非實有情。以衆生妄業力。故見之とあるが證なり (傍廂前篇終)

傍廂後編

藤原彦磨著

たくじり

神武天皇神祭り給ふ所は。土器類造らしめ給ふ中は。手扶といふ物御紀にあり。扶は以手指別扶也。和名抄に。觸。久自利。字鏡。則刻。久自利惠留とあれば。指先にて。穴を穿つをいふ。竹取物語に。やみの夜は出でても穴をくじり。こゝかしこよりのぞきかいままどひあへり云々。左の掌は土を置きて。右の指先にて。穴をうがつが如くよくじれば。窪みたる土器となるなり。三輪神社にては。右の肘にて。左の掌の土を白つく如くすれば。深き土器となる。土器の中は肘の筋骨の跡あり。底は左手の掌の理文みゆとなり

南方退治

元可法師。俗姓は下野國の住人。藥師寺次郎左衛門尉藤原公義といふ。心ゆたかよみやびよして。優なる人なり。かの元可集雜の部は。南方退治發向の時。天王寺にて。人々題をさぐりて歌よみける時。旅友といふことをよめるとして歌あり。其夜天王寺よどりて。

あくる日の楠正行。正時兄弟と對ふ事なれば。一かたならむ心あわたししかるべきを。かく探題よて歌よみ遊べる。武備うときよのあらむ。この時の大將の。高武藏守師直。同弟越後守師泰なり。總大將の足利尊氏公なり。何れも佞奸非道の人なれば。官軍よむかひて。戦はん事心よからを思ひての事ならん。さる故よ。早く世をのがれて出家しつらん。其世をまつる時よ。「とれづうしとらねむ人の數あらむをまつべきもの」弓矢なりけりとよまれし。佞惡の尊氏直義など。隨ひ。官軍よ向ひ。弓引くはうし。出陣せむしてこもり居。臆病未練といこれん。所詮弓矢をまつ。佛門よ入るよ。志かじとなり。この公義の歌。新後拾遺集よ。太平記よもみゆ。家集一卷あり。

靜前が勇氣

源義經の妾靜の。武勇の女よて。堀川夜討の時よ。義經酒よ酔ひて。はかむかしからぬを。靜心得て。甲冑をさせし事。義經記よあり。その次第けしき中よもあやまたむ。新田義貞朝臣紀よひし。とあひて違ねば。師翁貞丈大人も。甲冑着用次第よ取り用ひられたり。義經流浪の後。靜の鎌倉へめされて。謠ひ舞しける時よ。梶原景茂酒興のうへよて。靜を犯さんとしつるよ。靜いかりて云く。我の源二位の連枝たる豫州の妾なり。汝の源二位

の臣下なり。豫州沈淪せむ。汝ごとき我よ對面する事あたはじといひしよ。景茂恥ぢて閉口せしよし東鑑よあり

以牛祭神

神祇正道よ於て。牛馬犬猿鶏の人は畜られ。人の用をなむ故よ。繼ぎて産死の穢あり。食料の甚しき穢惡なり。後漢書よ以牛祭神とあり。廣州記よ殺牛取血。和泥塗石牛背祀とあり。これら神も眞の神よあらむ。牛馬も穢とせざるなり。天笠よて。雨を祈るよ。以牛糞塗場地。以牛糞酪食法師といへり。皇朝よて。甚しき穢として。いみさくる故よ。牛肉を田人は食じぬたる時よ。御歳神いかり給ひて。災ありし事。古語拾遺よあり。さるを。いつの程よか異國の風義ケつりつらん。皇極天皇紀よ。隨村々祝部所教。或殺牛馬。祭諸神社云々。桓武天皇紀よ。斷百姓殺牛用祭漢神云々。自然と惡風義ケつりたるなり。

雁金

雁をかりがねともいふと心得て。雁金の字。即雁のこと。おもふゆり。其聲を雁が音といへるよて。古今集よ。雁が俗の聞ゆると。あれど。雁が俗のなくとも。雁がねの聲ともよみし。なく。雁のなく。雁の聲といあまたよゆり。さるを。萬葉集よ。秋風よ山とびこゆる

かりがねの聲速さかゝる雲がくらくらじとあれば。事よりてゆくしからぬや。かさね
言よて。つくむねのみね。かりほの庵などのたぐひなるべし

因快止動

或學者の曰く。世に因快止動の誤といふ事あり。狐のコンとなくを歡鳴といひ。クワイと
なくを怒鳴といへる非なり。コンの因よてくるしむなり。クワイの快よて心よきなり。又。
馬をつかふよしといひて追ひしらせ。ドウといひてとむるも誤なり。シの止よてと
むるなり。ドウの動よてうごきしらするなりといひし。腹をいだきてさらふべき
事なり。狐も馬も學者ならねば。字義をよめるべからず。狐の聲の悦ぶとも。怒ふとも聞さ
ざるやうなし。馬を追ふも。とむるもつねよいひなれたる鄙俗の詞よて。シイ／＼とい
ひて追ひ立つる事。既し萬葉集し馬の事を。曾止毛於波受とある。ソといひて馬を追ひ
し故なるべし。假字書よも。ソの一言し追馬の二字をもかけり。ドウの。とまされといふ事
なり。まべて。牛馬犬猫のたぐひ。里俗の方言よく聞さるる物よて。其意を得れど。字
義を辨へむ

大塔宮

尊雲法親王還俗し給ひて。護良親王と申すを。大塔宮と申し奉るを。世にオホタフの宮と
申せど。音訓まじりよあるべからず。ダイタフの宮と申し奉るべきなり。此宮思召し立
たせられし事あらされて。北條高時弑し奉らんとせし故也。熊野の方へ落ちさせ給ふと
き。南都の叡若寺の大叡若經の唐櫃の中よかくれさせ給ひしを。軍勢采り經櫃をさが
しみて。大塔の宮にいらせ給て。大唐の玄奘三藏こそおとしけれと戯れて。一同よさら
ひてかへりしよし。彼太平記よあり。大塔大唐似たる故の戯なり。この玄奘三藏法師の唐
太宗が時の人よて。西域よとたり。十七年が間。百三十餘國を遊歴して。唐よかへり。
六百五十七部の經文翻譯せし人なり

軍神問答

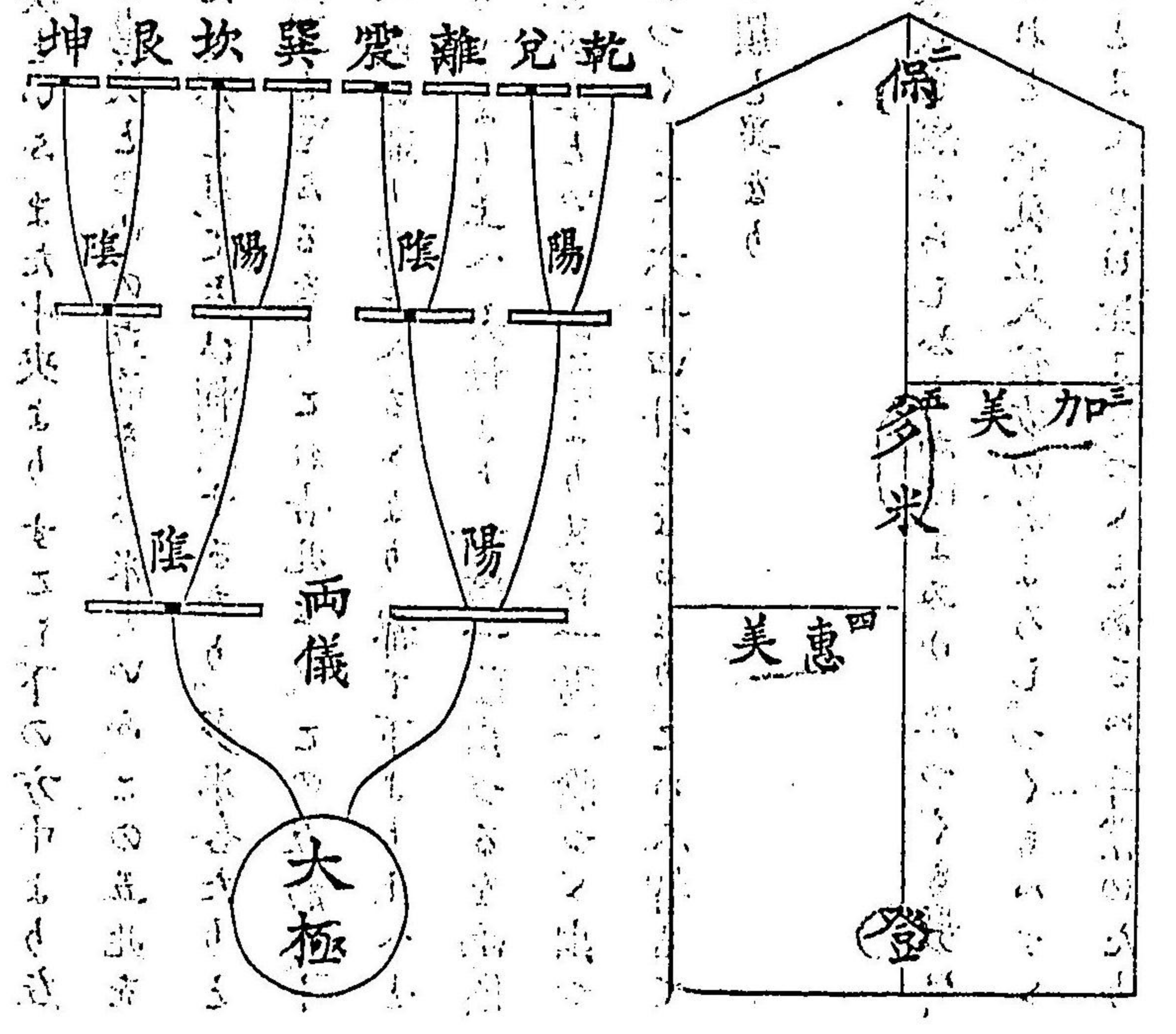
師翁の軍神問答の。古今未發の高論なれば。いとたふとくありがたき有用の卓言なり。武
士たらん者みぞあるべからず。さるを。中よたゞ一箇條我心よ諾ひがたき事あり。或人
の問。楠正成は良將よして。忠臣なる事。古今の人の知る所のごとく。武道よ於て。一
事の不善なかりしかども。其功を遂げをして討死せり。軍神の加護なかりし如何とあ
る。先生の答。此事は天命なり。俗よ云ふ運なり。天命は何故よ依りて斯くの如くとい

ふ事。人智を以て測りがたし。故に聖人も天命を恐るゝとのたまひしなり云々とあり。彦唐云く。是師翁の誤なり。外戎は神のある事をしてらねば。執逆非道をしてらざ。天より命令するは随ひたるよしといひます。大罪をおそひて。よく思はれんとかまへたる道具はもうけたる。つくり事をして。天地の形容のみして靈なし。靈なければ物いごと。物いねば命令せむ。孔子五十にして天の命令を聞きし事おぼつかなし。楠正成討死して。奸佞闇愚臆弱の尊氏公勝利を得。十五代までも。將軍職をとりし。天命も運も因縁もあらず。軍神加護し給ふべき故ある事なり。義貞朝臣は打ちまけて。西國へとしり。筑前國宗像神社に於て。天下泰平。朝敵退治。萬民安穩の重き大祭祀取り行ひ。大軍を率ゐて上洛し給ひし故に。正成卿は湊川にて討死し給ひ。義貞朝臣は北國へ走り。次の年。金崎にて亡び給へり。義貞朝臣も尊氏公を西國まで追ひ討ちし給ふか。又。加茂石清水など。重き大祭祀取り行ひ給へし。か。か。か。拙き敗軍のあらざらまし。もとより忠といひ。勇まといひ。尊氏公より。十倍勝れし義貞朝臣。神力加はら。勝利疑ひあるべからざるを。武勇智略に誇り。勝利は心たゆみて。勾當内侍に迷ひ。酒宴淫樂を事とせられて。重き神祭は心附き給へぬ故に。軍神の加護をかりしなり。身の行ひの善惡邪正をたす。顯

露の政道なり。神幽政事は人智の及ぶ所はあらず。幽顯政事論は委しく記しおけり

龜のますすら

師時の「思ひかね龜のますすら」事といへばためあひたりとさく。嬉しきとある。龜のますすら。龜卜の正占なり。萬葉集に「大舟の津守が占のらんと正はまよりて我がふたりねし。古今集に「かくてひん物とい我もおもひまきころの占ぞ正しかりける。其外も占を正とよみし歌あまたあり。ためあひたりとい。龜卜の五兆の中のかたのあらわれし時。まことなる詞なり。五兆は龜甲の正中は立筋を附くる。下の方を登といひ。上の方を保といふ。其筋の中央より少し上



の方より中より右へ横筋を附くる。是を加美といふ。また中央より。すこし下の方中より左へ横筋をつくるを惠美といひ。その加美と惠美との中の立筋を。多米といふ。この五兆を朱櫻の木より火を燃し焼きて。ひびきあれたる形を見て占ひ判断するなり。多米合たりと。多米ひびきあれ合ひぬれば。多米阿比多里と唱ふるなり。これ吉兆なり。この立筋の下より上へ墨にて引き。小刀にて下より上へ筋の通り筋を入れるなり。都て下より上へとするが。古へのならしなり。周易もまかり。下より上へ。大極より一陽一陰出づるを兩儀といふ。兩儀より各一陽一陰づつ出づるを四象といふ。四象より又各一陽一陰づつ出づるを八卦といふ。此八卦を各下上よかさねつくして。六十四卦となるなり。この人智もて考へ設けたるなれば。龜卜のごとき神術の類と異なり

つくも鬚

伊勢物語より。「百年より一歳たらぬつくも鬚我を戀ふらしおもかげよみゆ。此つくも鬚は。古より江浦草とも。馬尾藻ともいへる説あれど。我徒立入信友の考よろし。つくも鬚は。もの誤なるべし。つくも物のみちたらぬことよて。紫日記より手づつとあるは。手業のたりと。のぬ事。大和吉野郡より九尾村とあるを。つくもとよみ。越前敦賀郡筒村より出だす

布を。九十布と書きて。つくぬのとよめり云々。この説よろしく聞ゆ。彦磨云。信友の考より。つくも鬚は。つくも百の意よて。百よりみちざる故よ。つくもを九十九とかきて。百年より一とせたらぬは。百の一畫たらぬ白髪またといへるなるべし。本草綱目より。海藻生海島上。黒色如亂髮云々。又馬尾藻云々。近海諸地採取。亦作海藻といへる。今の神馬藻シマモ。また穂藻ホモともいふ

女筆女文

當時世より名高き或書家の女。或高貴の御室の御側より仕へぬるを。早くより我をゆして。御歌の添削仰給ふ序より。その女も歌よみ出だしたるをいふかりしよ。傍より御局ありて云く。この女の父の女よいへるより。御館より和様文字かく人よたよりて。手習すべし。歌よむ人あらば隨ひてよみ習ふべし。少女の葵様文字かき。詩文章つくるは。傍よりつらよむ思ふものなり。和様文字かきて。歌よむ女は。ゆかしくあつかしく思はるものなりといまじめしよし語れり。からぶりの書家より。めづらしき大先生なり。故ありて御館をも。先生の名をもあらわしがたけれど。大かたは人もおしぬかりたるべし

武烈天皇御謚名